

東條耿一詩集

寂寥

寂寥は

日暮になると心にヒタヒタと

忍びよる

そして胸の古傷を

鋭いメスでえぐる

傷みに耐へかねた時

私は心のカナリヤに

想ひの文を結んではなす

心のカナリヤは

遙かに杳い緑衣の

星を目ざして

暮靄の彼方に消えてゆく。

（「山桜」昭和九年一月号）

戀の短章（小曲）

戀は

赤きヨウコウ爐です

とける鉛はネ、私でせうか

x

戀は夜空に瞬く星です

それを捉へやうとする

私はネ 阿呆でせうか

x

アダムの盗つた戀は

禁斷の木の實です

私は戀を拾つたので

盲目になつたのでせうか

渚（小曲）

渚に……………

母を憶へば

限りなき波々の音

やさしき 母の子守唄と響き

貝殻を拾ひて 海に投ぐれば

追憶も ほろゝ

私は濡れ濡れて

ひとり 渚の砂よ

〔山桜〕昭和九年一月号

〔山桜〕昭和九年二月号

洪水

濁水は渦を巻きすさまじい勢いで流れる
河岸の家は皆押流されてしまつたのに
子守唄が何處からか聞えてくる

母の子守唄でもない……………

父の子守唄でもない……………

旅で見た町々のやうに判然と記憶には
無いが何處からか聞えてくる子守唄……………

ああ父よ、母よー

たつた一人残された女はその力の無い

腕に一本の棒杭をしつかと抱き乍ら

もはや救ひを呼ぶだけの元氣もない

髪の毛は海草のやうに河中に浮び

刻々増る水嵩に女は眼を閉じた

だが……………その耳になほ子守唄が細々と
聞えてくる。

〔山桜〕昭和九年六月号

顔百態

お前はまだ人間の顔をしてゐない
衷心こころから嬉しい時のお前は
おかめの面を附けた
お目出度い顔をしてゐる

衷心からむらむらと
怒り立つた時のお前は般若の面を
附けた物凄い夜叉の顔をしてゐる

世の中がつまらなくなつた時の
お前はひよつとこの面を附けた
下素根性の顔をしてゐる

百面相だ、百面相だ

そうだお前は眞實百面相だ

お前は生まれ乍らお面を付けて
生れてきたのだ

百面相に哭き百面相に踊る奴だ

お前が今、お面を取つたとて

お前の顔は人間の顔はしてゐない

お前が百面相の面を附けたまゝ

鏡を見て、その鏡の中に

喜びもない怒憤いかりもない悲嘆かなしみもない

無表情の顔を發見した時こそ

それが眞實の人間の顔で

お前のほんとうの顔なんだ。

（「山桜」昭和九年七月号）

春夜詩抄（小曲）

ほとほと

ほとほと

聴える聲音は誰か知ら

戀しきひとの誘いざなひか

近く来るよな來ないよな

耳を澄ませ焦らすよに

春深夜よさを

春深夜を

ええ憎や誰か知ら

ひそやかに

ひそやかに

雨戸敲くは誰か知ら

戀しきひとのしろき手が

私を誑あざわす狐狸か知ら

耳を澄ませば焦らすよに

春深夜を

春深夜を

ええ憎や誰か知ら

こつそりと

こつそりと

マツチを擦るは誰か知ら

消えた私の胸の灯を

仄かに点しまた消して

眼閉まぬこづれば焦らすよに

春深夜を

春深夜を

ええ憎や誰か知ら

馬（童謡）

パパに抱かれて

乗った馬

〔山桜〕昭和九年七月号；蠟人形〕昭和九年九月号）

ほかほか背中が
暖かい

ポツクリポツクリ
歩きだしや
何だかお尻が
くすぐつたい

ポクポク駆ければ
恐くなる
ゆつくり歩けば
いゝ天気

パパに抱かれて
乗った馬
下りれば大きく
見える馬

（「山桜」昭和九年七月号 「詩人時代」昭和九年九月号）

お面・神楽

お面が一つ欲しい
どんなお面でもいゝ、般若の面であらうと
天狗の面であらうとかまひません。

それをすつぱり顔につけたら
私の顔の醜さも隠れるだろう
そしてせめてもの神楽舞につき身をやつたいのです。

私達は生きて居る間、神楽を踊らなければならぬのです。
皆さんは………まさか私の顔がこんなに
醜い容貌かとは思はないでせう
きつと、色の白いやさしい好い男と
思ふかも知れません。

それを見て私はひとり北叟笑乍ら、
皆さんを偽はりつゝ神楽を舞ひたいのです。

世の中にはどんなに多くの

お面をつけた人達が 居るかも知れません。

ああ、お面が一つ欲しい是非欲しい

おかめの面でもひよとこの面でもかまひません。

これで皆さんにもお面が私達には無くってはならないと云ふことが
はつきりとお解りになつたでせう

さあ皆さん お面の欲しい方は私と一緒にお面を 求めませう

……………そして神楽を舞ひませう……………

風船玉（童謡）

うんとふくらませ

うんとふくらませ 風船玉

頬ぺたはらしてうんとふこ

坊やお守に うんとふこ

そーら見る見るふくれ出す

〔山桜〕昭和九年八月号

うんとふくらませ

うんとふくらませ 風船玉

眼の玉くるくるうんとふこ

背中で坊やも 眞似て吹く

そーら母さんに見せてやる

うんとふくらませ

うんとふくらませ 風船玉

頭を振り振りうんとふこ

あんまり吹いたらち切れる

そーらパチンとはち切れる。

母愁の秋

自ら身をせばめせばめて

こんなにも双肩に食入る重圧に一日の

(山桜文芸特輯號 昭和九年八月号)

安息とてない私の傷心に秋は大波の如
うねりうねり纏れた母愁を打寄する

母よ、唯一條の歪んだ感情に、まだこんな
にも私の心は見果てぬ蒼穹の真唯中に
的度もなく浮遊する風船玉だ
涙と共に、只管に湧出する悔情は
描き損ねてはずたずたに画布を断切る
画家の焦心だ

ああだが母よ……………
ひしひしと用赦なく双肩に喰入るこの重圧を
支へ、道標を尋ねてさ迷い疲れ切った
この足は腐敗した大根のようだ
歩き出せばぼろぼろに崩れるこの足……………
血苦笑慟哭しつつ……………
こころの螺せん階段を上り詰めるのは
ああ、いつの日か……………

追憶の秋は今日も怒濤の如く歪んだ
廃船を洗ひ、貝殻は幼時の子守唄を
吐いては飲み、吐いては飲み
尖、尖、母の情感を運ぶ。

蕎麥の花（小曲）

山深きひとつ家なれど
蕎麥の花しろじろ咲きて
ひそやかに秋は來にけり
こころなく歳は長^たけねど
ふくらみぬおもき乳房に
つのりゆく胸のときめき

眞白なる蕎麥の花にも
それとのう夢を偲^ばせ

（「山桜」昭和九年九月号）

せつなしやうるむ眸よ。

〔山桜〕昭和九年九月号

キャンプ（童謡）

白雲は低く流れて

手を出せば届きさうだよ

岩つばめすいすい飛んで

郭公の聲も静かよ

岩傳ひ清水尋ねて

白樺の森に這入れば

湧きかへる蝸の声して

山深くみどり匂ふよ

深々と狭霧生れて
遠山も霧にぼやける
木下透いて風も冷く
点る灯に山も眠るよ

誰かしら（小曲）

こつそりと
こつそりと

マツチを擦るは誰か知ら
消えた私の胸の灯を
仄かに灯ともしまた消して
眼閉まなこづれば焦らすよに

春の夜を
怪しきマツチを擦るのは誰か知ら。

校異：「野の家族」では、最後から二行目は
「木下透いて風も冷し」となっている。
〔山桜〕昭和九年九月号「野の家族」昭和十年四月

秋三唱（小曲）

九月は……
茜の斜光を浴びて
帰る荷馬車の後を慕ふ
少年のおさない
感情です。

十月は……
新妻にあられもない
疑をかけて
寂しがらせた姿です。

十一月は……
留学の子を
波の彼方に送った

〔詩人時代〕昭和九年九月号

母の……
波止場の感触です。

〔詩人時代〕昭和九年十月号「野の家族」昭和十年四月

柚の實（小曲）

送り來し柚の實なれや
ふくいくと冬を匂ひて
ふるさとの影をひそめり

懐かしの母が乳房よ
慕はしの君が面輪よ
想出は 柚に浮びて

齒を入れたまゆらむねに

ほろほると思慕のひろがり
淡き日は 袖に暮れ行く。

帰航（母への手紙）

夜毎、涙腺を揺らす母の白い御手に
綴られた涙の蒼白い花束が
病頭に郷愁を漂はせる

歸り得ぬふるさとを持つあなたの子は
故郷への慕心に、病み疲れた肺臓は
青ごけに埋もつてゐます。

それでも明日の彼方へ……………
帰航を送る挽歌に泣濡るゝ
心の廃港がある

（「山桜」昭和九年十月号）

母よ、今宵あなたへの別れの饗宴に
齒を入れた石榴から肌寒い郷愁は
私の体内に喰入り、ほろほろと肺は
音も無し崩壊てくる

おお母上よ、あなたが涙もて綴られた
蒼白い花束と共に、今こそ黒旗を掲げて
黝い私の廃船が故郷へ歸るのです。

戀の紅糸（民謡）

戀の紅糸繰る宵は
薄い情にひかされて
どこまで伸びる戀ごころ
胸のしごきも空解ける

〔山桜〕昭和九年十月号

着物のたけをかよわせる
絹の糸さへ切れもする
ましてかぼそい戀の糸
切れたところを何としよう

戀の紅糸繰る宵は
ほのかな戀の溜息か
諦めませうの涙かよ
窓の茜の遠あかり。

秋の朝（童謡）

とろりこ温くとい
寝床の中
ちんちん湯沸し いゝ気持ち
竈戸にやちろちろ

（『山桜』昭和九年十月号）

薪燃えて

ぷーぷー御飯も 沸いてゐる

お背戸で父さの

くしゃみした

早よから落葉を おかきだろ

障子も真赤な

朝焼けだ

厩でお馬も 鼻鳴らす。

一本橋渡る(童謡)

渡る 渡るよ 下駄脱いでほい

ほいほいほい ころら ほいほいほい

體を浮かせて 浮かせてほい

一本橋揺れるよ ほいそれほい

(「山桜」昭和九年十月号)

とことんとこ そら滑る

渡る 渡るよ 舵とつてほい

ほいほいほい ころら ほいほいほい

ふうわり浮雲 浮雲ほい

流れに映つて ほいそれほい

とことんとこ そら危い

渡る 渡るよ 一本橋ほい

ほいほいほい ころら ほいほいほい

他見をしないで しないでほい

遠くで鐘が鳴る ほいそれほい

とことんとこ そら落ちる

〔山桜〕昭和九年十一月号

蜜柑に想ふ（小曲）

ふるさとの青き蜜柑よ
わが胸にそつと抱けば
微笑みて母の問ひかく

ふるさとの青き蜜柑よ
わが耳にそつとあつれば
ひたひたと波のよせくる

ふるさとの青き蜜柑よ
わが唇にそつとあつれば
かのきみのべーゼ（接吻）うかびぬ

ふるさとの青き蜜柑よ
ふるさとの青き蜜柑よ
いつしかに泣きつ喰へぬ。

晩秋を知る（民謡）

来るか、来るかゞ
遂 足止めた

……呆けつかれて
やるせな涙……

冷へた 素足に
晩秋を知る。

濱邊にて（小曲）

うす紅の小貝ひろひつ

〔山桜〕 昭和九年十一月号

〔山桜〕 昭和九年十一月号

なつかしさ胸にあふれて
沁々と光りにかざす。

父の貝、母の貝、
はたまた杳つ祖先みそやの
もだしては君の貝など
供へますこれのせつなさ
限りなく涙あふる。

いざ共に抱きつ行かばや
うす紅のあはれ小貝よ
ほとほとと ほとほとと
砂地に沁むる
あつき泪の跡を残しつ……………
あてもなくさまよひて行く。

(山桜 昭和九年十二月号)

冬・斷章

風見は益々癩が強くなり
蠅は日毎、木乃伊の
首輪を綴る。

x

黒猫は研ぎ澄まされた
メスを啜へて
眞闇の中に蹲つた。

私は、もはや
動けない鼠であつた。

〔山桜〕昭和九年十二月号

郷愁

見知らぬ女が
青白い貝殻を綴つて
廂に掛けてゐる。
私の掌上から
しらじらと夢が解けて
立昇る。

滑り臺（童謡）

日溜り小溜まり 滑り臺
光が跳ねて 踊つてさ
行きは登りで 段數へ
歸りは滑るよ スルスルスル
蒼空眺めて スルスルスル

〔山桜〕 昭和九年十二月号

お尻も温くないな スルスルスル。

お池にや 小波 白い波

白鳥も浮んで ゆうらりさ

緋鯉も見えるよ 臺の上

僕が先頭で スルスルスル

影も一緒に スルスルスル

後から後から スルスルスル。

日溜り小溜り 滑り臺

バ
ル
廣
告
氣
球
も
う
つ
と
り
夢
見
て
さ

遠くでサイレン 鳴つてゐる

どこかの小父さんも スルスルスル

お犬を抱いて スルスルスル

僕も負けない スルスルスル。

〔山桜〕昭和九年十二月号）〔詩人時代〕昭和十年四月号）

病床・断片

地震

微かな力にも
時計は運行を中止し
薬瓶は冬眠から醒まされて
神経を尖らせてゐる。

病床

萬物の靈長と誇つてゐた俺も
口端の蠅すら追へなくなつたのか
あれ、蠅の奴！
俺の鼻毛を数へてゐる。

軽業師

するするつと

蜘蛛が天井裏から下りて来た

ほら見給へ！

蜘蛛の奴、おれの鼻の上で

一寸氣取つて切口上を述べてゐるぞ

世界一の曲藝が

これから始まるんだらう。

買はれ人形（小曲）

婚禮の夜に或る娘の歌へるー

思はぬひとに嫁げとて

胸にきざめる初戀の

せつなき文字を何とせう

〔山桜〕昭和十年一月号

思ひは沓し君にとぶ。

十九の春の夢浅く

つれない風のたはむれに

散れば淋しや糸やなぎ

戀のつばめも拗ねて泣く

戀のむくろを着飾りて

こゝろすゝまぬみだれ夜を

買はれぬ人形の悲しさは

泣いて涙で 虹をぬる。

雪達磨（童謡）

御慶の意味にて

こころころ轉がそ、こころんとしよ
やれそれこころんと 雪達磨

〔詩人時代〕昭和十年一月号

ころころころん と

高下駄の緒が切れた。

(笹の葉だけが、青かった)

ころころ轉がそ、ころんとしよ

やれそれころんと 雪達磨

ころころころん と

躓づいた 木の根っこ

(南天の實だけが、赤かった)

ころころ轉がそ、ころんとしよ

やれそれころんと 雪達磨

ころころころん と

二つに破れた 雪達磨

(お手々が急に、冷たいな)

〔山桜〕昭和十年二月号

林 檜（小曲）

するすると、脱がれてゆく
絢びやかな衣装。

滴たるはじらひに微恐怖つゝ
純白な肌をさらす

あはれ、銀の小皿の
林檎よ……。

やくぢ節峠の唄（民謡）

見えるふるさと戸毎の灯り
ひとつ二つと数へた少年の
思出戀し峠に立てば

（『山桜』昭和十年二月号）

寒や月さへ濡れかゝる。

戀し母御よ、おふくる様よ
達者で御座りよかひと眼でよいが
逢ふに逢へないやくざが祟る
追はれ故郷よ、ふるさとよ。

やくざ意地なら人も斬るが
義理と人情の絆は切れぬ
これが未練か、男の涙
結ぶ草鞋の紐に散る。

明日は何處ぞ、のう月様よ
空の鳥さえ埒はあるに
男一匹、安居の宿を
尋ね行く行く三度笠。

（「山桜」昭和十年二月号）

階段

(芝間甫先生に捧ぐ)

それはいくら昇つたとて
果しが無い

肺は壊れかゝつて
青い呼吸いきをする。

宿縁の段階に俺は一匹の
紅蜘蛛を捉へた。

間断無き秒速の狂ひ
降りて来る手術衣とメス。

(「野の家族」 昭和十年四月)

雨の音に想ふ

私は布団の中で凝つといきをひそめて
雨の音を聴いてゐる。

とう……るるるる
とう……るるるる

樋を流れる雨水の音は、胸を病む少女の
臨終の吐息を純白な青春譜になすりつける。
あるひは、私の胸の上にふんわりと被ひ蔽さ
つてくるあのひとのやわらかな聴診器。
ほのぼのと白い花の様に顫へて、探り寄つた
深夜のひそやかな香芬かをりのする囁きと、むせる
様な甘い接吻の後の涙

つうるつうるしるるつうるしるる

つうるつうるしるるつうるしるる

ふるさとの母の顔にたくまる皺が一本一本

マドロス哀歌（民謡）

波をまくらのマドロス稼業
ちやちな浮世に未練はないが
なまじ一夜の契りの夢に
泣いて待つだろう娘あんこを思へや
やるせ涙が頬濡らす

ひろい海原口笛飛ばしや
星も泣き泣き流れて消える
啼くなよ寂しゆてならぬ
男心のそぞろに鈍りや

知らぬ港の灯もうるむ

野暮な命と思ふちやをれど
すさむ心がかなしゆてならぬ
来る日来る日も潮に暮れて
こころ沁々古巣を慕へや

海に侘びしい春がくる

夕暮れ・小暮れ（童謡）

夕暮れ 小暮れ

野の原包む

蜻蛉釣り止めて

お家へ帰ろ

ランプの下で

母さんも待たう。

野の沼 静寂か

どろんと澄んで

ざわざわ芒

誰かゝ呼ぶよ

〔野の家族〕 昭和十年四月

おゝ怖い
後見ずに帰ろ。

夕暮れ 小暮れ
ひつそり野原
ひたひた下駄の
音さへ寂しさび
里の遠灯とん一つ
ちろちろ招く。

便り（小唄）

女房は安産
男だそうな。
母御は達者で
繭いと引くそうな。

〔野の家族〕昭和十年四月

月の光りを
塹壕に浴びて、

守護札^ふまで添へた
便りを見れば

高梁枕も

苦にやならぬ。

病床哀戀賦（小曲）

ほゝよせて あつきさゝやき
うつとりと ながるゝちしほ
まぼろしの こひとてうれし
みとりめの しろきふくにも
やははだの きみをおもひて
せつなしや うるむひとみよ

〔詩人時代〕昭和十年四月号

むねやめる　せんなきみなれ
たそがれて　けふもむなしく
しらかべに　はくといきよ

大境の子守唄

終日

病金魚の如く寝台に浮かべば
郷愁は疼く病胸を貫き
ふかぶかと克明の死脈を越えて
おゝ、流れて来る子守唄がある。

白壁に冬蠅は不動と合掌し
晩鴉は枯木に苛々　と祈れど
嗚呼、蒼白の輪燈は
光明無明の大境に明滅し

（『山桜』昭和十年五月号）

凜、凜と空中に映へ

地下に響きて

父ならず、母ならず

将又、祖先にあらず

聴こえ来る、響き来る

……………誰が哀音ぞ。

がば!!と、どす黒き喀血は

終曲に一枚の地圖を加へて

燃上がり、かき消ゆる輪燈よ。

のた打ちつ、仄めぐり

潮の引く如く消えて行く

あゝ……………消えて行く

……………子守唄よ

（「山桜」昭和十年五月号）

想ひ出

心の空に流星は

今宵も逝きたり

蕭條の

砂原杳く續く靴跡は

僕の微笑む人生のコース……………

傍に添へる小刻みな木履の跡は

彼女の明朗な戀愛のコース……………

されど

二條の線の消え行くところ

あゝ……………永久に悲し

破鏡の流星は逝く

過し方には、

涙する雪洞の灯

揺らめきて……………。

郷愁譜

季節のサキソフォンは、
マドリガルを奏で
緑の曲馬團旗^{サーカス}を靡かせて
大陸を南へ、南へ……………
渡るというもの。

ひび割れた、いかつい横顔を
ひきむしられた私は
今日も大陸に向かつて
高々と手を振るのであるが……………

季節の觸手に持ち去られた灰の脱穴は
ぎくぎくと痛み、哀愁の白鳩は

〔山桜〕昭和十年五月号

もう私に反すうしては呉れない。
千嗟、今日も ひねもす
蹠跟と想ひ出の貝殻を綴れば
おお、聴こえるよ
季節の奏でるサキソフォンの
郷愁譜……………。

愛人の歌

わが限りなき思慕のひとに

愛人よ。愛人よ。
朝、眼が醒めたら
そつと口の中でそう云つて御覧。
あの人の甘い體臭が蘇つて来ます。
カルシウムの体内を廻るやうに、
お花畑の花蜜のやうに、

（「山桜」昭和十年六月号）

みんな昇降機エレベーターのやうに膨らんで来るあのひとへのアッピールです。

愛人よ。愛人よ。

晝の休憩のひと時を、螺せん階段に立つて、そつと口の中でそう云つて御覧。
オフィスに疲れたあなたは、夏海邊を散歩するでせう。あのひとの微笑みはヨットの様に海を滑り、鷗のやうに波に散るでせう。

愛人よ。愛人よ。

あなたが懐郷病乡愁に寂しくなつた時
そつと口の中でそう云つて御覧。
ふるさとのゆるやかに廻る水車の銀玉を浴びた片隅に、雲雀の飛立つ段々畑の丘に、馬車に轆かれて死んだ久さんの墓の土饅頭の周圍にはねるど端の日當りのいゝ路畑に、眠りそうな牛の反すうする牧場に、あのひとの微笑みは柔かな若草になつて青々と萌える

でせう。そしてじやすみんのやうに、あな
たの心に蘇つて来るでせう。

春の悲歌（小曲）

未刊詩集「銀河に泣く」より

われに優しきひとあらば
胸の痛みを心の傷を
笑める愛撫に訴えつゝ
甘へてもみん春宵を。

われに優しきひとあらば
花の訪なう窓の邊に
君が歌音の花詩集
涙ながしつ聞かうもの。

（「山桜」昭和十年六月号）

われに優しきひとあらば
胸にきざめる初戀の
思ひ出永久に育みつゝ
語り歌はんよもすがら。

されども、われは胸病めぬ
嘆きのなかに 幻を
求めまさぐるかたいなれ
「……………あはれ、優しきひとあらば」

野道（小曲）

別れて歸る野道には
ほろほろ野鳩が啼いてゐた。

別れて歸る野道には
月もしろじろ照るばかり。

（「山桜」昭和十年六月号）

別れて歸る野道には
忘れな草の花の色。

日光ばやし（小唄）

ハア―

山は男體　ハツソレソレ

三国一よ　サツサヤレコノ

婿にとりたい婿にとりたい

器量者

ソーレヤレコノホイトコリヤセ

ヤンレヤレソレホホイノホイ。

ハア―

霧の衣を　ハツソレソレ

さらりと脱げば

〔山桜〕昭和十年六月号

サツサヤレコノ

仰ぐ華嚴も仰ぐ華嚴も

虹のかけ

ソーレヤレコノホイトコリヤセ
ヤンレヤレソレホホイノホイ。

ハア

左甚五の ハツソレソレ

眠りの猫に

サツサヤレコノ

龍も啼きます龍も啼きます

ソーレヤレコノホイトコリヤセ
ヤンレヤレソレホホイノホイ。

〔詩人時代〕昭和十年六月号

春雨戀慕抄（小曲）

ひそひそと
ひそひそと

胸にやさしく囁くは

いとしききみのみ言葉か
接吻べいせに せしほろよひか

いやいや あれは……………

春雨 こそめ 窓の雨

ほろほろと

ほろほろと

忍びやかなる骸すずり韻ね音は

胸にやさしく顔埋めて

悲戀を哭きし君なるか

いやいや あれは……………

春雨 こそめ 窓の雨

忘りよとて
忘りよとて

消せど消えざる面影を
思い出だせと春の夜を
きみの泪か わが泣な聲か
いやいや あれは……………

春雨 こそめ 窓の雨

悲戀はつこひを

悲戀を

秘めて嫁いだきみ故に
捨て得ぬ性の悲しさは
今宵も窓に泣き濡るゝ
ほほ ほんに あれは……………

春雨 こそめ 戀の雨

〔山桜〕昭和十年七月号

忍從の謝肉祭カアニバル

騷雨あめにがつくり首垂れた軍鶏の姿を
俺は、俺の姿の中に見たくないのだ

腹を見せて浮かんだ病金魚きんぎょの呼吸を
俺は、俺の息吹の中に識りたくないのだ。

よしや腐れ爛れた四肢であつても
ぎりぎり蝕まれる病肺はいに拍車を駆けよと
俺は、俺の惨めな容態すがたを投げ棄うつて
おお、傲然と反りかへるのだ。

譬へ、解剖台にメスは閃き待たうと
いかつい悪魔の横顔をぐわんと擲はりつけて
俺は、傲然と嘯なき、
冷たき歲月の距離マクサスを睥睨するのだ
そして、最後の血潮の一滴まで

灼熱と燃え狂ひ、
俺は、俺の肉体もて捧ぐるのだ
呼呼……………忍従の謝肉祭を……………

合圖（民謡）

びろゝ口笛

合圖だ ホイ

雨戸 細目に

開いたぞ ホイ

お絹さーかよ

聲かけりや

憎や しもつた

親父だ ホイ

〔山桜〕昭和十年七月号

乳房

或るコミュニニストの妻に代りて

夫は獄舎に疲労の蹠を虐めて

蒼白に錆び付く苦々しきおきての陰影に哭き

いじらしき愛児は無慈悲な表情と剥落する

母親の乳房に氷柱の悲沫を泣き訴むる

憧憬は朽ち、はらからの白き眼裏に追はれ

音もなく崩壊れゆく信念の思想……

吁嗟今ぞ、つかれた網膜に見る時代に敗惨し

土像の、あはれ、身を裂く泥滅への生活よ

乳房よ、落魄の凋落きつづれよ

夢を破壊し、團欒の葩片をむしり、病患の

肺臓を侵して、日毎黝すみ、夜毎萎れ果て

悶絶の、いきどほりの、焦燥よ。

されど

バイバイ乳々よ、乳々よと乳房まさぐる

なれ愛兒あればこそ、尚生きて死ぬ

愛兒愛すればこそ、よれよれの乳房なりとて

悲しみの母體なりとて、榮冠を孕み

赫赫と大鵬を呼び……………

白鳩に寄す（小曲）

白鳩の……………

…………… ああ白鳩の

仄かな胸のふくらみは

きみの乳房にやうも似た

甘き香芬よ ときめきよ

ほろほろ浮ぶ面影よ。

（「山桜」昭和十年八月号）

白鳩の……………

……………ああ白鳩の

あかくうるめるつぶら瞳は

きみの瞳にやうも似た

静かな微笑よはじらひよ

ほろほろ泛ぶ接吻よ

散りし純情……………

……………破壊れ夢

果敢なきものよ追憶よ

ああ白鳩の白鳩の

純白きやは肌抱きつゝ

淡き灯影の窓に凭る

（『山桜』昭和十年八月号）

Chocolate のゆづぐれ

異人墓地の見える海邊を
Canvas と Pastel を抱えた新嘉坡の少女は
チエホフのやうな貌をして
スカート裾から貝殻を落としては
歩んだ。

貝殻は砂の中で みんなひとつ
寂しさに顫えながら それでも
ひらひら翻る少女のスカートに
サインすることを忘れない。

やがて貝殻たちは
侘しい潮鳴りをギターのように聞き乍ら
新嘉坡の港から来た金口を喫付け
ごとごとと殻の中に赤いベレエを
かむつて眠る。

かうして、みんな みんな
静かに生れる
Chocolate 色のゆぶくれ……………

〔山桜〕昭和十年九月号

ねがひ（小曲）

あはれ われ
微風とならまし

匂やかなきみのはだへに
そと甘えつゝ、はじらひつゝ
わが想ひ かたらん

あはれ われ
蝸とならまし

きみ住みたまふ窓の邊に
やさしきそが友となりてよ
ひねもすを奏で歌はん

あはれ われ
貝殻とならまし

やさしきひと
來りて拾ふ時
微笑みてその掌上に眠らん

あはれ われ
せつなる ねがひ……………

（「山桜」昭和十年九月号）

金婚式

い^あか^あつ^あい^あ掟^あの息吹は
病患^{いたつき}の頬を雀^あり、切々と骨を碎きて
今宵もわが冷床^{ふしど}に冷笑の笞鞭打ち
たぶ、たぶ、と嘯く。

あゝ 煙突^{ファナ}よ、浚漉船^{クリストマン}よ
がらがらと黒き煤を飛翔^{とば}し、重油^{マシン}を飛沫^{にほは}せ
夢の如、白き眠の如、遙か幻滅^なの彼方
滔々と流れ去り、消え去り行く渦巻^{なが}、
誰^よが祝祭^{よさこひ}ぞ、わが冷床^{ふしど}を襲^つき
獄窓^{しじま}の静寂揺すつて
るる……るるりん……

流れ来る、響き来る、金婚式^{トレモロ}の顫音……

闇を斷ち、宙に轉び
さめざめと獄窓^まを仰げば、月光^{つきかけ}は亡妻^つを映像^うし、

白々とわが瘦驅を哭く
その中に巍然と存在し、傲然と嘯く
人生のフルートよ
運命のサクソフォンよ。

乾枯びぬ乳房なりとて、
よれよれの臥床なりとて
われを待ち、われを迎ふる團樂あらば
貧しくも、泌々と、心濡るゝを……………

吁々 亡妻よ、
夢の如、現實の如、歌音聞きつゝ
今宵も白びた無精鬚をまさぐり
われは戀ふ、おん身の體臭を、
あゝ……………金婚式を……………。

〔詩人時代〕昭和十年九月号

酸漿の詩

ほほづき、ほほづき

そは圓らなるかの赤きメノウ
はた麗はしきかの珊瑚。

われ、その美しさに魂こころうばはれ
その麗はしさにそと接吻くちづけけみて
ああ かくも手痛き
そが苦味を知れり。

されど

われいまだ若く人の世の
まことの憂さを知らず
沁々とその苦味を忘れ得ず。

ほほづき、ほほづき

そは赤く、苦き

はた忘れ得ぬ、思い出の苦味
ああ、さればわれ
ほほづきの
その苦味を愛す。

ひめぐと（小曲）

燃え燃ゆる……………
情熱の滾りそ秘めて
寄り添へば、寄り添ふて
闇にからむ
掌とて汗ばむ。

はじめての……………
接吻に、接吻に
羞恥ひつ、崩るゝうなじ
仄かにも闇をくまどり

（『山桜』昭和十年十月号）

わが唇に淡く残れる
紅の香の甘きもうれし

感傷の、胸とてうづき

しのびかに、しのびかに

行きつ、戻りつ……………

只、それだけに

ああかくもわが魂は躍るか

夜半の密會……………

近作集より

子供

父は逞しい背を向けて背負^{をんぶ}してやらうといふ

母はやはらかい膝の上に抱っこしてやらうといふ、

だのに子供は、どちらにも嫌、嫌をして

獨り危つかしい足どりでよちよちと歩み出すのだ。

（「山桜」昭和十年十月号）

白鳥の浮んでゐる公園の池の淵の回轉木馬に乗つてから、
七色の風車のくるくる廻つてゐる紙芝居の屋台店を覗いて、
鳩ポツポが仲良く豆を喰べてゐる観音様で少し遊んで、
映画館の音楽も聞かせてやるよ。
それから坊やの好きなチョコレートを一ぱい買つて……………
と父はいふ。

含むととろりと甘い母乳をたくさん呑み乍ら

昨日の續きの面白い御伽噺をお聞き。

それに飽きたら母ちゃん優しい子守唄で静かにお寝みね。

屹度いつもの綺麗な夢の國から美しい小人達がどつさり

お玩具を持つて遊びに来るから……………と母はいふ。

だのに子供はどちらにも嫌、嫌をして

庭のまだ熟れない青い蜜柑が食べたいといふ

お池の金魚を掴んで来て石で潰すのだといふ

父は困つてどうしたものだらうと母にいふ

母も困つてどうしたものだらうと父にいふ
二人のもてあましてゐる子供は不思議さうに
父と母の顔を見る。その黒曜石の様な瞳には
おもうい灰色の空がどんよりと映つてゐる。

（山桜「昭和十年十一月号」）

彼女とゆふぐれ

乳房は海に續いてゐるのだらうか

貴女の肉體からだの中を小人のやうに歩き廻る私に

辛い潮の香が痛く咽喉のどに沁み、波に打上げられた海草が乾枯びて生臭い。

私の立つてゐる丘の向ふにも大きな丘があ

つて疎らな雑木林を透いて砂丘は沓く何處

までも伸びてゐるのか、血のやうな夕焼けが

その向ふにある。

私は不圖懐かしい母乳の匂を聴いて

丘から丘を行つたり來たりする。

誰も通らないと思つてゐたのに、その道には煙草の吸殻が棄ててあつて寂寥しい。

ゆふぐれがかあてんをひろげて行くので

海水の溜まつてゐさうな窪地に

貝殻は喪章のやうに侘しいといふのか

少しも弾んではくれないゴム毬のやうな
戀情を抱いて

私はゆふぐれの丘を下る。

（「蠟人形」昭和十年十一月号）

祈り（小曲）

實にきみよ はかなからずや
春の野に懸れる虹の
窓の邊に寄する櫻の
若き日のあまたの戀の。

ひとゝきの 美酒醉寐の
みじか夜のそのひめぐとの
ものみなの世のたのしさは
木梢なる、銀の白露。

さこそあれ、はかなき者は
たゞにこそ天にならへて
とむらはむ、曇る思ひを
祈るかな、憂さし運命を。

槍

私の恐迫観念症より

ごろりと横になると定つて
私の腹を狙ふ鋭どい槍がある

何處の誰奴がどう狙ふのかは知らないが
研澄まされた穂尖がピカリ

ピカリ 空間に閃き

見えない、そ奴の、殺気立つた眼が
凝乎と私の腹を凝視しているのだ

私はもう怖ろしさに全身がおのゝいて

無我夢中に跳起きやうとするのだが

一寸でも動いたら、その瞬間！

槍は私の腹を貫ぬくだらう。

全身の何處が痛んでも

腹にぐつと力を入れて耐えるものなのに
その腹を突尖されて

一體、何處で痛みに耐へよう

槍は秒速の隙も興へず、チリ、チリと
私の腹を狙つて

近寄り

遠退き

尚もキラキラと空間に閃いてゐる

私は何に縊ろう、誰の力を求めよう

然し、幾ら悶搔いたとて、齒痒んだとて

この場合どうなるものか

私は悲しく諦めて静かに眼を閉じる

悲しくも諦観し、眼を閉じれば

おお、ありありと

名も知らぬ美しい花が咲いて繞る

仄かなるその香が馥郁と私を包んでめぐる……………

おお、繞る……………

花言葉（小曲）

ひそかにあなたを戀してた
あたしは赤い鬱金香ちゆうりつぷ

甘い囁き 戀の雨
濡れて育つた風信子ヒヤシンス
想ひは永劫いつまでかはらない
赤紫のライラック

四ツ葉、クローヴァー、櫻草
可憐な戀のジャスミンよ
見せて上げたいこの純情
どうして想ひが通ふやら
あなたの胸の戀占ひ

若しやさうでなかつたら？
迷つて焦がれてとつおいつ
あはれなマーガレットのあたしなの
こんなに煩惱のシネリア
いつも憂鬱^{メラシ}のゼラニウム
片輪想ひの矢車草
淋しい戀の花なのよ

胸に開いて胸に散る
スギトピイやら君影草
いつか悲しい想ひ出の
忽忘草になりました。

（山桜「昭和十年十二月号」）

海 亀

海亀の海の匂よ
こつこつと甲こつを叩けば
ひえびえとつたふ空む虚なしさ

こぞの夏、君とあそびし
房総の海を憶ひて
黙念とひとり佇ずみ
色あせし夢を偲ば
ほろほろと身にしむ憂ひ

海亀の海の匂い
こつこつと甲こつを叩きて
しみじみと涙ながしぬ

(昭和十年「蠟人形」十二月号)

ゆふぐれの中の私

ゆふぐれになると定つて私の視野の中へ這入つて怯て伊達巻を解く女がある

片隅の黒色のかあてんの蔭に

私の純白い寝臺があるからだろうか

その女はいつもひようひようと鳴らない口笛を鳴らしてゐる

その女は素早く私を脇の下に包んでしまふ

それは親鳩の愛撫のやうに優しく

それは母さんのお乳房のやうに甘く

その女は鋭どい銀の針で突然私の唇にお黙りをしてしまふ

それは妖精の王子様の悪戯のやうに

それは父さんのお折檻のやうに

その女の姿を見ると私は何もかも解らなくなつてしまふ

それはお伽國の魔法の杖に觸れたやうに

それはその女ひとを見たようでもあるし見ないようでもある
ように

私はその女ひとが鳥のやうに無氣味で怖い

私はその女が雛鳥のやうに懐しく可愛い

私はその女に伊達巻を解くことを教えはしない
だのに、ゆふぐれになると定つて

私の視野の中を

物憂く

掠め

突つ走り

ひよろひよると鳴らない口笛を鳴らし乍ら

伊達巻を解く女がある

（「蠟人形」昭和十年十二月号）

たそがれの魔術師

たそがれの花はひっそりと呼吸をひそめ
あの女は私の眼前に純白い肉體を展げて
碧玉い眼を瞑る

そして真黒い服を纏った空虚な匂のする侏儒が黴臭い
片隅から手術台を曳出すと、私は口に呪文を唱へ乍ら
恐恐でも、手馴れた様を見せてメスを握る

こん度は真紅な服を纏った獣類の臭氣のする侏儒が
純白な絹布を裸體の女の上に覆ると私の全身は繊細
に顫ひを呼び、唇まで蒼白になるがそれは彼等に解
らない

花花は態を静め、呼吸を抹殺す
私は突如、女の肉體にメスを加れる
瞬く間に首を切り、乳房を削り股を断つが

その女の歔歔は矢つ張り私の情をぐいぐい引き筆るので
私のメスを持つ手は石のやうに重くなるので、ああ、
私は何度こんな魔術を中止しようと想つたか知れない
でも獣類の臭氣の失なつた青い侏儒が急いで純白な
絹布を剥取ると、あの女は純白い肉體を包み乍ら碧
玉い眼を開いて微笑むので……………

たそがれ花はまた賑やかな呼吸をはじめ

病猿の詩

閨房の女猿は寄り添へど
病める猿は悲しげに
夕べの星をさしのぞく

肌はだへにさむき生活なりはひに

（山桜「昭和十一年一月号」）

眼はうすれ、毛はさびれ
ありやなしやの息凍ゆ

想ひ常世に馳せばとて
既にきはまる生命ゆゑ
こころ建つれどいたましや
あるがまゝなるきぬぎぬに
深山の温泉の香を包み
病める猿は杖取りつ

遣瀬なしとや想いけん
淋しく、苦し、掌の
銀の小鈴ぞうち鳴らす。

一九三六、一、十五

〔山桜〕昭和十一年二月号

葬列のあるくれがた

くれがた廃墟のやうなこの村にも
蜜柑色の灯が点ると
風のやうに流れ出す葬列がある

銀の刺繡の送り人、銀の牽牛、真中に取囲れ
た銀の柩、何もかも銀色の長い葬列に聲音も
なく、聲も無く、遅時の正月を迎へた松飾り
の村を霧のやうにひっそりと覗いて行く

遊び呆れて母の膝に寝る子供等の夢に
新たな年に幸多かれと祈る年寄達の想念に
働き疲れた若者等にせめてもの夜の絆を結ぶ
娘等の肉体の底に
なほこれら哀しい葬列は影のごとく練り歩く
のであろうか

私は道端にとろとろ枯柴を焚いて葬列を見送
った。しかしそれはいつまで見送つても断れ
ることがなかった

憂愁かなしみに疼く私の胸に遠くふるさとから寄せる
潮風がおもたい

ああ私はいつの頃からこの哀美うつくしい葬列を見
るようになったのであらう……………

くれがた焙絵あぶりだしのやうに浮ぶ銀色の葬列は

ひっそりと跽音もなく、聲も無し

私の心の村にいつまでも続く……………

羽子をつく

おとなびしわれにてあれど

苦しみの堪えがたければ

妹の羽子板取りて

〔蠟人形〕昭和十一年二月読者作品号推薦詩集〕

たわむれに羽子をばつきぬ

松飾り緑のかけに

玉砂利白き奥庭おくどに

あるまじき狂ひごとかや
羽子の音こつんこつんと
ひそやかに静寂しじまを縫ぬひて

たはむれにつきてみれど
こぞの初春はる追羽子つきし
かの君のかの日の姿
眼に映り消えもやらねば
苦しさをひとしほつゝのる

おとなびしわれにてあれど
苦しさを堪えがたければ
たはむれの羽子をつきつゝ
いつしかに涙ながしぬ

葬 列

白日の強靱な光線ひかりを浴びて
遂に炎天の草叢にのびてしまつた男の
爛れた眼には最早一抹の光りも通はない
ジクジクとうす汚れた繻帯に滲み出す濃汁に
芬芬と飛び交ふ蒼蠅の群

宿命の定法の中に斃れたこの腐肉を
私は抱いて哀しく草叢に寝ねむつた
灰かに頬に冷たい青草の匂、屍より漂
ひ出る芳醇な悪臭の色を縫つて悠久な
青空を静かに飛ぶ白雲

ゆらゆらとよろめき、がつがつと重い
足どりで眞黒い一群の葬列が微風のご

〔蠟人形〕 昭和十一年二月号

とく傍を掠める私達を見て、送り人の中からペツと唾を投げたのは、紛れもなくアリストテレスに違ひない

その慄つとする白眼を見ても直ぐわかる

僅かに優しく目禮を置いていつたのは

確かプラトン。ニイチ工はせゝら嘲ひ

カントは横そっぽを向いて……………

凡ゆる侮蔑と、唾棄と、憐愍が炎のやうに

渦巻き、押流れ

まだ見たことのないこの葬列は私の視

野の中を西から東へ音も無く消えて行つた

後には白日を翳る濃汁の臭氣と

芬芬と飛び交ふ蒼蠅の群と

炎天の草叢にのびてしまつた腐れ屍に

はまだ何處からかひつそりと通ふ息吹

きがあるのであらう

莊嚴な音楽がすずしくその咽喉より流

れ出てゐた

ああ此處にも彼等の識らない眞理が生
まれてゐた

黒き馬車（小曲）

濃碧なる空はすゞしく
馨りよき薔薇の群あり
賑やかに鳥も歌ひて
眼路はるか續く徑なり

花花の匂點して
銀の馬、銀の鞭あて
ひそやかに今し過ぎ行く
うるはしの黒き馬車あり

幌かげの人は見えねど
こぼれるは甘き囁き

〔山桜〕昭和十一年三月号

愉しげに笑い落して
うつうつと酔へる馬車なり

何時までか續く旅なる
わが胸の白き徑道を。

ひそやかに今し過ぎ行く
うるはしの黒き馬車なり。

そんな夜

そんな夜

あなたの瞳は月夜の澄んだ湖になるので
私は銀の魚になつてピチピチ泳ぎ廻る

そしてあなたの黒髪は匂高い青麦の丘になるので、

（「山桜」昭和十一年三月号）

私は終日^{しゅうじつ}るりりり麦笛を吹き乍ら雲雀の巢^すを尋ねる

そしてあなたの眉は紫罌粟^しの群咲いてある堤になるので、

私は瑠璃^{スレッキ}の洋杖^{スレッキ}をふり振り陽気になつて何べんも行つたり來たりする

そしてあなたの紅唇^{くちびる}は瑞瑞しく熟れた苺畑になるので、

私は針を持たない蜜蜂になつてちゆうちゆう吸ひまはる

そしてあなたの乳房^{たあれ}は誰も知らない宝物^{たから}の山になるので、

私は妖精^{フェアリー}の侏儒^{こびと}になつて銀の鶴嘴^{つるぎ}を入れる

そしてあなたの肉体は焼立ての柔かい麵麩^{めんぷ}になるので、私は

飢えた子供になつて戴いてしまふ

そして、そんな夜

あなたはまだ若いくせに隠してゐた地味な装身珠^{くひなまじり}を周章^{しゅうしやう}てて
落してしまふのです。

〔蠟人形〕昭和十一年三月号

散歩

踏んでしまふには惜しい嫩草。病院の垣に添ふて行くと微風まで青い。一寸伊達巻にでも巻いて見たくなる青空。雲雀の唄が幾つでも零れて来る。小川は無せいけれど、何處かせでひっそり透蠶あの生れる音がする。

GOSTOPのやうに氣取つて大きく手をひろげてゐる蜘蛛の巣。ちよいと啄ばんでしまつた愛らしい存在よ、殺さうと生かさうと私の思ひのまま。けれど私は寛大主義者、愉快に散歩しなければならぬ。
ふうつと吹飛ばすとするくる舞つて行く小さな生命。私のやうに

道端の破損これた淡暗い小屋を覗くと、泥土つちに塗れてこつこつ骨髄を造つてゐる人。こちら向いたら、どすどすすきいのやうな瞳。傍に積まれてある骨髄にゆくりなくも泛んでくる幾つかの面影。ふうつんと匂ふ静寂を私はこよなく愛する。

道は白く息づいて何處までも續いてゐる。空ばかり見ると、ひっそり翔ける銀の馬車があるやうで私はふと目許めに妖精フェアリーの長い睫毛を感じる。チラツと傍らを掠めて行くセルの明るい緑色。春は何處かにミレーのやうなペインターを隠してゐるに違ひない。

桐の花

桐の花の下に佇つと
鼓動は昂かつた

桐の花びらを噛むと
ほろほろと苦い、ぼくは胸が熱くなつた。

つひ知らず切裂いた花びらに
つうーん つうーんと
ぼくは水つぼい寥しさをなめた。

せめて咲^{ひら}いてる間を
今日もまた見る花なのに
何故にかうも懐しいのか
苛^{いら}だたしいのか 悲しいのか

〔山桜〕昭和十一年六月号

桐の花よ。

桐の花は紫ぼかし

何故にお前は花をつけた……。

傷

秋近き風のまろびかに

湯上がりのすがしき憩ひ。

愛しみつ、繻帯を除けば

花石榴顛ふかに群れひらき

ふとも流れ来るにほひ。

訝しみ、うち見れば

黒蟻のあまた集ひて

花びらのへりより覗き、

あるは仄紅きおくがを揺りて

〔山桜〕昭和十一年九月号〕

ふかふかと蜜吸^とる蜂の
こそばゆげ、見えつ
隠れつ……。。

ゆふぐれ

ゆふぐれになると、雀のようにはしやぎだす子供達！
けれどまだあたりは、大地に酔ひ痴れてゐる酔漢の臭い息のやうに熱い。

棕櫚の葉に戯れてゐる小さな風
子供達はぶらんこに乗つて夕焼けの空高く
上つて行く。

夕月のやうに白い脛を見せて
子供達よ、
ふるさとの空に挨拶をおし。
ぶらんこは明るい音をたて

（「山桜」昭和十一年十月号）

子供達の笑ひ聲が
紅い花びらのやうに落ちて来る。

傍をそつと神さまの白い散歩
ああ ゆふぐれよ。

繻帯の白さを巻いて
私はまだこんな美しい風景の中に
立つてゐた。

青 鳩

朝方眼帯を除つてみた
鬱たうしいところも繻帯と共に取替へて
さつぱりとした気持ちで病棟いを出る
芒の徑 團栗いの林 百舌の聲がきんきん沁みる
あいつの悪戯しわざだらう

（「山桜」昭和十一年十月号）

枯枝に蛙がいくつも刺してある

さうかさうだおれも確かに死ぬことはあるんだ
うつろな胸をつとつきぬけてつたのはその聲だつたか
眼見ゆればこそその空の色 垣根越しても娑婆の風だ
どりやおれも青鳩でも飛ばさうかな
ふるさとの山脈やまが遙かに青い

雨 後

痛々しいほど 叩きのめされてる
なかには 中腰をへし折られたのもある
そのまゝ みんな仰向いて 花をつけてる
しかも 美しさに遜色がないんだ
おお ボン・ヂユウル・コスモスの花族はなたち
人はうつかり仰向くと泥のなかに足をつつ込む。

〔四季〕昭和十二年一月号

〔山桜〕昭和十二年一月号

少年

北の窓だけが開いている。そこから夕陽がちよろちよろ零れ。

半ばは壊れた積木のお城が、部屋一ぱいにひろげた世界地図を占領して見える。その傍のちよつぴり覗いてゐる青い畳へ、

べつたり頬を押しつけて大の字なりにへたばつてゐるのは、
確かに王子さまらしい。

ところどころきらきら光るサーベルを引き抜き、

ナポレオンが何だ！ 太閤が何だ！ お父さんだつてお母さんだつて、

なんだつてかんだつて、 ぼくの邪魔をしようなら、

みんな平らげてしまふ、と意気まいてゐる。

（山桜）昭和十二年二月号

霽

火葬場の姿は見えない

霽の中から

念佛の聲 類白の歌

静かだな 爽やかだな いや和やかだな

ひとり閑雅な舌鼓をうち

まがつた指も器用に 私は

朝餉の箸をつごかしてゐる

(四季 昭和十二年二月号)
(山桜 昭和十二年三月号)

望郷臺

故郷よ 故郷よ 私の向いた方向に お前は居るのか
いや居るに違ひない 幼い頃に別れたなりで
私はお前を覚えてゐない ああ 病んでゐる身の逢ひには行けず
呼べば訝は返つて来るが 羨しいぞよ 紅蜻蛉

椰子の実

「眉毛もない 鼻もない
みれば見るほど
死んだお父さんそつくりよ……………」
こよひもまた寮をぬけ

（「文学界」昭和十二年二月号）
（「山桜」昭和十四年四月号に舊作として）

ひとり赤松の幹に凭れて
あなたは抱き 涙を流し さうして
飽くことなく愛撫する 椰子の実を

おお椰子の実よ お前もまた
故郷を知らぬ子
少女の腕に軽くあれ

誕生

風が吹く 紙戸を閉める 雪が降る 懐炉を点す
不自由な 盲ひの身の 明け暮れを 手塩にかけて
鶯の 一つの歌の誕生を 心密かに待つてゐる
沈黙の佳人 不屈の禅師 ああこの寮友ともに跪拜する

〔山桜〕昭和十二年三月号

〔山桜〕昭和十二年五月号

舞踏聖歌

灯が消える 灯が点る 雲に風さへ加はつて
時折不氣味な 音を立て

玻璃扉へ咲くのは 雪の華
死報の鐘が 病棟の 周囲をめぐつて 木霊する

今人々は踊つてる 言葉もなく 聲もなく
無言の裡に踊つてる

形而上の踊りです さう形而上の踊りです

どうやら吹雪になりました

たいそう寒気が滲みますな

地球が冷えて行くのでせう

さあどうぞおあたりなさい

お湯の滾りも心よい

何かのどかな晩ですね

天國地國が一つになつた

何故かそんな氣がします

二列に並んだ 寢床^{ベッド}では 病んだ金魚のそれほどに
微かな呼吸が生れてる

吊つた布團や 松葉杖 物云ひたげな 表情です

仄明りうすら漂ふ その真ん中の 寢床では

口紅ほどの 血を吐いて

死んだ少女が 眠つてる

その枕元で 友の手が 可愛い鬘を 結^あんである

結んである 鬘を眺めて 人々は 心密かに感じてる

同じいやうに或るものを

それは等しく 無言の裡に 感じ合つてるものでした

今人々は踊つてる 言葉もなく 聲もなく

無言の裡に踊つてる

形而上の踊りです さう形而上の踊りです

世界の普遍の

生命いのちの中の

和解の出来ぬ 二つのちから

その合一ぢやないですか……………

灯が消える 灯が点る 吹雪吹ふいて 夜が更ける

死報の鐘がはるばると

村々めぐつて 鳴つてゐる 歌つてゐる 鳴つてゐる

霧の夜の風景に詠める歌

その他、一九三六年作品集

向ひの山脈に霧が湧き それがこちらへ移つて来る

月は今中空 雲は一ひら風もない

足下に辛夷の一本 その白い花かけを透いて

（山桜「昭和十二年五月号」）

寮舎は遠く山峡に眠つてゐる

激しい議論の後 友は去り 私は暫くをこの美しい風景に見入る

君は口の酸っぱくなるほど人間を説いた 偉いと思ふ しかし

君はあの病床の夥しい肉塊を知つて得よう さうして自己を

生き乍ら腐つて行く亡んで行く肉體に

何の精神 何の立派な統一性があらう

否定し給へ 否定する事だ 否定し去つた後にこそ

新しく生れる血の滾りを覚え

肉の孕むのを知るだらう ああしかし……

霧がこちらの山を登つて来る 寮の灯はもう見えない

夜は三更 この風景の斜面に佇つて

私は心にはげしく立ちすくむ

（「山桜」昭和十二年六月号）

鞭の下の歌

ちちよ ちちよ

いかなればかくも激しく 狂ほしく

はた切なく われのみを打ちたまふや

飛び来る鞭のきびしきに耐え兼ね

暗き水面の只中を泳ぎ悶轉まろべど

石塊いしくれの重き袖は沈み 裳裾は蛇の如く足に絡みて

はや濁水はわれを呑まんとす

おお わがちちよ

なにとて おん身 われを殺さむとするぞ

死にたくはなし！ 死にたくはなし！

卑しく 空しく いはれなき汚辱の下に死にたくはなし！

好みてかくも醜く 病みさらばへるにあらざるを

おん身の打ち振ふ 鞭は鳴り

鞭はとどろき

ああ 遂にー

鼻はちぎれ 額は裂けて血を噴けり

おおされどわれ死なじ 断じて死なじ！
たとへ鞭の手あらくなりまさり 濁水力を殺げど
おん身の心やはらぎ 憐情に飢ゆる時までは
おおその時まで 血を吐き 悶絶すとも
おん身の足下に われ泳がん 泳ぎて行かん。

伴侶

義足よ つれづれの孤独の伴侶ととも 私に力を借せよかし
人生ひとのよの片影 そを安らかに歩むより 私に想望おもふ事もなし
いまこそ疵も癒ゆたれば お前に学び 歩きたい
向ひの病室 あちらの花芥 風の泳いぐ芝平ら

(昭和十二年「山桜」六月号)

(「山桜」昭和十二年六月号)

心象スケッチ

春日抄

日はうらうらと燃えちぢれ 花菜畑を私は歩む
人生既に半ば いまこの途上に佇つて
古い感情も叫ばず 想ふ事すべて平明
囀鳥しきり 佇ずみ 花粉にまみれ
うつらうつらと私は歩む

いのちの友

彼の書齋に灯がはいる 書架一鉢黄水仙
彼は人生を嘲ふ 彼は文学を罵倒する
片方きりの眉毛がちよと動く

さうして彼は聲を上げて読む フロオベエルの書簡
ああそのやうな日もありき 北條よ
わが盲ひて 物想ふ宵

春の虹

お尻を振り首を振り 躓き乍ら沼に飛入る家鴨達
その向うの堤の上を電車が走る
新療地区に雲を割つて日ざしが立つ
望郷臺にほつかり架つた春の虹

青 畳

向ひの丘に雲雀啼き 陽炎燃えて燈籠一基
さてわが寮は 床間とこに一幅 花鳥の図
仄やかに爽やかに 匂ふ備後の青畳
軒におとなふ熊ん蜂
いま友は読書の後 気軽な昼寝
偽足を脱いで枕にする

唾 蝉

夏の日の沈黙の佳人 樹間隠れの唾蝉よ
お前は神さまの不浄物 美しい不具者 私の精神
さうして私の貧しい歌は この哀れな唾の蝉
心で啼いて歌はれず

別れて後に

日が暮れる 雑林はやしも沈む ああ日が暮れる
私達の眩きも もう済んだ 孤りになつた私のうしろで
ツグミが啼く ああその歌も悲しい その生命も呪はしい
影をます その暮藍の中へ
私もまたあの雑居寮へ 遷かへらねばならんだ
その共同の生活しぐさと謂へ

〔山桜〕昭和十二年七月号

私にはもう堪らない 取残されたこの椅子ベンチも
思へば共有の物なのだ ああ堪らない 私は行かう
日が暮れる 私は行かう 残り少ない 私の影 影よ
その影のやうに 私は闇の中へ 沈んで行かう
何處までも（ああそれは不幸だらうか）しかし
私は構はない 私は私を信じよう

（「山桜」昭和十二年八月号）

夕雲物語

リノリウムには先刻から朝日が溜つたり跳ねたりしてゐるのに、いくら揺り起してもお父さんの返事がない。よつぼど眠いのだらう。と暫く枕頭で待つてゐると、附添夫は黙つて眠つてゐるお父さんを擔荷に乗せ、解剖室へ連れて行つてしまつた。一體なにことが起きたんだらう、と蟻子は小さい胸を痛めたがいつの間にかやら忘れて遊び呆けてしまつた。夕方になつて不圖思ひ出し、解剖室へ行つて重い扉の隙間からそつと覗いて見ると、確かに台の上に寝てゐた筈のお父さんの姿が見えず、そのかはり片隅に白木の大きな箱がちよこなんと坐つてゐる。それならきつと何處かへ用事に行つたんだらう。とその日は歸つて寝てしまつた。

翌る朝。お父さんのお骨上げですよ、と保母さんに連れられお友達と一緒に來て見たが、火葬場にも

やつぱりお父さんの姿は見えない。さては厠の中へでも墜ちてゐるのか知ら。と尠からず心配した。見ると保母さんもお友達もみんなしくしく泣き乍ら灰皿のきれいに焼けた骨がらを拾つてゐるので、ではお父さんは本當に死んでしまつたのかも知れない。と始めて悲しくなつたが、心の中ではきつと何處かに隠れてゐるに違ひない、さうして不意にわたしを、吃驚させるお積りなんだわ。と考へられ、手にする骨がらも貝殻のやうに美しく見えてくるのだつた。

歸つてから病室の厠の中も捜して見たが墜ちてはゐない。これはいけないぞといよいよ心配になり、それから思ひ出す度に病院ぢうを、尋ね廻るのだつたが、お父さんは何處にも見えず、彼女はしみじみひとりぼつちになつたことを感じ、淋しくなるばかりであつた。

ある日。望郷台へのぼつて西の空いっぱい流れてゐる夕雲を見てゐると、雲の形がさまざまに變つてゆくので、すつかり面白くなつて見惚れてゐた。子どもを抱いたヒグマになつたり、お伽噺に聞いた海の中のお城に見えたかと思ふともう青い堤の向うに耳だけ出して隠れたつもりでゐるらしい兎になつたりした。はては人の様になり、優しい眼まで出來てそれは次第に誰かの顔に似て來た。蟻子は思はずお父さんだ。と叫んで、まがつた指も伸びてしまふほど空いっぱい両手を上げた。雲の中に隠れてしまつたんだもの、いくら尋しても分らない筈だつた。と思ひ、それにしてもどうしてあんな所へ行つてしまつたのだらうと思議になつた。すると、急にお父さんとの間に遠いとはい距離を感じ、お父さんのバカ、お父さんのバカ。と小さく咳いた。あまつさへはるか彼方の山脈の上に一つ星がきらきら耀きそめると、望郷台にはせうせうと冷たい風が流れ出し、やうやく見つけたお父さんの姿も見てゐるうちひつそりと灰色の闇の中に沈んでしまつたので、蟻子はとうとう聲をあげて泣き出した。

晩秋

芒のさ揺れ 赤松の幹の光 静かな疎林のほとりからこころに沁みいる
アンジェラスの鐘

小父チャン 天ニモ才家ガアルンデシヨ

アレハ迷子ニナラナイヤウニ 天ノ才家デ鳴ラスノネ

天ノ才家ハホントノ才家ネ アソコニハ 才父サンヤ

才母サンモ ミンナヱルンデシヨ アタイハヤク行キタイナ

ミンナハ天ノ才家 知ラナイノ？

ミンナハ遊ブコトバカリ知ツテヱテ ホントノ才家へ帰ルノヲ

忘レテシマツタ オバカサン イケナイネ……………

チヤア 小父チャンハ？

アア小父チャンモ忘レテヱタヨ コレカラハハルチャント

仲良ク帰ラウネ

ミンナトンボニナツテ帰ルノネ ステキ ステキ

止んでまた鳴りつぐ 鐘の音の 枯野は寂し

ああ肩の上の少女の聲に

しみじみと自省す はんぎやくの虚心……………。

樹々ら悩みぬ

北條民雄に贈るー

月に攀ぢよ
月に攀ぢよ

樹樹ら 悲しげに 身を顫はせて眩きぬ

(昭和十二年「山桜」十月号)

蒼夜なり

微塵の曇りなし

圓やかに 虔しく 鋭く冴え

唯ひとり 高く在せり

月に攀ぢよ

月に攀ぢよ

樹樹ら 手を取り 額をあつめ

あらはになりて 身を顛ふ

されど地面にどっしりと根は張り

地面はどっしりと足を捉へ

(悲しきか)

(悲し)

(苦しきか)

(苦し)

樹樹らの悩み 地に満ちぬ

彼等はてもなく 呼び應ふ

ああ月に攀ぢよ

月に攀ぢよ

樹樹ら 翔け昇らんとて

翔け昇らんとて 激しく身悶ゆれど

地面にどつしりと根は張り

地面はどつしりと足を捉へ

国旗

白地を浸し

日の丸を抜き

露ら 群をなして

光りぬ

光りぬ

萬象をひとつに孕み

瞬間を燦と光りぬ

〔四季〕昭和十二年十一月号

静づ静づと竿を濡らし

こころよく肌へをめぐり

露ら 虔しく 鮮やかに消えぬ

ひとつ、

またふたつ、

(悲しきか)

(あらじ)

(嬉しきか)

(あらじ)

日に遭ひて更に光りぬ

風勁ければ

彼等一瞬にして麗はしく死絶へぬ

(はた風の吹かざるもまた……………)

こは何ならむ

露ら知らじ

とこしへに露ら知らじ

ただ日の丸の紅きを知るのみ。

〔山桜〕昭和十二年十二月号

元旦スケッチ集

静かなる微笑みに明け

静かなる微笑みに明け
わがこころ悦しみに憂ゆ
何事の願ひぞありや

この慶き日
我やすらかに御霊を納さん

門松に光在り

門松に光りあり
いちはやくおおつもごりの日めぐりをはぐ
曲り木は曲れるままに
病める身は病めるままに ほどのよち

御供に歳を點して
ああこれでよし　これでよし。

七千の針の群れ

神経痛を病める者ありー

七千の針の群れ

恰も肉の中を駆けめぐる如
御飾りの何にめでたからん
着布團をばりばり噛みて
終日　哀號哀號と叫ぶあり。

静　臥

とづくにの少女ありをとめ
青き瞳めの静かに光る
につぼんの羽子板抱きて
とづくにの初日を臥める。

木枯の日の記憶

ひと日サーカスを観てー

木枯の 寒い寒い日であつた
微酔の 悲しい機嫌の日であつた

少女が綱を渡つてた
露はな肌も寒むさうに
いのちの綱を渡つてた

綺麗な素足が宙を踏む
一寸道化てまた渡る
細い細い綱だつた

宙に咲いたり 返つたり
余り見事に恍惚と

只観衆ひとらは面白さう

一杯機嫌で眺めてた

浮かれ心に誘はれて

この私もうかうかと

悲しい気持ちで眺めてた

少女が綱を渡つてた

恰も宙を踏むやうに

いのちの綱を渡つてた

木枯の 寒い日であつた

微酔の 悲しい機嫌の日であつた

一九三七・十一・二九・作

〔山桜〕昭和十三年一月号

念願

何を思ふといふでもなく
ぼんやり坐つてゐる机の前
草編みのすだれの蔭へ
不意に訪なふ蝉一つ
挨拶もなく 見^{みえ}もなく
忽ち 高々と歌ひ出す 描き出す
天来の妙音 ゆかしい心象
可愛い奴 神々しい奴
蝉 蝉よ
嗚呼お前のやうに歌ひたい
巧ま^ずに 無雑作に
私の日頃の百の感情……………

〔山桜〕昭和十三年九月号

鶯

囚われて

小さな籠の明け暮れも

障子圍ひや 温室住居

外は牡丹の雪降るに

春ぢや

春ぢや

と教へられ 思はず

ケキヨ……………

知らずに

ホケキヨ……………

と啼いてみた

嗚呼やつぱり生命の限り

歌はにやならん 私の性

〔山桜〕昭和十三年九月号

困をくるくるくる廻つてみました。女は美しい盲でありました。詰らなくなつてやめたのか、林の向うは静かになつて、いつの間にか、輝のはいつた空から、美しい夕雲が覗いてゐるのであります。

（山桜「昭和十三年十月号」）

盂蘭盆

み佛を迎へるとは何といふ美しいこの世の習慣ならはしでありませう 遠き祖先みおやや兄弟はらからや親しい友のたれかれと
仏間に虔しく見えるのは何といふ麗まどろみはしい団樂だんがくでありませう あの夜の和樂 この世の愚痴を 彼等は
賑やかに取り交はずでありませう 賽の河原のわらべらも 今宵茄子のお馬で愉しく一夜を遊ぶであり
ませう 岐阜ほん提灯のやはらかな青い燈は それをこの世ならぬものに 仄かに照すでありませう 香煙
は縷々として夜つびても饗宴うたげの膳を困繞へめぐるでありませう まことに今宵ほど あの世がこの世であり
この世がああ世でない誰が言へるでありませう 入滅といひ 昇天といひ 何といふ儼かな人の世の
嬉しい有情でありませう やがて 佛間に夜は更けるでありませう されどみ佛とわれ等の歡語ささめきは尽き
ることなくめんめんと続くでありませう み佛たちに別れるのは何にもまして悲しいでありませう 暫
しの別れではありませうがそれがどのやうに深い悲愁かなしみであるかは 佛間に集ふ者のみが知るところであ
りませう おつつけこちらから訪ねることに致ませう やがて彼等は涙を呑んで袂を別つてありませう
嗚呼この有情の激しさ 抒情の精華 永遠の人間性は何時も斯くの如くでありませう み佛を迎へる
とは何と言ふ美しいこの世の習慣でありませう

朝霧

納骨堂の境内から聖歌が流れる　ソプラノのいい聲だ
みすくひの水に罪きよめられ　あらたに生れしわれ
は神の子……………

その歌の方へ　ひとりの盲が杖を曳く　彼は草を分
ける楓の幹をちよいと叩く

さうして覚束なげに歩みを運ぶ　朝霧は朧に霽れ
て　彼を包む夜明けの色

〔山桜〕昭和十三年十月号

〔山桜〕昭和十四年一月号

友を祝し給はずば

朝は病房を輝かし 寒氣凜然、

東天の下、今し、茶毘に附す友の煙ひとすじゆるやかに銀孤を描く

……父よ、友を憐れみ給へ

父よ、友を赦し給へ

父よ、われ等の祈祷を聴き容れ給へ

見ろよ、あの人はよつほど氣立がやさしいとみえて、

煙まで静かだぜ……」

うんにやあ、さうぢやあんめえよ。あんまり長く

わずらつたで、ぼんぼん昇る元氣がねえすら。」

さつきやなあ、でもまあ、こげえいい日に焼かれりやあ、

氣持ちよく成佛出来るだんべ。」

違えねえ、おいらも早く引取つて貰えてえもんだ、

娑婆の朝はこげえに寒いで……

農舎の庭の小溜りに

就業の前のひと時を

焚火を囲んで農夫らの明るい談笑……

友等よ、のどかなその明け暮れよ、屈託のない生存よ、
霜は足下から解けかゝり

鳥は婆々と晴天を歌ふ

茶毘の煙は度しく朝日の縞にたなびき

火葬場からは一ぱいに溢れて来る

和やかな聖歌、祈祷の聲

……………父よ、友を憐れみ給へ

父よ、友を赦し給へ

父よ、われ等の祈祷を聴き容れ給へ。

明日への言葉

てんぼになつても

いやいや盲ひになつても

こころしみじみ生きてゐたいと思ふ

（「山桜」昭和十四年二月号）

この身、疫病みくづれる

宿痾者、天刑者よ

父や母にも呆られて

かくて、幾歳、寢台ベッドの上の繃帯達磨

それでもなんでも生きてゐたいと思ふ

このひたぶるの心 この激しい慾求

あはれ、赤裸なる人の世の心よ

死に行く運命さだめを厭ふにはあらねど

はたまた いのちの果

限りなき幸を希ふにはあらねど

この身、一じのまま、

一日は一日を産み

明日もまたかくて

いのちの健在を心ゆくまで愛でたいと思ふ。

（「山桜」昭和十四年三月号）

白鳥

わが胸底に一羽の白鳥住めり
鮮麗なる装ほひと

只一つなる希ひに燃えて
あはれ やさしき白鳥住めり

日もすがら 歌もなく

黄金なす波に浮びて

あえかにも望郷の憂ひに沈む

圓らなる その瞳

柔かき その額

未だ故郷の形を知らず

かぞいろに限りなく夢は馳せちる

あはれ やさしき白鳥よ
何時の日より わが胸に來り住めるや
はた何時の日 わが胸を離れて
うるはしの郷に馳せるや

おん身 かくて残り少なきわが日々を啄ばみ
只一つなる望郷に燃えて
わが心のうる深く
静かに水脈をひろげゆく
春浅き昨日も今日も……………
あはれ わが胸底に
一羽のやさしき白鳥住めり

微笑の詩

恒に明るく微笑んでゐる人がある
バスの中でも

（山桜「昭和十四年四月号」）

行きずりの見知らぬ人にも
厨房でも 雪隠でも
恒に明るく微笑んでゐる人がある

静かに水脈のひろごるやうな
出会ひ頭の犬でさへ
くんと鼻を鳴らして寄るほどの
恒に暖かく身近に微笑んでゐる人がある

よつばど腹の出来た人でないと
こんな笑ひは笑へぬものだ
私もなんとか真似ようと思ふが
てんで話にもならない
鼠一匹見つけても
忽ち額に青筋を立てる始末だ

これではいかぬと思ひつゝ
早くも人生半ばを過ぎた
死ぬまでに一度でもいい

心からこんな笑ひ様がしてみたいと
憐れな自分を省みて寂しくなる

一 椀の大根おろし

初夏の宵なり

病み疲れた寢臺に起出でて

ほろ苦き一椀の大根おろしを喰らふ

肌あらし病衣に瘦軀を包み

ぼつたりと重き繃帯フオリクに肉又を差込み

わたしはがつがつと大根おろしの一椀を喰らふ

思へば病みてより早や幾とせ

げにこれまで生きながらへて来たるものかな

一驚を喫す 一驚を喫す

見よ、己が姿かげを

而して思ひをなせ

日夜 病菌の裡に住へど

（「山桜」昭和十四年五月号）

かくいのちの在るは嬉しからずや
貧しき一椀の大根おろしを愛ずるは幸ひならずや
われとて何時の曰か
父の御許に帰り行くらん
なべてはそれまでの愛の十字架
ああ忘れ得ぬ人の世の一事ならずや
さらば 喰らはん 餓鬼の如くに喰らはん
大根おろし 大根おろし
涎と汁とそして涙と
ああ初夏の宵の一椀の大根おろし……………

おもかげ

いつの日も 虔しく
さやかに微笑むおもかげあり
われそのおもかげにならへて
心静かに笑まんとすれど

（山桜「昭和十四年九月号」）

湧き来るは 悔と
はたしらじらしき憤怒のみ

こは何ならむ 二十年来一哀愁！
問ふもおかしや

明日こそは笑まねばならぬ
あたらしき夜明けと共に
幾そ度笑まんとして

在るは 恒に 空しき歎歎ぞ
ああ 捉へん術なき静謐の微笑よ

しかすがに いつの日か
あえかに笑まむ 明日あらば

いつの日も 限りなく
さやかに微笑むおもかげのあり

（「山桜」昭和十四年十月号）

療養日記（その一）

「昨夜から灯を入れ始めたんです
正月には是非鳴かさうと思ひまして……………」
その正月までにはまだ二月もある
友は語りながら曲がった指で
器用に播鉤を摺りはじめる
彼は凡て手探りである
餌の調合も 籠の掃除も
一つの歌の誕生を心密かに待つてゐる
この盲目の丹誠に籠の中の鶯は
笹鳴きしつゝ 宙返りつゝ 未来の歌手を俵ばせる
嗚呼かくて療養を完たうする
友よ 幸あれ
おん身の美しいひと日ひと日に……………

〔山桜〕昭和十四年十一月号

木魚三題

一

その音は圓い　その音は暖かい
さうしてその音は冴えてゐる

嗚呼木魚よ

お前は恒に腹を据え　頭づを叩かせて

二

あれあのやうに頭を叩かれて

あのやうに冴えた音が出ようとは

木魚よ　お前は憎い　お前は羨しい

私もお前の頭を叩かう　お前の心に學ぶため

ポクポクと木魚を叩く
何事の在しますかは知らぬ
われかく恒に健やかに養はるるを思ひ
ポクポクと木魚を叩く

掌 編

大きく呼吸をする 小さく呼吸をする
その咽頭のどを通ふものの暖かさ 幽かさ
ああ あの空の色！ あの頬白おのちの歌！
ああ私の中の度しい生命よ

〔山桜〕昭和十四年十二月号

療養日記

爪を剪る

日向に出て爪を剪る
ホータイの中からわずかに覗いた指
そを　ひとつひとつ
いとほしみつゝ爪を剪る
おほかたはくろずんで
あぶら気も艶もない
ぼろぼろの爪ではあるが
それでもわたしの血が通つてゐる
ちぢやははや
兄弟の血が通つてゐる
思へば療養幾とせ

かうして爪を剪るのさへ
夢のやうである

あの友よ

この友よ

不自由なおん身らの様を偲へば

ひとり爪を剪ることの

不思議さ ありがたさ……………

ポキリポキリとこぼれ散る

ひざのへの

ひとひらの爪取上げて

ひがげに翳し

ひるがへし

しみじみとおろがみ見る

ああ わたしには

爪がある、爪がある、と……………

〔山桜〕昭和十五年一月号

閑雅な食欲

療養日記その三

食卓の上に朝日が流れてゐる

どこかで木魚の音がする

読経の聲も微かに聞える

わたくしは食卓の前に

平らかな胡座をくんで

暫くはホータイの白い

八ツ手の葉のやうな自分の手をながめる

いつの間にこんなに曲つてしまつたらう

何か不思議な物でも見る心地である

わたくしはその指に

器用に肉又フォークをつかませる

扱て、と云つた恰好で
食卓の上に眼をそそぐ
今朝の汁の実は茗荷かな
それとも千六本かな
わたくしはまづ野菜のスープをすす
それから色の良いおしん香をつまむ
熱い湯気のほくほく立ちのぼる
麦のご飯を頬ばりこむ
粒数にして今のひと口は
どのくらゐあつたらうかと考える
わたくしは療養を全たうした
友のことを考へる
療養を全たうしようとしてゐる
自分の行末について考へる
生きることは何がなし
嬉しいことだと考へる
死ぬことは生きることだと考へる
食事が済んだら故郷の母へ
手紙を書かうと考へる

考へながらもわたくしの肉又は
まんべんなく食物の上を歩きまわる
「有り難う」とわたくしは心の中で呟く
誰にともなくおろがみたい気持ちで………

九月某日

器

われ一つの器を持つ
朱き下繪と
黒き配色
ほのぼのと
白を浮べて
はかなしや
もろく貧しき器を蔵む
われ この器もて
卒然と

〔山桜〕昭和十五年二月号

酒くみしことあり
をみなと臥して
肌のぬくみ
ぬすみしことあり
はた思ひなれば
すぎるものあり
おのれ投げうちて
こはたむと思ひしことあり
そのありし日の
名残をとゞめて
染に濁れる
底はくぢけ
縁は歪みて
あなおもしろき姿かな
さはれ いつの日か
年古りし色もち添へて
わびしらに
光をはなち
かけがひのなき

器なりせば
三十路の今ぞ
しみじみいとほしみつ

奥の細道

むなしとて険しきに怖ぢ
迷ひては深きに踏たらふ
若くして旅は哀しや
日 暮れて 道なほ遠し
泣くもまたせんなしなどゝ
ひとり道化て笑ひやまねど
忽ちに笏と返し
そくそくと胸に衝き来る
わびしらよ はかなさよ
いよよ行くほど
鹿の音あはれ

〔山桜〕昭和十五年三月号

降りしきる落葉の音の深くして

「むなし」

「むなし」

と、訪め行きぬ

古木のきしむ日ぞかなし……………

そのかみの日の

在りし日の

旅のなりはひ いつしかに

わが胸底にしるしたる

憂ひの層のあつけれど

世慣れ 旅慣れ

あはれを知るぞ悟りなれ

戒名おのれに唱ふれば

結ぶわらぢの紐かろく

われもひとりのをきなかな

しまらくは険しきをうなづき

しまらくは深きを愛でつ

今ひそやかにのぼりゆく

飄々たり奥の細道……………

義父房州の果實をたまふ

義父の心こもれる思ふ房州ゆ今日はるばると着きし枇杷の實
房州の強き日射しに熟れたるか大き李のまるまる赤し
義父のたびし大き李の赤々と灯に照れる見れば喰ふには惜しき
年々を送り来し枇杷この年もわが手にするよ黄なるつぶら實
ここに於て見ることもなき枇杷李今日の机に山と盛られし

〔山桜〕昭和十五年六月号

〔山桜〕昭和十五年九月号

望郷台

このつたなき詩編を北條民雄君の靈にささぐ

望郷台の宵なりき
遠き茜は照りはえて
蝸しぐれ 夏たけぬ

あはれ かなしく めづらかに
たまきをなせるめわらべの
われをかこみてあそぶらし

やまひふりたるいたつきの
われはなにをかこつべき
小さき手のうち歌のうち
お道化てあればなぐさみぬ

お道化てあればめわらべの
繡帯あつく巻きそへし
われの姿のおかしとて
白き達磨とはやすなり
歌ひめぐりてはやすなり

白き達磨とめわらべと
あそびてあれば遠き日の
うなゐのわれのかへりきて
流離のうれひのあつきなる
ふるさと 夢にゑがくとも
行くことがたきやまひ子の
こはつれづれのしぐさなれ
かくなぐさみてあそぶるを

噫 望郷のあえかなる
かはたれふかく 風立ちて
蝸のこゑさびれたり

おん幸うすきわらべらも
ほのかに明日を慕へつゝ
望郷台に散らかひぬ

われはもなにかいのりつゝ
わらべのうへに幸よあれ

雲のうえゆく 幸よあれ

散華

詩心迷ふ

言にいひてさびしきかな
もだしゐてなくさまぬかな
いづれ劣らぬまごころなれば
あはれわが筆に水ふくませて
鉢の萬年青を洗ふかな

自信

〔山桜〕昭和十五年十月特輯号

つゆふかき
あらくさなかに
まよひいりて
はつきりとさける
このあさがほよ

うつつ

湯のたぎり
心よろしも
こもりゐて
しるしばかりの
爪を剪りつゝ

又

ほとほとに
かたちくずれし
わが手はも

しるしばかりの
しこのこの爪

自責

老父死の床にあれば

ふたたびは
あれることなし
うつしよに
つかへるときよ
つひにあらぬかも

又

つれづれに
はこぶ筆なれ
みそ路のいまぞ

なほ書きなやむ

「孝行」の

文字のさびしさ……………

静秋譜（短歌）

凭りてをる老松の幹ひえびえと向つ杉原片日照りせり

藪棒の尖端はに小鈴がをつけむ小禽来て宿らば忽ち呼鈴へとならむか

わが眼はや十尺とさか前方あまりはおぼつかな藪棒はの小鈴がの鳴りをし思ほゆ

一枚の木の葉の如くぶらさがり繡眼め兒じろは藪はに驚かずをり

眼の縁に白きテープを巻きてをるこの小禽はも掌おに愛し

〔山桜〕昭和十五年十一月号）

〔山桜〕昭和十五年十一月号）

蜻蛉譜（短歌）

白菜のやは葉に溜る日のうつらら蜻蛉の影のうつらひやまぬ
秋晴れのやは陽い照らふ栗穂立蜻蛉を止めて未枯れにけり
移り来て踏む庭土に蝉殻の一つ止まりし松毬を拾ふ
靄低く下枝を這へる桑の秀に頬白一つ鳴きしきる見ゆ

天路讚仰

ゆつくり遠くまで

原田嘉悦兄へー

ゆつくり

遠くまで行かうよ

息を切らさないやうに

行路病者にならないやうに

足下の覚束ない夜があれば

〔山桜〕昭和十五年十二月号

一望千里、輝く朝もあるであらう
焦らず、迫らず
恒に、等分の力を出して
切て、ゆつくり
遠くまで行かうよ

愛は惜しみなく奪ふ

あますなく欲りし給へば
惜しみなく捧げざらめや
我が最も小さな

喜びや

悲しみや

はた苦しみもまた……………

君ゆゑにわれは生き

君ゆゑにわがいのち

永久とこしへに馨よき匂ひ放てり

郷愁

君が面輪つねにはつきりとわが裡に住まひ
君がみ聲絶えず凜々とわが裡にひびかひ
君がみ心限りなくわれをつゝめば
ああ故郷ふるさとは讃むべきかな
こよひ、晩鐘の彼方
夕映えの空を拜して
心しみじみ思ふかな
嗚呼君がみ心に生きばやとこそ……………

死

そんなに私が可愛いと云ふなら
さあお前の腕に力をこめて
もつと、しつかり、私を抱擁しておくれ
お前は善良なる同居人、親愛なる友
さうして私の忠實なる僕よ
お前が、恒に、傍に居てくれるゆゑ
愚かな私も、どうやら怠け者にならずにすんでゐる

噫、やがて私の生涯が終る時
私はお前の媒介で
み父の前に、輝く花婿になるのです

枯木のある風景

こいつはいつも枯木のやうにぶらさがつてゐる
墨灰色で、何かひやびやとしてゐる
季節の感應なんか勿論ありはしない
そのくせ どこか陰見で、本能的で、強靱だ
時にはたにたと世辭を言ひながら隣に坐つてゐる
風が吹けばぶらぶらと揺れ
お天氣の良い日には度しくとほけてゐる
こいつめ、一つ、
ポーンと撲りつけてやりたい時がある
噫そんな時は、例の手くだで
美しい小禽の音楽かなんかを聞かせるのだ

〔山桜〕昭和十六年一月号

うつかり眼が合ふと
眞黒な大鴉を宿めて
凝つとこちらを見つめてゐる
こいつはまるで枯木のやうにぶらさがつてゐる

落葉林にて

私はけふたそがれの落葉林を歩いた。
肅條と雨が降つてゐた。何か落し物でも探すやうに、私の心は虚ろであつた。
何がかうも空しいのであらうか。
私は野良犬のやうに濡れて歩いた。
幹々は雫に濡れて佇ち、落葉林の奥は深く暗かつた。
とある窪地に、私は異様な物を見つけた。
それは、頭と足とバラバラにされた、男の死體のやうであつた。
私は思はず聲を立てるところであつた。
よく見ると、身體の半ばは落葉に埋もり、頭と足だけが僅かに覗いてゐる。
病みこけた皺くちやの顔と、粗れはてた二つの足と……………。

（『山桜』昭和十六年二月号）

その時、瞑じられてゐた眼が開かれ、
白い眼がチラツと私を見た。

「アツ、父！」と私は思はず叫んだ

「親不幸者、到頭来たか……………」と父は呻くやうに眩いた。

許して下さい、許して下さい、と私は叫びながら、父の首に抱きついた。
父の首は蠟のやうに冷たかった。

それにしても、どうして父がこんな所に居るのであらうか、

胃癌はどうなのであらうか、その後の消息を私は知らないのだ。

「胃癌はどうですか、どうして斯んな所に居るのですか、

さあ、私の所へ行きませう。」

私は確かに瀨院の中を歩いてゐたのに、はて、一體此處は何處なのか、
私は不思議でならなかつた。

「お前達の不幸が、わしをこんなに苦しめるのだ。」

と父はまた咳くやうに云った。

私ははやばうぼうと泣き乍ら父に取縋つて、その身體を起さうとした。
しかし、父の身體は石のやうに重かつた。

「落葉が重いのだ、落葉が重いのだ。」と父がまた力なく叫んだ。

「少しの内、待つてみて下さい。今直ぐに取除けてあげますから……………」
私はさう答へると、両手で落葉を掻きのけた。

雨に濕つて、古い落葉は重かつた。

苔の聲りが私の鼻を掠めた。しかし、幾ら搔いても、

後から後からと落葉が降り注いで、父の身體にはなかなかとどかない。

私は次第に疲れて來た。腕が痛くなり、息が切れた。

私は悲しくなつて、母を呼んだ、兄を呼んだ……………。

どの位経つたのであらうか。

私は激しい疲勞のために、その場に尻もちをついた。

ぜいぜいと息が切れた。降り積る落葉は見る見る父の顔も足も埋め盡して、

からから佗しい音を立てた。

「噫、父よ、父よ……………」日はとつぷりと暮れて、

雨はさびさびと降つてゐた。

「親不孝者、親不孝者……………」

何處からか苦しげに呻く父の聲が、私の耳元に、風のやうに流れてゐた……………。

病床閑日

私はけふ 晝のひと時を

（山桜「昭和十六年三月号」）

庭の芝生に下りてみた

陽はさんとそとそと 近くの樹立に松蝉が鳴いてゐた

私は緑のやは草を踏みながら 踏みながら

そのやはらかな感觸を愛しんだ

不思議なほど 妖しいほど 私の心にときめくもの

一体この驚きは何だらう

思へ寝台の上にはやも幾旬

もうふたたび踏むことはあるまいと思つてゐた

この草 この緑 この大地

私の心は生まれたばかりの仔羊のやうに新しい耳を立てる

新しい眼を瞪る そうして私は

私の心に流れ入る一つの聲をはつきり聞いた

それは私を超え 自然を超えた

暖いもの 美しいもの

ああそれは私のいのち いのちの歌

（山桜「昭和十七年七月号」）

訪問者（遺稿）

我門前に立ちて敲く、我声を聞きて我に門を開く人あらば、
我其内に入りて彼と晚餐を共にし、彼も亦我と共にすべし。

黙示録

第一篇 怯懦の子

こつ、こつ

こつ、こつ……………

誰人ぞ今宵わが門を叩く者あり

日は暮れて、凜寒く吹き悩む

こつ、こつ

こつ、こつ……………

われ深く黙して答へず

半ばを過ぎし書を読みつぎぬ

こつ、こつ

こつ、こつ……………

訪へる声やまず続けり

凧はいよよ募る

われ炉に薪を投げ入れ

尚も黙せり、耳を覆ふ……………

こつ、こつ

こつ、こつ……………

旅人よ、何とてわが門を叩く

われに何をか告げむとするや

われ知らず、わが扉開かざるべし

……………旅人よ、わが門を過ぎよ

わが隣にも人の子は在り

こつ、こつ

こつ、こつ……………

噫旅人よ、執拗なり

われは沈黙の人、孤独を愛す

われは聞くを好まず、聞かざるを欲す

われをして在るべき所に在らしめよ

………旅人よ、とくわが門を過ぎよ

しかして汝に受くるものに尋ねよ

こつ、こつ

こつ、こつ………

旅人、汝呪われてあれ

何ぞわれに怨みを持つか

如何なれば斯くもわれを求め

如何なれば斯くもわが安居(やすらゐ)を亂すや

汝に向ひ、外に開かむより

われは寧ろわが裡に死ぬるを望む

………旅人、汝わが門を行け

われは蝮の裔にして汝を噛まむ

こつ、こつ

こつ、こつ……………

おお夙よ募れ、闇また来たれ

われ汝を呪はむ

汝、如何に叩くとも

わが扉は固く、朝に至るも閉さるべし

われは汝を知らず、われは汝に聞かず

さなり、われは己に生くるなり

……………噫旅人、とくわが門を去れ

然らずば人の子汝を渡すべし

第二篇 訪問者

吾子よ、吾なり、扉を開けよ

汝を地に産みし者来たれるなり

吾、はるばると尋ね来るに

汝、如何なれば斯く門を閉じたる

吾子よとく開けよ

外は暗く、凧はいよよ募れり

噫父なりしか

父なりしか、宥せかし

おん身と知らば速やかに開きしものを

噫何とてわが心かくは言ひ、かくは聾せり

わが父よ、しまし待たれよ

わが裡はあまりに乏しく

わが住居あまりに暗し

いとせめて、おん身を迎ふ灯とな点さむ

これ吾子よ、何とて騒ぐ

吾が来たれるは

汝をして悲しませむとにはあらで

喜ばさむ為なり

吾が来れば

乏しくは富み、そが糧は充たされるべし

吾久しく凧の門辺に佇ちて

汝を呼ぶことしきりなれば

吾が手足いたく冷えたり

噫わが父よ、畏れ多し

われおん身が、わが門を叩き

われを求むを知り得たり

されど、われ怯懦にして、おん身を疎み

斯くは固く門を閉したり

噫おん身を悲しませし事如何ばかりぞや

われ如何にしてお宥しを乞はむ

さはれ、われは伏して、裡に愧づなり

わが父よ、いざ来たりませ

吾子よ、畏るゝ勿れ

非を知りて悔ゆるに何とて愧づる

夫れ、人の子の父、いかでその子を憎まむ

吾今より汝が裡に住まむ

汝もまた吾が裡に住むべし

父よ、忝けなし

われ、何をもておん身に謝せむ

わが偽善なる書も、怯懦の椅子も
凡て炉に投げ入れむ

わが父よ、いざ寛ぎて、暖を取りませ

われ囚人めしうてにして、怯懦の子、蝮の裔

おん身を凧の寒きに追ひて

噫如何ばかり苦しませしや

最愛の子よ、吾が膝に来よ

而して、汝が幼き時の眠りを睡れ

そは吾が睡り甘美あまければなり

われおん身を離し去らしめじ

わが貧しきを見そなはして

わが裡に住み給へば

われもまたおん身の裡に生きむ

噫永久とこし久に、われ、おん身の裡に生きむ

父よ、われをしてこの歡喜の裡に死なしめよ

父よ、われをしてこの希望の裡に生かしめよ

第二篇 癩者への接吻

わが園生のたそがれに
愛ぐしき者の訪ひぬ

幽かに匂ふ御衣の
さやかなるこそ貴けれ

遙るかにわれをみそなはし
近づき給ふ御気色の
いよよ気高くすゞろかに

われ御衣に触れみむと
心怪しく騒ぐかな

噫如何なれば斯くならむ

悲しきわが智消えうせよ

時は過ぎゆくわがなべに
なにとて御手を承ぐべしや

おん方われをみそなはし
訪ひ給ふこそ畏けれ

(心静かにわれをみよ
われのいづくに迷ひあり)

噫げに愚かなる僕かな
せめて御足を給ひかし

おん方笑ませ給ひつゝ
わが手を取りて貴しや
癩者の膿を吸ひ給ひぬ

(「山桜」昭和十七年十一月号)

東條耿一
散文集

隨筆 病床漫筆

切つても切つても伸びる爪。不思議な爪だと思ふ泌々とさう想ふ。何處と云つて不必要の箇所が無い人體の内、伸びれば切つてしまふ爪が泌々惜しいなあと思うことがある。

造物主は人間を造り出した時、爪が伸びたら切れ等と教へなかつたかも知れない。勝手に人間が切る事を考へ出したのだ。だから他の動物の中で爪が伸びたら切るなんて洒落た、否不心得な動物の名を聞いた事が無い。人間ばかりらしい。切つても切つても伸びるこの爪の粘り強さには飽きれる事さへある。そして余りに生命の根強さを感じさせられて驚嘆する事もある。

爪の中には貝殻の山がある。凝つと爪を見詰めてみると色々な想念が浮かんでくる。小兒の指の血の色が透過つて見える様な可愛い、又は女性の純白な牛乳の肌の様な爪、或ひは不器用な恰好をした自分の爪を見てゐる中に、いつの間にか故郷の海邊をさ迷ふて居る自分に氣が付く。磯打つ波の心良い響、目映ゆい銀砂の光り、波間に散らばつては群れ飛んでゐる鷗、不圖向ふの丘を見れば懐かしい母や妹が、眞白い爪を太陽に輝かせ乍ら手を振つて私を呼んでゐる。沓い遠い母がこんな所に居たのか知ら、もう一生逢へないと思つてゐた母や妹が直ぐ向ふの丘に居るので、私は唯もう嬉しくて泣乍ら丘の方へ駆け行く、しかし不思議な事には私がいくら根限り駆けて近づかうとしても、いくらひた走りに行つても丘と私の距離は前と少しも變わらない。私は悲しくなつて砂地に泣倒れる。とその砂の中には、たくさん爪が貝殻を敷き詰めた様に落ちてゐる。私は妙にとぎまぎし乍ら恐る恐るその一つを拾つて見る。何とそれが懐かしい父や母や、はては沓い祖先の人々の爪なのだ、一つ一つが變つた、それでゐて肉親

の匂ひがするのだ。私はもうそれらの爪の一つづゝに熱い接吻をし乍ら掌上に拾ひ乗せる。拾ひ集めてゐるうちに不圖私に堪らなく不氣味になつて、切角拾ひ上げた爪を砂上に投げつけて、一目散に的度も無く駆出してしまふ。此處で私の想念が消える。現實に皈つた私は改めて自分の爪を見直す。見てゐるうちに素晴らしい勢で爪が伸びて行く。奇術師の箱の中から五色のテープが面白い程出る様に自分の爪もぐんぐん伸びる。眞白い飴の様に伸びる伸びる。それが軟かくてほかほかと湯氣が上がつてゐる。そして障子を突破り、庭を横切り、垣を越して往來に迄伸びる。馳て付近の子供が見つけて、多勢寄つて爪引きをやる。初めは我慢してゐるが堪らなく痛くなつて来て、大聲で悲鳴を上げる。再び私の想念が消える。私は全身びつしよりに冷汗をかいて横臥して居る。明るい午後の陽差しが窓幕の隙間から洩れてゐる。病室なのだ、そして自分は病んでゐる、と意識付け様としてゐる私自身である事に氣が付く。

x

x

足音が近づく、來たかなと聴耳を立てる。あの音は高下駄かな、それとも駒下駄かな、女の様だな噫つた!! 違つた!! 焦心がぐつと頭をもたげる。又下駄の音がする。聴耳を立てる。微かな念願が寒暖計の様に上下する。下駄の音が他へ消える。がっかりする。そして疑念が擡頭する、怨嗟心が逆行し始める脈搏が激昂する。

こんなに待つてゐるのに、何をしてゐるんだらう來たらうんと叱り付けて貴様のやうな奴とは絶交だと云つてやらうか、併しそれは早計だ、一時の憤怒で親友を棄てるのは自縄自縛だ、俺は奴を信頼してゐる、寧ろ信頼し切つてゐるのだ、それだけに反動も激しい。奴だつて何かと用事があるんだらう。でなければ來る筈だ、併しこんなに奴を待つてゐる俺の氣持も察して呉れさうなものだ。やつぱり俺が信

頼し過ぎてゐるのだらうか。

これが病者特有の気持だなとも思つて、強ひて心を落着け様とするが、反對に心は焦立ち、全身がかつかつと熱くなつてくる。俺は眼を瞑むる。一つ二つと數へて氣を静める事に努力する。知らぬ間に心が和やかになつてくる。不圖想念が故郷へ飛ぶ。むくむくと郷愁が込上げて來て、手足を顫はせ乍ら故郷への慕心に悶える。おつ母さん!!と呼んで見る達者か知ら、今年はお幾つだつたらう、相変らず老眼鏡を掛けて、暗い十燭の電燈の下でぼろ衣を縫ひ乍ら俺を思つてゝ呉れるんだらうなア……そんな事を想つて、再びおつ母さんと呼んで見る。幼い頃呼んだ、お母さんの語韻が懐かしく胎内を揺すつてゆく。

突然、母の姿が白壁の中に浮んでくる。その後にもう一人母が重なつて浮ぶ、果ては數切れない程の母の姿が、走馬燈の様にくるぐると私の視野の中を廻る。こんなにおつ母さんは年老ひたんだらうか、それに眼鏡にあんなに塵が附いてゐて見悪くはないんだらうか、何んだか氣になるなア等と呟き乍ら不圖窓を見ると、父に叱られて家の中に這入る事も出來無くて、雪の降る夜に寒さに顫へつゝ泣いてゐた幼い日の私が、冷たい硝子に顔を當てゝ部屋の中の灯を怨めしさうに眺め乍らしくくと泣いてゐる。私は急に悲しくなつて、お這入り?と幼い私にやさしく寢台の中から呼びかける。けれど頻りにしやくりあげて泣いてゐる幼い私は見向いても呉れない私は益々悲しくなつて、ベッドに起上る。肺がちくちくと痛くなる。幼い私はいつの間にか消えて居無い。あゝ幻だつたのか……私は救はれた様にほつとす

る。足音が聞えてくる。私は凝ツと神経を研ぎ澄まして微妙な足音の差異とその足音の主を想像して見て失望する。やつぱり奴は來ない。裏切り者!! お前は世界で一番情熱の無い男だ。蝙蝠とるもりが争つたらどちらが勝つか? お前なんかには解らないだらう。

私は自分にも解らない事を口走る。むせる様な咳が間断無く出る。再び肺がちくちくと痛む。忘れ様奴の事なんか思切らう。いくら頼つても、火の様な同性愛を感じても死ぬ時は俺一人だ。結局は孤獨でしか無い。俺は余りに奴の存在を俺の心に結びつけて考へるから失望するのだ。足音がまた聞える。忘れ様と努める一方激しい思慕の聴耳を澄ます。肺がちくちくと痛む。泌々自分が情無くなつてくる。頼つては不可無い。私は努めて私一人の存在を考へ様とする隣の病友が苦しさに呻いた。乱れ勝な呼吸が聴える。チエツ！何てしみつたれな呼吸をするんだらう。鳩がぼうと奇聲をあげる。時計の點鐘が十を報じる。瞬間寢台がぐらぐらつと揺れる。地震だ、さう感じた時又激しく揺れた。何もかも潰れて了へばいゝ、そして俺もその下敷きとなつて……………だがまだ死に度く無い。と云ふ當然の慾望が擡頭する。……………そんな事も浮かんでくる。

(おーい)と私を呼ぶ。はつと耳に神経を注ぐ。(おーい)と又呼んでゐる。確かに私を呼んでゐるのだ。私はきよきよと四方を眺める。誰も私を呼んだ様な氣配も無くすやすやと眠つてゐる。不思議だ、私は尚も耳を澄まし神経を尖らせる。(おーい)と連呼す聲は、どこやら壁画の中かららしい。よく見ると雲を衝く山上の切崖に一人の女が降りられずに救ひを求めてゐるのだ。そしてそれが懐かしい母なのだ。母は狂氣の様になつて先刻から私に呼びかけてゐたのだ。どうしておつ母さんはあんな高い山へ登つたんだらう。雲の上まで聳えてゐる山だ、肺の悪い私にはとても救ひに行く事は出来無い。さう思ふと堪らなく母が痛々しくなつて、瞼の裏がちくちくと熱くなつて涙線がふくらんでくる。到々私は思ひ切つて山上へ母を迎へに出かける。肺がちくちくとまた痛む。途中まで行つた頃、後から私を呼ぶ聲がする。振返つて見る。奴だ、おゝやつぱり奴だ。瞬間、幻想はフィルムの切れた様にかき消える。

……………

私は奴の腕の中で嬉し泣きに泣いて居る。併しまだ心の隅の方では、怨嗟の奴が虫下しを飲んだ後の様にちくちくと動いてゐた。

病床にて二十九日夜

了

〔山桜「昭和一〇年一月号」〕

掌篇 蚤

その事があつたのは九月の若馬の腫のやうに晴れた日でした。四五日臥せて居た風邪も癒つたので、散歩乍ら受持病室を訪問しようと思ふ衣も附けずに出掛たのです。私の脳裡には薄暗い六畳の獨房に結飯を懐に入れてニヤニヤ 薄笑ひしてゐる中年男や、便所の前に跪いて君が代を歌つてゐる私と同年代の若い女の方や、空罐に林檎の種を埋めて團扇で煽いてゐる老人の姿に交つて、コツコツと原稿紙のマス埋めてゐる赤木さんの蛾のやうな顔が微笑ましく浮んで来るのでした。赤木さんがこの精神病室に來られたのは今年のジメジメした梅雨期の頃でした。赤木さんが……主義の過激思想を抱いてゐたこと

はお友達からも聞かされてゐましたが、癩といふ悲惨な病気の上に肺を悪くして咯血されてからは、當然の宗教との激突にああいふ方でも氣が變になつたらしく、「……………」と呼んだり、「……………」なんて大聲を上げますので、周圍を慮かつて獨房に監禁されて了つたのでした。私が赤木さんと親しくなつたのは、獨房に来てから赤木さんが癩特有の神經痛で苦んでゐらつしやる時でした。注射しに来る私は、いつも赤木さんの痛みの止る迄お慰めするのです。否私が赤木さんに慰めて戴いたと云つた方が的確かも知れません。それ程赤木さんは凡てに深い造詣を持たれ、特に信奉する……………には精銳な理論を持續してゐられるのでした。

私と語る時の赤木さんは理智的でもその奥には情熱の潤んでゐる瞳を輝かせて落着いた齒切れのいゝ調子で話すのでした。そんな時には、とても精神異常者などとは思へない辛辣な頭腦の牙へを見せるのでした。でもいつだつたか話してゐるうちに昂奮して私を同志と呼んだ時など一寸變な感じがしましたが、多くは、……………の精神や、……………の根本などに就て素晴らしい意見を開陳し、或る時は社會に活躍してゐた當時の勞働大會の話や、入獄中の心境と今の療養所生活の心境を比較して、私たちの想像範圍の及ばない病者の半面を見せて呉れるのでした。

その頃、私もイブセンからエンゲルスやマルクスを讀みはじめてゐたので、赤木さんの……………は亂れがちな私の思想をぐつと力強く掴んで呉れるのでしたが……………。

斯うして語る機會の重なるにつれて、私は私と同年位のこの若い異性に幾つかの共通性を見出し、そして時には或る激しい何者かの憔悴を感じる様にさへなつたのでした。併し赤木さんにとつては、異性である私の存在も無味乾燥な者らしく心憎い程平然たるものでした。私にはそれが時折堪らなく寂しく思はれるのでした。赤木さんはどちらかといふと沈思黙考の方らしく、いつも机に向つて何かコツコツ

と書いて居るのです。」「……………！」なんて呼ぶ様な方とは思へません。寧ろこの狂人獨房が、探し求めてゐた安住の所でもあるかのやうでした。赤木さんは準子さんと私を呼び、時には看護婦さんと呼ぶこともありますが、そんな時は誰か他の人の人のある場合でした。

私は赤木さんを驚してやらうと思ひそつと扉を開けて這入りました。此方に背を向けて机に向つてゐた赤木さんは、急に讀んで居た本を伏せて、ギョツとして振り向きましたが、今迄にない紅潮の頬と情熱的な瞳をチラツと輝かせて「……………」の儘立上り私を凝視してゐたが「準子さん。」とかすれた聲で呼び「あなたは僕を好きですか？」と凡そ不作法な事をおこつたやうな表情で云つて、「……………」余りに突然この質問に啞然としてゐる私へ混乱した數語を吃つてゐましたが、次の瞬間、私は男の体臭に息苦しくなるのを感じてゐました。落雷の後のやうなポツンと沈黙に落ちた何も解らない私に、赤木さんの襟首を這つゐる可愛らしい蚤だけが、赤く大きく伸縮して見えるのでした。只赤く、大きく……………。

〔山桜〕昭和十年五月号「掌篇六人集」文学サークル結成記念

戯曲 秋刀魚を焼く女

舞台 貧しい画家龍介の住む。八畳に三畳間程で、それに粗末な玄関、釘に掛けたオーバーコート其の他衣類が二三點、壁に油繪の大額が掛けてあり、描きかけの西洋画の画布四五脚乱雑に置かれてある八畳間の隅の方に、毀れたストーブ、その反対側の、右に粗末なモデル臺、兼寢臺が置いてあり、中央に、繪具に汚れた大火鉢一つ備へてある。その傍らに古ぼけた机が、画布に近く置いてあり、その上にこれも古風なオールゴールが乗せてある其の他部屋の内部極めて乱雑、黄昏近く窓を透して灰色の夕景が望まれる。

幕があくと龍介が繪筆を休めたらしく、火鉢に凭つて紙巻はじに火を點けてゐる。モデル女、笙子此方を向いて着物を纏まとふてゐる。

龍介（不愉快そうに）おい。そんな婀娜なげいしゅなポーズをするな。

笙子（故意に）どう？ このポーズ（軀を屈折させて）一寸藝術的ぢやない？ ほほほ……

龍介（正視せずに）莫迦、またはじめたなア、止せ！ そんな恰好僕は大嫌ひだ。

笙子 ほほ……相變らずかんかちね。龍ちゃんたら、ちつとも色氣が無いのね。（着物を纏まとふて龍介の傍に坐る）

龍介 君のガツチリしてんのは、じつさい閉口したな。僕も飛んだモデルを拾つたもんさ……

笙子（憶面なく）なら妾のキモチ解つて戴けたわね？ 尠ちとからずあんたに戀を感じてゐるつてことも？

これでも妾、處女よ。(パツと両掌で顔をかくす)

龍介(呆れて)さうズケズケ云ふなよ。参つたなあ。僕が閉口したつてのは、君の、その大膽さにだよ。君の氣持なんか解りつこないさ。勿論、戀も。

笙子(半白眼で龍介を睨み大仰に)あーら、あんたロボツトね。妾、(と云ひ掛けて龍介の顔色を窺つて)だからあんたが益々好きになつちやうのよ。ほほほ……

龍介(眞面目に)第一、處女なら處女らしくしたらいゝぢやないか。君の何處を見たつて、處女らしいと思ふ個所はないよ。

笙子 失禮しちやうはね。妾、これでも男の體臭つて知らないんだよ。(ほうつと、顎を突き出して)女さへ見れば、野良犬の様に尾をふつて來る男なんか大嫌いさ。髪や顔ばかりしやしきしやしき光らせて當世の男なんか男性美がちつともないし、蠟人形の様な蒼白い顔して、女だか男だか解らない姿態をしてさ、まるでなつちやみないぢやないの。そんな男達に處女の切札なんか眞つ平よ。

龍介(吸殻を灰の中に差し込み)僕も、その男達の一人かも知れないよ。

笙子 チエツ……だ、妾の可愛いリーベを、あんな、しやしき連と一緒にされちや困るわ。それは妾がよく知つてるのよ。そういうことには、女の觀察力はなかなか鋭敏よ。

龍介 鋭敏にして往々過失を生むか……(少々嘲笑的に)女の觀察力の鋭敏さなんか、當にならないからなあ。

笙子(反駁的に)何故、當にならないの？

龍介 何故？ はははは：謂はゆる結婚解消、貞操蹂躪、これ等が明瞭、物語つてゐるさ。

笙子 そんなの側面觀察よ。或一面を満すに過ぎないぢやないの。そんな宿題を提供する女なんか、美

しい人形の内部が空虚つてことを知らないのよ。(火箸で灰の中を搔廻す)

龍介(バットを一本抜き取つて火を点ける) 兎に角、近頃の女性の、男性圏内への進出は凄いからなあ。貞操観念も麻痺する筈ぞ。

笙子(片眼を瞑つてコケティッシュに龍介を見る) 女の貞操観念が麻痺してるなら、男の道德観念は腐敗してるじゃないの？

龍介(眞面目に笙子を見据えて) 君、ヌーボーかと思つたら、案外やるんだね。

笙子 ヌーボー？(一寸悄氣る) ほほほ、妾をヌーボーに見るなんて、だから妾、(情慾的な姿態をすする) ダンゼン龍ちゃんが好きだつて云ふのよ。

龍介(迷惑相に) おいおい。又僕の處へ戻つてしまつたのかい？ もう君、帰り給へよ。

笙子(甘へる様に) まだいゝじゃないの。だけど妾、そんなにぼんやりな女に見える？

龍介 見えるね(冷やゝかに) 女なんて。どいつだつて私こそ明朗な女性のサンプルですと云つたやうな面して、いつぱし理窟ばいことは云ふが、案外なヌーボーが多いのさ。

笙子(バットを抜取つて火を点け軽く吸込んで) その言葉は、そつくりその儘男群に返上するわ。龍ちゃん！あんたの女性観も頼りないのね。だけど、好奇心を多分に含めて龍ちゃんの戀愛観には、絶対の信頼を掛けて伺ひたいわ。

龍介(つまらなそうに) 僕の戀愛観？ ふんそんなロマンティックは僕には無いね。まあ、あるとすれば女性の貞操観念と、男性の道德観念が両立して生れた戀愛、それが本當の單純な戀愛、我々の理想の戀愛ぢやないかと、僕は思ふんだ。だが、(バットの吸差しをぐつと灰の中にさして) 戀なんて、僕には余りに縁遠くて興味は更にないな。

笙子（煙草の吸口に口紅を塗り乍ら）ほほほ……更には良かったわね。そんなに縁遠くもないぢやないの。

龍介（一寸険しい表情をし、直ぐ柔らげて）君か？

笙子（大きく吸つた煙を、ほうつと龍介の顔に吐きかけて、含み笑ふ）

龍介 ははは……君なんか先づ。僕の眼中に無いね。だいたい君の様なキザな女は僕は嫌いだ。

笙子（無関心に）どうして妾、こんなに龍ちゃんが好きなんか知ら。自分にも解らない。（両足を投出して龍介を盗視し乍ら）龍ちゃんたら、一寸古いけどナヴラウに似てゐて、ふふふ……（龍介に凭れ掛つて再び煙草の煙をふうつと吐きかける）ねえ（上眼にて見る）……龍ちゃん好きになつてもいゝ？

龍介（鋭く睨んで）馬鹿!! つまらない真似は止せ（どんとせう子を突き退ける）

笙子……（その途端に軀をくねらせて龍介の頬に両掌を掛け、つと唇を盗まうとする）

龍介 見損なふな!!（平掌がせう子の頬に喝つと鳴る）

笙子 あ痛つ!!（顔を歪め乍ら頬を抑へて）チエツ! ぶたれても、惚れてる弱みで仕方がないわ。（ぱいと吸殻を火鉢の中に叩き込んで情慾的に龍介を睨む）

問

龍介（平静に）帰り給へ。（立上る）

笙子（流石にしよげて）帰るわよ!（渋々立上る。） 問 （笙子玄関から急に朗かに）龍ちゃん。あした何時に來りやいゝ？

龍介（部屋の中をぐるぐる廻り乍らだが優しく）午前十一時頃 明日は、ぶつた代りに午飯を御馳走しよつ。

笙子（玄関に立つたまゝ）眞実？ だけどもまた秋刀魚ぢやない？

龍介（立止つて）嫌なら、無理にとは云はないよ。

笙子（頭かぶりを振つて）うん、いゝわよ。オーケイ。では妾のリーベちゃん、アチウ……（元氣に格子戸を開けて）あゝら、雪が降つてるわ。やんなつちまふなあ（奥に向つて龍ちゃん！龍ちゃんたら……）

龍介（玄関に出て来て）なんだ、まだ帰らないのかい？

笙子（口元で微笑んで）雪が降つてんのよ。傘借してくんない？

龍介（一寸口元を歪めて）傘？ 困つたなあ。僕んところには、そんな氣の利いた物は無いんだ。

笙子 あゝら實用品ぢやないの。傘の一本も無いなんて、藝術家なんて変り者ね……

龍介（何か氣が付いたらしく）さうだ。僕のオーバーを着て行き給へ。一寸大きいけど……（奥へ行つてオーバーを抱へて来る）

龍介 これで我慢するぞ。

笙子（着物の上からオーバーを着て見る）男臭いわね、これで電単に乗るんぢや。妾氣まりが悪いわ。

龍介 文句を云はずにお帰り。

笙子 ふふ……文句なんか云はないわよ。ぢやあ借りてくわ。妾の龍ちゃん御機嫌さん……（歌ひ出す）タラッタ、タッタラッタ……（歌聲次第に遠くなり雪の中に消える）

問

龍介 ははは……可愛いゝ奴だ。（奥に這入り窓外を見て）大分降つて来たなあ。吹雪にでもならなけりやいゝが、併し秋刀魚の季節に雪が降るなんて珍らしい年だなあ。そうだ（急に思出した様に）秋刀魚でも焼かうか。（電燈にスイッチを入れ、壁に掛つてゐる兄健作のオーバアコートが眼に付くと）兄貴も

どこをうろついてゐるのか、相変わらず遅いなあ。……（火鉢に炭をくべて勝手に去る）

此の時、子を背負つた二十歳位の断髪の女が尋ねて来る。ショールを子供の頭からすつぱり掛けて雪を除け、手に小さな風呂敷包を下げてゐる。玄関の小島龍介と云ふ標札を見て暫らく何か思案してゐたが、聽て静かに格子戸を開けて案内を乞ふ。

女（躊躇がちに）御免下さい。（問）返事が無いので再度（御免下さい）。

龍介（はあ。（勝手から大声に答へて秋刀魚を載せた皿を持つて出て来る）何誰ですか？

女（もぢもじし乍ら）あの……小島龍介さんのお宅はこちらでせうか？

龍介（無頓着に）はあ、僕が小島龍介ですが……

女（固くなつて）あの……お宅に小島健作があると聞いてお尋ねしたのですが……

龍介（秋刀魚の皿に氣が付いて下に置く）はあ。居りますが、唯今は留守です。何か御用でもあるんですか？

女（明らかに困卸の色を見せて）はあ。あのお逢ひすれば解ることなんです……

龍介（相変らず無頓着に）さうですか、で君は？

女（羞恥んで俯向く）……リンコと申します。あの……健作の……。（問）

龍介（あゝ、さうですか（周章てゝ呑込んで改めて女の顔を凝つと見る）まあ兎に角上り給へ。兄責もそのうち歸つて来るだらうから。（女の周囲を見廻して）君。傘もさゝずに来たのかい？

リンコ（氣まり悪さうに）えゝ。

龍介 さうかい。寒かつたらう。さあ。這入つて待つて居給へ。(秋刀魚の皿を持つて奥へ這入る。リンコは子供の眼醒めない様にシヨウールをそつと取り雪を払つて奥へ行く)

(問)

龍介、鉄器を火鉢に載せ、汚れた坐布團を裏返へしてリンコに勧める。リンコは這入つて来て、室内の殺風景な有様を見て軽い不安の色を現はすが、壁に掛けられた見覚えのある健作のオーバーコートを見て直ぐにほつとした表情に変わる。

(問)

龍介(火鉢の炭火を丹念に立て乍ら)こんな常識外の(邊りを顎で示して)生活だからね。生憎、コーヒーのお茶も切らしてしまつたんで、お客様にお茶も上げられないよ。

リンコ(背中の子供を気にし乍ら)いゝえどうぞお構ひなく。(龍介の殆ど櫛目の見えない頭髮と絵の具だらけの上衣に注目する)

龍介 まあ、緩くり手でも炙つて貰ふんだな。そのうち秋刀魚でも焼いて御飯でも食べて戴くさ。(火箸を灰の中に突刺してリンコを見る。)

リンコ(視線を避けて)どうぞあのどうぞ、構はないで下さい。

龍介(無頓着に)御飯と云つたつて、昨日のだがね。

リンコ(龍介の眞面目な顔を見て、思はずぶつと噴出し、慌てゝ眞つ赤になる)

龍介(リンコを見て)ははは……若い娘さんが聞いたら可笑しいかも知れないなあ。併し(眞顔になつて)僕はいつも一度にうんと焚いて置いて、三日も四日も冷飯を食つてるよ。今なら悪くなる憂ひはないし第一世話がなくていゝ。こゝ等が独身者の世界とても云ふさ。

リンコ（面白さうに微笑む）あら、まだお独身ひとりごみであらうしやるんですか？（と云つて改めて室内を見廻す）

龍介 僕のような男の處へ、お嫁に来る女がないんでね（鉄器が焼けて来て魚臭く煙る）
リンコ まさか、そんなこともないでせうけど……

（絶えず背中の小供に氣を配る）

龍介 時に（話題を外らす様に）兄貴は、君の來るのを知つてんのかなあ。

リンコ（はたと当惑想に）いゝえ。突然だから知ないと思ひますわ。

龍介（不審氣に）ぢやあ、逢ひたいつて……君、今まで兄貴と逢つてたんぢやないんかい？

リンコ（次第に暗い面貌かほになり）いゝえ。もう一年も、ずっと逢ひませんの。

龍介（意外な面貌で）ほう、そうかい。僕はまた今迄何處かで逢つてゐたのかと思つたよ。まさか別れたわけでもないんだらう？

リンコ いゝえ。（突然脅えた様に子供が泣き出したので軽く軀を振りながらあやす）

龍介（子供の顔を覗き込んで）君の子供かい？

リンコ（えゝ。氣まり悪さうに頷いて小声で）よいよいよい。おねん寝するのよ。（子供を振返り覗き乍ら）健作さんとの間に出来た子ですわ。

龍介 ほう。兄貴にもこんな可愛い子供があるんかなあ。（間を置いて）失禮だが、君いくつ？

リンコ（羞恥んで）十九……。

龍介（更に意外な面貌で）十九？まだ少女なんだね。僕は又二十三になるかなと思つたよ。十九で人の子の親か（感慨無量で）僕は三十二で、まだこの通り屋根の上のペンペン草だよ。

リンコ……（眞赤に顔を火照らせて小供をあやしてゐる。小供頻りに泣き続ける。）

龍介 腹が空いたんぢやないかな。降ろして乳でも飲まして見給へ。

リンコ……（頷いて小供を降ろし小供に乳房を含ませる。）

問

龍介（鉄器の上に秋刀魚を乗せる。忽ちジウジウと油汁の滴る音がする）君、兄貴と一年も逢はないなんてどうしたんだ。

リンコ（小供の嫌がる口へ尚も乳房を含ませ乍ら）あのひと、私が嫌ひになつたんですわ。そして（急に聾を顫はせて）この子も、僕の子ぢやないつて……（云ひ掛けて堪らなくなつて啜泣く）

問 （子供頻りに泣く）

龍介（秋刀魚の油煙に顔を歪め乍ら）併し君は、確かに兄貴の子だと信じてゐるんだね。（凝つとリンコを見詰める）

リンコ（啜泣き乍ら）えゝ、私……男つてあのひとより知らないんです。でもあのひと、飽くまでも僕の子ぢやないつて……私の話なんか取上げて呉れないんですわ。（口惜しさうに涙を噛んで）私、この子が私生児になるのかと思ふと、堪らなく悲しくなつて……（わつと子供の胸に顔を埋めて泣く。子供尚も泣き続ける）

問

龍介（当惑さうに顔を歪める。秋刀魚を焼返へして）どれ、僕が抱いて見よう。（火鉢越しにリンコから子供を受取る。）おお、よしよし。オロッソッソ（色々な表情をする）小父ちゃんに抱かつたら（子供の顔を覗いて）泣くんぢやないよ。（立上つて静かに歌ひ出す）坊や良い子だ……ねんねしな。坊やの父

ちやんど處行つた……：（部屋の中をぐるぐる廻り乍ら赤い夕陽の満州へ（歌ひ続ける。リンコは堪らなくなつて俯伏して忍び泣く。秋刀魚が物凄く燻つて煙が部屋中に渦巻さ流れてゐる）……お国の為に行きまし……た。（燻つてゐる秋刀魚を眼を丸くして見て）あらゝゝ大變だ（火鉢の側に凭つて秋刀魚を皿に移し、生の秋刀魚を再び載せる。）

リンコ（暫くして顔を上げ）済みませんわ。泣いたりして……（火箸を受取つて秋刀魚を焼き出す）

龍介（再び歌ひ乍ら廻る）坊のお土産に……何をやる……。馬賊の首に、金の犬……。立止つて子供の寝顔を凝つと見て）罪の間に生まれた子には罪無しか（独言の様に言つて淋しく微笑む）ぎこちない子守歌を歌つてゐるうち（稍感傷的になつて）僕自身、故郷の母親が戀しくなつてしまつた。柄にもない懷郷病か ははは……

リンコ（秋刀魚の煙と涙に汚れた眼元に軽い微笑を見せて龍介を見る。）とても氣むづかしい子なんですわ

龍介（子供の寝顔を見て）僕に抱かつたら黙つてゐるよ。可愛いゝ顔をしてるなあ。（再び廻り出す）（君、と云つてリンコを見て）いつから兄貴と知り合つたんだい？

リンコ（油煙の行方を追ひ乍ら）たしか。去年の二月でしたわ。

龍介 君の職業は？

リンコ（リンコ羞恥そうに）……女給もしましたし、レビュー……の踊り子もしましたわ。

龍介 ふむ。そうか……（秋刀魚の油煙に氣付いて）凄い臭氣だなあ。君、廻転窓を開けて呉れないか。リンコ（立つて行つて、廻転窓を開ける。）

パラパラと雪が吹き込んで來る。窓外の電飾に照し出された雪景色を見て、物思ひに沈む。雪の夜の無

氣味な物静かさに、二人は暫く無言。

問

龍介（不圖秋刀魚に氣が付いて）おい、君、さんまが燃えつちまふよ。

リンコ あら！（龍介と顔を見合せて）濟みません。茫然うろたしてゐて（火鉢の側へ行つて秋刀魚を皿へ移す）私、なんだか故郷のことを思出してしまつて……（生秋刀魚を鉄器へ載せて炭火を立てる）

龍介（同じ思ひに立止つて）君、郷土は何處？

リンコ（俯向いた儘）北海道ですわ。

龍介 北海道？ 随分遠方だね。いつ東京へ来たんだい。

リンコ 一昨年……。生活苦から逃れて来たんですわ。

龍介 眉をひそめて 生活苦から？ ぢやあ、君、家出して来たの？

リンコ いゝえ（急に悲しそうに）売られて来たんですわ。

龍介（愕然として）売られて来た？（余程魂を打たれたらしく涙つばい声で）君！ そりや本当か？

（リンコの傍へ坐る）

リンコ（顔を伏せて）えゝ、御存じのあの凶作で、小作農の私の家では、（声を呑んで）子供ばかり多勢でその日の生活にも困つたものですから。私、見てゐられなくなつて。……父に頼んで売つて戴いたんです。

龍介（暗然として）君から頼んで売られて来たんだね。

リンコ（秋刀魚の油を凝つと見詰め乍ら）えゝ。でも、（と言葉を呑んで）桂庵の手数料や、私の衣裳代

やでじつさいに父の手に這入つたのは七拾円ばかりでしたわ。(當時を懷想する様に眼を瞑ちて)そして私、新宿のルナパークへ勤めることになつたんです。(秋刀魚が物凄く燻つてゐるが氣が附かないらしく火箸で灰の中を掻廻してゐる。)

龍介(益々暗鬱になり)七拾円?(何者かを嘲笑する様に)人間一人が七拾円か。牛馬よりも安いんだね。ブルジョア玩具の小犬でさへ、五〇や百はするのになあ。ははは……(淋しく微笑んで)皮肉な世相になつたね。……(指の先でそつと涙を消す)?

リンコ(涙の溢れてくるのを微笑み返して)でも仕方がないと思ひますわ。私は唯、生きて行くだけでたくさんです。それだけでも今の私には重荷ですもの。

龍介 そうだ、生きることが結局、苦痛以外の何者でもないからなあ。僕は、自分に虚栄心が無かつたらもつと楽に生きれると思つてゐるんだ。(子供の寝顔を見て)おい眠つたらしい(そつと立上つて寝台の側へ行き毛布に子供を包んで寝せ、暫く子供の様子を見て火鉢に戻る。秋刀魚に火が黚いてゐるのを見て)あつ! 到頭燃えちやつた。

リンコ(はつと氣附いて)あら! 済みません。(急いで火鉢の隅へ鉄器を下ろし)私、ぼんやりばかりしてゐて……

龍介(バツトに火を點け)まあ、いゝさ。黒焦のも風味があつていゝよ。ははは……(この時傍らのオルゴールが歌ひ出す)おや、もう七時か。(二人同時にオルゴールを見る)

問

龍介(不圖思出した様に)君、ルナパークで兄貴と知つたのかい?

リンコ(龍介の顔を見て直ぐ眸を落し)えゝ。(と頷いて)女給になつて三日目に、あのひとから拾円の

チツプを戴いたのが切掛でしたわ。その拾円のお金（思出を拾ふ様）に私はどんなに嬉しかったでせう。なんだかあのひとが神様の様に感じられましたわ。私、そのお金で早速弟の小学校の教科書と、妹達の着物を買つて送つてやりましたの。

龍介（感動して）小さな弟妹達は躍上つて欣んだらうね。（と云つて言葉を切り泌々と）君は偉いなあ

……

リンコ あら、偉いなんて。（一寸微笑んで見せて）それからあのひとは来る度に五円、拾円とチツプを下すつたのよ。さうして誰よりも可愛がつて下さつたの。私、あのひとをすっかり信頼してまつたんですわ。三月ばかりたつて、私が身上話をしますと、とても同情して下すつて、それならもつと金になる、いゝ所へ世話をしてやらうと仰言つて、場末のレビユ小屋の踊り子にして下すつたんですわ。でも（と云つて急に悲しそうに声を落し）その時は、既に妊娠してゐたんです。それに後で氣が附いたのですけど私、踊り子に売られてゐたんですわ。（静かに、啜泣く。）

龍介……………（感に打たれて暫く無言）君、（と云つてリンコを見詰め）君は余りに純情な女だつたんだ。そして余りに弱かつた……………

リンコ（涙の顔を上げ）えゝ、私……………とても弱かつたんですわ。いゝえ、世間知らずだつんですわ。（啜泣く）

龍介（火の點いた秋刀魚に煙草の灰をなすり落して）それからどうしたの？

リンコ（たどたどしく）あのひと、それからは一週に一度位小屋に来て下すつたけれど、来る度に、小使錢だ、煙草錢だつて強請せびんです。私、どんなに苦しかつたかしれませんわ。そのうちの方も思ふ様にならなくなつて、ステージにも立てなくなると、座長さんの氣嫌は悪いし、朋輩達には変な眼を以て見

られるし、私（唇を噛んで）一晚中、眠らずに泣明したことがどの位あつたか知れませんが、そのうち子が生れるとあのひとは僕の子ぢやないつて、まるで切れた風船玉の様に見向いてもくれないんです。

（到頭がばと泣伏してしまふ）

龍介……………（無言の儘、膝に落ちた煙草の灰を払ふ。）

間。吹雪になつたらしく窓つつ風の音ひ

と頻り、鉄器の秋刀魚、緩やかに燻つてゐる。

此時、健作帰る。幾分酔つてゐるらしく顔を眞赤に火照らし、トレンチの襟を立てゝゐる。（続く）

戯曲 秋刀魚を焼く女（二）

「山桜」昭和十年三月号

リンコは泣腫らした眼元を手巾で拭ひ乍ら折々玄關の方を見る。間もなく鼻下髭を撫で乍ら健作這入ってくる。

健作（瞬間にリンコを見て極度の驚きをみせ）呀!! 貴様はリンコ!!（と叫んでしまつてから努めて平静を装はふ）

リンコ（懐かしさと不安の氣持にて健作を見上げ）お帰りなさい（と云つて俯向く）

健作（ジロリと龍介を見て再びリンコを睨み）貴様は（黒声を含んで）誰に断つて此處へ来た！

（龍介は子供の寝顔を覗き乍ら二人の昔話に耳を澄ます。折々吹雪がどんと当たつて窓を揺さぶる）

リンコ（健作の顔色を窺ひ再び俯向き）昨夜、小屋が閉館つてから逃げて来ました。

健作 何!!逃げて来た。（颯と険しい顔になるが直ぐ）ふん。さうか（と侮蔑の色を現はし）だが、貴様の軀には金が懸かつてゐるから、座長の奴が逃すもんか。

リンコ（強く）私、もうどんなことがあつても帰らないわ。ね。（哀願的に）もう一度、元のあなたになつて下さらない？ あの子が（と云つて寝台の子供を見て）可愛そうですもの……私、心から願ひするわ。

健作（火鉢の側に坐り乍ら寝台の子供と龍介を見る）ふん、また百満遍の繰返しか、聞きたくもないね。過ぎた昨日が来ない様に、元の心になんかなれる筈がないさ。（ポケットから金口を摘まみ出し、秋刀魚の燃殻を取つて火を点ける）

リンコ（健作の膝に縋り）そんなことを仰有らないで。元の優しい健作さんに販つて下さいね。ね。（健作の顔を見上げ）もう一度よ。もう一度、お願するわ。

健作（リンコの手をはね退けて）五月蠅いね。何度云つたつて同じだよ。元の優しい？ふふふ……（侮蔑の眼射してリンコを見て）君も相変わらず子供だね。僕は元來やさしい出来でないんでね。お氣の毒さ。（ふつ）と美味そうに煙草の輪を造る）

リンコ（再び健作の膝に縋り）あなた（眼に一杯涙を溜めて）それではあんまりですわ。あんまりです

わ…………子供まで生ませて置いて…………あなたは子供が可愛くはないんですか？

健作（ジロツとリンコの横顔を見て）ふん。子供？ 僕の子でない者が可愛いゝ筈はないさ。

リンコ（唇を噛んで怨めし相に健作を見上げ）あんまりです。あなたの子ぢやないなんてあんまりです。（再び唇をきゅつと噛んで）覚えがある筈です。あなたの子に違ひはないんです。健作さん！ あなたは。あの子が私生児になつても構はないと仰有るんですか？

健作（電燈を見上げて）私生児？ そりや僕の子ぢやないんだから。僕には関係がないよ。

リンコ（極度の哀願を罩めて）そんな意地の悪いことを仰有らないで…………あの子が可愛そうです。ね。

あなた…………（啜泣く）

健作（ぼいと火鉢へ吸殻を棄てゝ）子供、子供つて（語氣を稍々強く）僕に何の関係があるんだ。誰の子だか解らない子供の親に誰がなれるか、バカな。

リンコ（必死に健作に取縋つて）それでは。あんまり…………です。あの子が…………あの子が…………（啜泣く）
健作（烈しく）五月蠅い!! 馬鹿!!（どんとリンコを突返す）

リンコ…………（倒れてわつと声を上げて泣く）

健作は冷然とリンコの泣伏してゐる姿を黙視し、トレンチのポケットから、小型のウイスキーの瓶を取出して口飲みをやり出し、傍に焼けてゐる秋刀魚を手掴みにして美味そうに喰ふ。

鉄器の秋刀魚は眞赤な火になつて明滅してゐる。此の時、龍介、緊張した面貌にて寝台より離れ火鉢の前に坐る。燃える様な憤怒の瞳に健作を凝視する。

健作は龍介の顔を見て、不快な色を現はすが、それも直ぐ消えて無頓着にウイスキーを飲み続ける。

リンコは俯伏した儘、肩に波を打たして泣いてゐる。外は吹雪が益々激しくなつたらしく、ごほうつと云ふ不氣味な音が断続的に聴え、折々、自動車の警笛が鋭く流れて来る。(間)

龍介(じつと鋭く健作を睨んで)兄さん!!

健作(ジロリと龍介を見返し、再び秋刀魚をつまむ)

龍介(静かに併し鋭く)兄さん!! リンコさんに、もう少し暖かな言葉を掛けてやつたらどうです。(リンコの俯伏した姿に眸を落す)

健作 ふゝん(薄笑ひを浮べて)どうしてだね。(ジロリと龍介を見る)

龍介(ピリツと眉を寄せて)余りに、可愛そつぢやありませんか! 僕はリンコさんから(リンコを見て)すべてを訊いたのです。リンコさんは、兄さんの為に女の一生を棒にふつたのです。

健作(ウイスキーをぐつと飲んで)知らんね。女の一生棒に振らうが振るまいが僕の故ぢやない。それが一體僕と、何の関係があるんだね。つまらんことは云ひつこなし。そんなことはどうでもいゝぢやないか それよりも(と云つてウイスキーの瓶を差出し)まあ一杯飲めよ。英国産、ジョニオーカーだぜ。素敵だよ。

龍介(噴りの瞳にて健作を睨み)そんな物は嫌ひだツ(ウイスキーの瓶を跳飛ばして)兄さん!! あなたは卑怯です!! 自分で誘拐して置いて、子供が出来てしまつたら知らぬ顔をきめるなんて、男らしくもないぢやありませんか!

健作(噴りに眞赤になつて)誘かいとは何だ! 失敬なことを云ふな!! 貴様なんかにとやかく云はれる覚えはないんだ!

(二人の争ひが不安になつたらしく、リンコはそつと泣き腫らした顔を上げて二人を見る)

龍介（噴然と火鉢に、にじり寄つて）誘拐だから誘拐と云ふんです。純情な野育ちの少女に、態とらしい親切を押し付け、レビューの踊り子に叩き売つても誘拐ぢやないと云ふんですか！ 剩へ、貞操を散々弄んで置き乍ら、子が生れたら知らんなんで。それでも誘拐ぢやないと仰有るんですか？

健作（噴りに息をはづませて）何と云ほうと僕は知らん。

龍介 兄さん！（稍々語調を柔げて）兄さんは寧ろ この女の前に、凡ての仮面を脱いで謝罪すべきです。

健作（火鉢の縁をぐつと掴んで）仮面とは何だツ!! 何が仮面だ。貴様の云ふことは一々癪に障る。

龍介（平然と）仮面です。女を誘拐して置ても、しないの、或ひは事実、自分の子であり乍らそれを否定するなんて、仮面でなくてなんでせう。立派な仮面です。併も道德の破壊者である憎むべき仮面です。

リンコは戦き乍ら二人に注目し、健作は怒りに全身を小刻み顫はせて龍介を睨んでゐる。室内にはまだ秋刀魚の悪臭が漂つてをり、窓打つ吹雪の音が断続的に聴える。間。

龍介（静かに）兄さん。兄さんはリンコさんに子を生ませて置いて、知らぬ顔し、或ひは平然として居られるかも知れませんが。併し（リンコを見て）それではリンコさんが可愛いそうです。伸び行く人生の発芽を摘まれ、剩へ私生児を背負はされて、この複雑な社会に放り出されたらどうなると思ひます。考へて御覧なさい。またこの子が成長して、自分が私生児と知つた時、どんなに我身を嘆き、父母を呪ふかも知れませんが。（健作ポケットから金口を摘み出して火を點け、ジロリと龍介を一瞥する）リンコさんだつて、この儘では郷里へも帰れないだらうし、まして凶作に苦しむ父母の元に、私生児を抱いて帰り得る

筈がないんです（こくりと唾を飲み）と云つてこの儘で居れば、この悪の横顔である東京の世相は、必ずリンコさんを餓死線内に追詰める事は明白です。或ひはこの女は（リンコを見て）自殺を企てるかも知れません。兄さん!!（きつとなつて健作を見る）兄さんの眞心一つで、幾つの生まれよつとする悲劇は、幸福に変わるんですよ。

此時、リンコは火鉢に火の無くなつたのを見て、炭取りを運んで来て炭を入れ、傍らの風呂敷包みを広げて、おむつを出して畳む。（以下次号）

〔山桜〕昭和十年五月号）

戯曲 秋刀魚を焼く女（三）

健作はつまらなそうな顔をして煙草の輪を造つては、ほうほうと電球に向つて吐掛けてゐる。

龍介（話を続けて）兄さん！自分で撒いた種は自分で育て、自分で刈取らなければならないんです。

兄さん（眼に一杯涙を潤ませて）僕からもお願します。リンコさんを幸福に上げて下さい。それが至當だと思ひます。

健作（ぼいと吸殻を棄てて）ふん。（嘲笑的に）どう考へても、何故僕がそうしなければならないのか解らんね。

健作の一言にリンコは、悲しい眼射しに健作の横顔を見て涙ぐみつゝおむつを畳む。ごほうと凄い吹雪の音がして、ぱつと電燈が消える。あら、停電か知ら？と云ふリンコの声聴える。火鉢の炭火に赫々と前半身を照し出された、龍介、健作の二人沈黙の儘対座。間も無くぱつと電燈が點る。(間)

龍介(唇を顫はせ)兄さん!!では、あなたは、リンコさんと何の関係も無いと仰有るんですか?。

健作(益々平然として)関係は無いとは云はん。併し子供は僕のじや無いと云ふんだ。(リンコ悲しそうに健作を見る)

龍介 関係が有れば、兄さんの子供に間違ひはないぢやありませんか?

健作 ふゝん(鼻で嘲笑つて)だから女給や、レピューガルと少しの関係があつたとしても、子が出來たからつて、その度に尻を持ち込まれたんぢやあ、男の體なんか、幾つあつても堪らんからね。

龍介(きつぱりと)僕は、リンコさんの言葉を信じます。この女は兄さんより他に男との関係は絶対に無いと思ひます。リンコさんは余りにも純心な方です。寧ろ、兄さんこそ、過去を辱ねても駄らしなさ過ぎるぢやありませんか?

健作(苦々し氣に)リンコが、他の男と関係が無い? ふん。そんなことが解るもんか。僕ばかりが男ぢやないからなあ。誰の子だか解つたもんか。(涙ぐみつゝ黙つて聴てゐたリンコは、怨めしそうに健作を見詰めて)ゐたが、極度の悲嘆みに激しい眼暈を感じたものゝ様に泣伏す。

龍介(静かに)兄さん、それでは生れた子が可愛そうです。リンコさんの浮ぶ瀬がないぢやありませんか。可愛いゝ娘が、父無し子を生んだと聞いたら、リンコさんの父母はどんなに、嘆くか想像してやつて下さい。ね、兄さん(しんみりと)僕達にも年老いた母がありますね。兄さんが大学在学中に、赤に

なつて検挙されたと知つた時、お父さんは、国家に對して申訳がないと割腹自殺をなされたのを、まさか忘れもしなでせう（指先で涙を消して）それから僕が始めて帝展に入選した時と……兄さんが転向したと聴いた時の、お母さんの欣び、それが嘘とも知らずに、瞳の見えない程眼を細めて喜んだあの時の母の姿が、まだ明瞭と脳裡に刻み付けられてあります。兄さん（語調を強く）あなたには、人間の一番美しい愛情と云ふものが、お解りにはならないんですか？（再び指先で涙を消す。リンコは堪らなくなり袂を噛んで咽び泣いてゐる）

健作（白けきつた、室内が堪らないと云ふ風に）ははは……馬鹿に殊勝な佛心になつたもんだね。（金口に火を點けて）僕も頭に白髪でも生えたら、そんな氣持になれるかも知れないなあ。

龍作（奮然と）それではどうしても知らないと云ふですね。兄さんの子ぢや無いと仰有るんですね。兄さん（少々言葉を柔げて）兄さんが判然認識してやらなければあの子は（と云つて寢台を指し）私生児になつて了ふんです。一人の父無し子を出すことは、社会道徳上にも見逃せない大きな罪悪です。

健作（極めて不機嫌そうに）くだいね。知らんと云つたら、知らん!!

龍介（冷ややかに）現在の罪だけでたくさんぢやないですか？これ以上罪を重ねる氣なんですか？。

健作（急に険しい顔になつて）現在の罪とは何だッ!!

龍介 或る種のテロ運動です。

健作（煙草をばいと棄て、中腰になり）莫迦!! 何を云ふのだ、た、た誰がそんな………（明らかに狼狽の色を見せる）

龍介（追究的に）兄さん！隠くさなくてもいいです。僕は凡てを知つてゐます。赤の学生を煽動して……健作（龍介の言葉をもぎ取つて蒼白になり）バカ、バカ、バカ、バカ、貴様なんかに、僕の行動が解るか!!

(リンコ驚いて二人を見てはらはらする。此の時、再び停電し直ぐ点もる)

龍介 もつと言ひませうか？上海系の支那人密輸者から、爆発物の入手を待つて政界の巨頭を……………。

健作 (極度に狼狽して) 馬鹿ッ!! 何を云ふッ!! (発止と龍介の頬を擲る。)

龍介は擲られて奮然と立上り、健作を鋭く叩き付け散々に擲る。リンコは余りの出来事に愕然として咄嗟に龍介の腕に縋り付く。瞬間停電してしまつて、子供突然に泣出す。暗黒の中怒号聴える。

リンコ (泣乍ら龍介に縋つて) 赦して赦してやつて下さい…………… (瞬間電燈が点る邊りの乱雑な光景を照出す)

龍介 (唇を顫はせ乍ら) こんな奴は (健作を睨み) 擲らなけりや解らないんです。リンコさん (泌々とリンコを見て) 君はどこまで素直なんだ、愛人の擲られるのを見るのは忍びないんだね…………… (健作は乱れた髪を搔上げ、ネクタイの結び目をなほし乍ら龍介を睨んでゐる) 兄さん、(健作を見て静かに) よくそれで戀愛が出来ましたね?。

健作 (烈しく) 何ッ!!。

龍介 (冷やゝかに) 戀人の仕末も、子供の仕末も出来無い者は、戀愛をする資格が無いんですよ。動物だつて子供を養ふ事位知つてゐますからね。

健作 生意氣云ふな!!。

龍介 兄さんの、面の皮は一體何張りですか？あまり色彩の無い面なんか、いゝ加減に張替へたらどうです。大體、あなたと僕の父は全然別個の人ですね。若し同じだとすると、眞理も二つ、てなことになりますからね、ははは……………。

健作（努めて平静を装ほひ、金口に火を點けて、無言の儘龍介を睨む。（リンコ俯伏した儘啜泣いてゐる。子供頻りに泣続ける）。

龍介　兄さんの辞書には、愛と云ふ文字も、道德と云ふ文字も無いんですか？　まあ、テロ運動をする隙があつたら、文字の分析でもしたらどうです。兎に角、たつた今出て行つて下さい。

健作（冷然と）ふん、誰がこんな家に居てやるもんか……………（帽子を無雑作に掴み玄関へ出て行く）

龍介（後姿を眼で追つて）あなたの様な人に居て貰つては甚だ迷惑です。貧乏画家には、貧乏画家の仕事がありますからね、それから、（と云つてリンコと子供を見て）子供を私生児にするのは可愛想ですか。子供の父には僕がなります。後で異存は無いでせうね？

健作（靴を穿いて）ふん。勝子にするさ、異存なんか勿論あるもんか、（冷やゝかに僕はまだ、人の子の親にはなりたくないからなあ。はつはつはつ……………）。

投棄る様に云つて、健作は吹雪の中に消えて行く。子供頻りに泣き続ける。龍介は感慨無量のまゝ立ち尽くしてゐる。（短い間）　此時、今まで泣伏してゐたリンコは突然物の怪に憑かれた様に蒼白い顔して起上る。

リンコ（一切の表情を棄てゝ）待つて……………あなた待つて下さい……………あなた……………（脱兎の様に吹雪の中に走り去る。子供火の付いた様に泣出す。ごはうと吹雪の音ひと頻り）（短い間）

龍介（子供に氣が付いて寢台に近づき、そと子供を抱く）おおよしよし……………（泣顔を微笑んで見て）良い子だから泣くんぢやないよ。さあ、泣くのはお止め。（凝つと感慨深そうに見詰めて）坊やのパパは小父さんなんだよ。……………（静かに廻り乍ら、歌ひ出す）坊のお土産に……………何をやる……………馬賊の首

に金の……犬……。

火鉢の前に来て佇み、淋しそうに微笑み乍ら、眞つ黒に燻った鉄器の秋刀魚を見詰めてゐたが、聴て子供の顔を沁々と眺め、そつと指先で涙を消す。ごうつと云ふ吹雪の音が断続的に聴える。(幕)

(「山桜」昭和十年六月号)

コント 氣紛れ蟲

氣紛れ蟲とはあなたの腹の中に

巣喰つてゐる虫のことである

燻銀の空に雲雀が消えてからの位過つたのか、彼は不圖少女の体臭の中に冷たい現實味を感じて、ポツンと沈黙に落ちて了つた。乱れた髪を掻き上げ乍ら甘酸ツぱく匂ひ立つ花菜畑からそつと立上つた時、少女はもうまつかになつて狂女のやうに眞向ひの堤の上を走つてゐた。……花菜の上にはニンフのやうな淡緑の蜉蝣が戯れ、草の中にはRRR……と蟲が鳴いて……。

と云つたやうな、まるでフィルムの一齣でも観るやうな過去が彼にはあつた。今の彼はすっかり新進コント作家になり澄ましてゐた。

その彼が同人雑誌へ載せるたつた四枚のコントが書けなくて爰二三日、哀れな程悄氣返つてゐるといふ始末なのである。

彼は午後になつてぶらりと家を出た。

公園で暫し頭を休めて、途中喫茶店に寄ると、備へ付けのコレポン・カードへ文筆家らしい意識を働かせてちらツと注意を配る。いつもの習慣である。すると彼はカードの中からこんなのを引き抜いた。

今晚7時30分にMキャンデイ・ストアの喫茶部までお越し下さい。何故ですか？つて、理由はお訊きにならないことにして、私は白のボックス。お時間は紳士的に。では是非……お待ちしております。

癸夷子

このカードお読みの方へ

「へん。今時の気紛れ者にしちやあ念入りだなあ。」彼は吐出すやうに呟いたが、そつとカードをポケットへ藏ひ込んだ。たつた四枚のコントが書けなくつて憔悴してゐる彼である。ひよつとしたら材料位になるかも知れないと思ひ乍ら……否もつと彼を好奇的に結び肘けたのは、癸夷子といふネームが、以前の彼のそれもたつた一度の戀愛の對象と同じであることが、未だ二十四の彼をしてロマンチックな空想を構成させるのである。

勿論破はカツキリ七時三十分に指定された喫茶部へ来て見た。ぐるりとボックスを見廻した彼は、一番奥のたつた一つの白のボックスに、ダンサアといふタイプの綺麗な女性を発見した。

x

x

x

x

感覚的な紫の星座に、英雄的なバルコンの存在を喜ぶ彼である。

「矢つ張り癸夷子さんでしたか。……あれから三年になりますね。」

「だから過去が懐かしいと仰有るんでせう。」

「まあ、さうかも知れませんが。併し今晚ここであなたに逢へるなんて夢ぢやないでせうか。僕はあれ以来……あなたを……。」

「愛してゐて下さつたの。アリガタウ。だけど私……あなたの材料になるやうな女ぢやなくてよ。」

「それはどういふ意味ですか。」

「粉飾してゐるつてことよ。」

「その點、僕も同様ですが、あなたは……。」

「東京へ来たかと仰有るんでせう。ホホホ……これで私、文學に懂れて……：お定まりのオフィスガール、女給、そしてダンサアの今。」

「ほう。で、カードの念入りな招待は？」

「未知の方を未知の儘、戀愛遊戲をするつてのよ。どう？一寸面白いぢやない。」

「何故そんな氣持になつたんですか。」

「氣紛れよ。」

「え、では、あの時の僕への態度は？」

「仕方がないわ。あの時は十五でしたもの……。」

「ぢやあ、矢つ張り……。」

「沈黙がちよいと彼の口を抑へる。」

「ホホホ……氣紛れよ。」

星が流れて方向を替へる。彼の腹の中でも氣紛蟲がごっごっ鳴り出した。

初春のへど

俗物の歩み牛の如し

意志その他

怖るべき事。眞に怖るべき事は、世界の生命の中にある二つの和解し難きちからの間の闘争である。更に、人生の意義を人生そのものよりも高く置きつゝ、人生の意義が破壊されるや、しかも人生を破壊せずにはゐられない。といふ悲劇である。さうしてわれわれの悲劇は、われわれはわれわれ自身の意志を冒してまで意志しなくてはならぬ。といふ一つの矛盾より始まるこの矛盾故イプセンは生涯を悲劇した詩人であつた。

われわれは悟らねばならない。靈のための自制が靈夫自身を病弱な不具なものにするといふことを。

道德の概念も藝術の概念も永遠ではない。われわれは何時叛旗を掲げるか分かつたものではない。

絶えず問題になるのは意志ばかりだ。

鬼・敵・悲劇

鬼は退屈の餘り、掌^{てのひら}へ落書をはじめた。鬼の掌に書かれた、何と滑稽にも慄ツとする、噫々私の人生！

敵は既に七首を閃かせて懐へ飛込んでしまつてゐる。研澄ました刃物が咽喉もとへびつたり當てがはれてゐるとは人々は氣付かない。その刃の下で一体何をし何を歌はうといふのか。

詩を書いて何になる。詩を書かなくなつて誰も困りはしないのだ。困るのは作者、つまり詩人だけなんだ。

作家と詩人

作家が野卑で助平なら、詩人は隷屬的で無能な淫賣婦になり墜ちたばかりの處女である。裸体にされ、じろじろと好色の眼を注がれ乍ら、助平根性の對象となる類なのである。恐らくその場合の彼女等は、

相手の客を頭から軽蔑し、激しく嫌悪し乍ら、しかし満足の調節にされるのである。これが乃ち文壇に於ける作家と詩人の、また同時に現在の我国に於ける詩と散文の比喻である。さうしてどちらもかくも野卑なる比喻を持つてされるほどのものなのである。

苦惱と発狂

人間に耐え得られないといふ苦惱は無い。如何は苦惱が過重するとも、頑として耐え得る能力を人間は持つてゐる。苦惱が過重し、若し精神が打負かされた場合、その時その人間は発狂する。然し発狂する事に依つてその人間は苦惱に堪え得るのである。さうして人間が発狂すること依つてその人間の自由にはならない。それは最早神の領分である。神はその人間を発狂させることに依つてその人間に苦惱に堪え得る力を興へ給ふたのである、神は曰ふ。汝、苦惱の頂点に達したる者なれば速やかに發狂せよ。

ニイチ工を見よ、發狂もまた偉大である。

悲想なる祈り

神若しわれに、只一つにてよし健全なる眼を興へ給へ。さらば必ず偉大なる詩人になり了ほせるもの

を……天を仰いでさう嘆き乍ら、然し、幾多の、未完の癡詩人は盲目になつたのである。痛切なる悲劇なるかな。

義務の文学

室生犀星は復讐の文学と云つた。また或る詩人は、ああ現實は復讐されねばならない。と詠嘆して復讐の詩作を宣言した。然し私は負擔の文學義務の文學と云ひたい。現實はもつと負擔されねばならないのだ。われわれ人間の、現實への負擔は極めて大きい。現實はわれわれ人間に對して益々負擔を過重し、偉大なる義務を要求してゐる。人間は生れ乍らにして負擔を軽くする義務をもつてゐる。宇宙は負擔に満ちてゐる。われわれは義務の哲學、義務の思想、義務の行動を採らねばならない。私の詩作は負擔である義務である。さうして私が私の義務を遂行し了はつた時、私は死ぬであらう。

幽霊

詩は美しい幽霊であつた。眉目麗はしい面影を持ち、肌理も匂やかな、げにも氣高い姿をした幽霊であつた。古今東西、如何に多くの人々が、彼女を捉へようと腐心し、失望し、嘆き悲しみ續けてゐる。とか。その彼女はそれをさも心地よげに嘲笑い乍ら。隨時隨所、或ひは白晝公然と群衆の中へ姿を現は

すのであつた。最近では工場と云はず酒場と云はず、街頭、事務所、大學に、ギロチンにさへその憧れの姿を現すのであつた。偶々彼女は、この柵の垣根の中病院へも訪れた。人々はすつかり夢中になり、くずれた肉軀も仰々しく、嫌がる彼女を追ひ廻し僅かに彼女の裳裾の片鱗を捉へたように思つたのであつた。豈圖らんやその彼女は、柵の垣根をひとつ飛び、輝かしい裳裾をひらめかせ、遙か濃碧の空高く鮮やかなタンゴを踊り乍ら、彼女はしみじみ呟くのであつた。虫が好かないとでも云ふのか。癩者はどうも好きになれません。私のこの崇高な玉体からだにまで、あの嫌らしい癩の醜悪さをぬりたくらうとすからです。

愛吟詩評釋

日が暮れるこの岐れ路を櫛は發つた……
立場の裏に頬白が啼いてゐる歌つてゐる
影が増す 雪の上にそれは啼いてゐる 歌つてゐる
枯れ木の枝に ああそれは灯つてゐる 一つの歌 一つの生命いのち

三好達治開花集より

諸君よ、この詩を心ゆくまで味わつて見給へ。この一篇の作品の中に、清澄な音楽と、渺茫とした味はひが如何に巧みに秘められ表現されてゐることだらう。この詩の情操してゐるものは作者がその心の

中に、魂のもの侘しい薄暮を感じ、頬白の啼いてゐる風景の中で、その心に擴がつて來る薄暮の影を、侘しく悲しげに凝視してゐるのである。このやうに詩に於ては、いつも心の中の主觀が、外觀の客觀と結びつき、心の風景と自然の風景、心の薄暮と自然の薄暮とが一緒になつて表現される。故に詩には、抒情詩に對して云はれる叙景詩なんていふものはないのである。すべての詩は等しく抒情詩なのである。

純正詩論より引例

散文詩

椰子の實

私が扉の蔭で見るとも知らずに、少女は背伸びをして標本棚から古ぼけた椰子の實を取下した。懐しさうに頬ずりをしまるで人形でも抱くやうに両手に抱くと、いそいそと教室を出て行つた。何處へ行くのであらう？ 私は奇異な感に打たれ、少女の後をそつと尾けた。寮舎の間をいくつもぬけて赤松の林の中へ這入つて行つた少女は、そこで小さな腰を下ろし、可愛い両足をちよこんと投出して坐つた。私は赤松の幹に隠れてじつと様子を窺つてゐた。黄昏に近いそちの繁みの中で頬白が啼いてゐる遠い。潮騒のやうに木枯が渡つて行く。淡い日ざしを溼し乍ら泳いでゐる芒の葉群など、ひっそりと静まりかへつてゐる。少女は膝の上に椰子の實を乗せ、ながいこと見詰めてゐる。さうして聲は細々してゐて聞こえないが、何か愉しさうに呟いてゐるのである。少女の長い睫毛の下の瞳は莊嚴なまで澄んでゐる。やがてまた抱きすくめると狂氣のやうに頬ずりをし、そつと唇を押しつける。そんな事を何度も繰

返してゐたが、いきなり両手に椰子の實を高く差上げ、お父さん！と叫んで固く固く抱きしめた。私は思はずはつとした。今までの謎が一時にゼンマイのほぐれるやうに解けたのである。熱い大きな感謝のながれが胸の底を波打つて走つた。彼女は今父親と愉しい語らひをしてゐたのである。盡きることなき愛情の囁きに耽つてゐたのである。少女の手にあるのは、もはや椰子の實ではなく、父だつたのである。父親だつたのである。

少女は三ヶ月ばかり前病氣の重い父親と入院したのであつた。病院へ来るまで、不自由な父親を箱車へ乗せ、それを犬に曳かせて物乞ひの旅をしてゐたのであつたといふ。間もなく父親は小さな彼女を残して、病室の片隅で淋しく死んで行つたのを、その時不圖私は思ひ出したのである。面影の殆ど分らないまで病に犯された父親の顔を、ゆくりなくも椰子の實に偲んだのであらう。天涯に全き孤獨の少女と、哀れまた故郷を遠く流れ來た椰子の實の、何と床しい友情であらう。

少女の愛撫はまだ盡きない。少女が椰子の實であらうか。椰子の實が少女であらうか。薄暮の中で、私は迷昏に疲れ果てた。

臨終記

彼（北條民雄）が昭和十二年九月の末、胃腸を壊して今年二度目の重病室入りをして以来、ずっと危険な状態が続いて来たが、こんなに早く死ぬとは思はなかつた。受持の医師が、私に、北條さんはもう二度と立てないかも知れませんが、と云はれたのは彼が死ぬ二十日ばかり前の事であつた。私はその時はじめてそんなに重態なのか、とびつくりする程迂闊に彼に接してゐたのである。来る春まではまあむづかしいにしても、正月ぐらゐは持越すものと信じてゐた。それほど彼は元気で日々を送り迎へてゐたのである。彼にしても、こんなに早く死が訪れようとは思はなかつたに違ひない。尤も死期の迫りつつあることは意識してゐたらしく、その頃の日記にも、

「かう体を悪くしたのも、元を質せば自ら招けるものなり。あきらめよわが心。けれど、かう体が痩せてはなんだか無気味だ。ふと、このまゝ病室で死んでしまふやうな気がする。」

また重態の日々が続いた後であらう、苦悶の様が書かれてゐる。

「しみじみと思ふ。怖い病氣に憑かれしものかな、と。
慟哭したし。」

泣き叫びたし。この心如何にせん。」

その頃が最も苦しかつたらしく、また、死との闘争も激しかつたやうに見受けられた。私にも、おれはまだ死にたくない、どうしても書かなければならないものがあるんだ。もう一度恢復したい。と悲痛な面持で云つた事もあつた。

彼は腸結核で死んだのである。

彼は最後の一瞬まで、哀れなほど実に意識がはつきりしてゐた。文字通り骨と皮ばかりに痩せてはゐたが、なかなか元気で、便所へなども、死の直前まで歩いて行つたほどである。その辛棒強さ、意志の強靱さは驚くばかりであつた。それでも死ぬ三四日前には、起上るにも寝返りするにも、流石に苦痛を覺えたらしく、私が抱起してやるとほつとしたやうに、さうして呉れると助かるなあ、と嬉しげであつた。寢台が粗末で狭いので、痩せこけてゐる背中あたりが悪く、刺さへ蒲団が両脇に垂れ下がり、病み疲れた体にはその重量がいたく感じるらしく、よく蒲団が重いなあ……と苦しげに咳いた。私が蒲団を吊つてやらう、と云ふと、彼は俄かに不機嫌になつて、ほつといて呉れ、君、ここは施療院だぜ。施療院の、おれは施療患者だからな。出来るだけ忍ばにやらんよ。それに蒲団を吊ると重病人臭くていかん。と怒つたやうに云ふのであつた。平素の彼が、全く我儘無軌道ときてゐるので、こんな時、思ひがけなく彼の眞の姿に触れ、たじたじとさせられる事がよくあつた。

来る日も来る日も重湯と牛乳を少量、それも飲んだり飲まなかつたりなので、体は日増に衰弱する一方であつた。食べる物としては他に何も無いのであつた。流動物以外の物を一寸でも食べようものなら、直ちに激しい痛みを覚え、下痢をするらしかつた。彼はよく、おれは今何もいらん。只麦飯が二杯づゝ食ひたい、そのやうになりたい、と云つた。創元社の小林さんからの見舞品も、殆ど手をつけなかつた。尤も、これはおれの全快祝ひに使ふんだ、と云つて、わざわざ私に蔵はせて置いたのである。

それらの品々は悲しくも、お通夜の日、舎の人達や私達友人の淋しい茶菓となつた。彼はまた口癖のやうに、こんで元氣になつたら附添夫を少しやらう。あれはなかなか体にいい、やつぱり運動しなげや駄目だ。まづ健康、小説を書くのは然る後だ、と云つて、よくなつてからの色々のプランを立ててゐた。

そんな時の彼は恢復する日を只管待ち侘びてゐたらしく、また必ず恢復するものと信じてゐたやうであつた。小説はかなり書きたいやうだつた。君、代筆して呉れ。と云つたり、ああ小説が書きたいなあ……と悲しげに咳く事などもあつた。じつと寝たなりで居るので色々な想念が雲のやうに湧いて来るのであらう、おれは今素晴らしい事を考へてゐた。世界文学史上未だかつて誰も考へた事もなく、書いた者もない小説のテーマなんだと確信ありげに云ふ事もあつた。

病氣によいといふ事はたいていやつてみてみたらしいが、たいして効果は無かつたやうだつた。時には変つた療法を教へたりする人があつたと、真向から、そんなものは糞にもならん、あれがいいこれがいと云ふものは凡てやつてみたが、却つておれは悪くした。結局、病人は医者にいのちを委せるより他にないんだ、と喰つて掛る事もあつた。

死ぬ二三日前には、心もずつと平靜になり私などの測り知れない高遠な世界に遊んでゐるやうに思はれた。おれは死など恐れはしない。もう準備は出来た。只おれが書かなければならないものを残す事で心残りだ。だがそれも愚痴かも知れん、と云つたのもその頃である。底光りのする眼をじつと何者かに集中させ、げつそり落ちこんだ頬に小暗い影を宿して静かに仰臥してゐる彼の姿は、何かいたいたいものと、或る不思議な澄んだ力を私に感じさせた。私は時折り彼の顔を覗き込むやうにして、いま何を考へてゐる？と訊ねると何も考へてゐない、と答へる。何か、読んでやらうかと説くと、いや何も聞きたくない、と云ふ。静かな気持を壊されたくないのであらう。

彼の死ぬ前の日。私は医師に頼んで、彼の隣寢台を開けて貰つた。夜もずつと宿つて何かと用事を足してやる為であつた。私が、こん晩から此処へ寝るからな、と云ふと、さうか、済まんなあ、と只一言。後はまた静かに仰向いてみた。補助寢台を開けると、たいていの病人が、急に力を落したり、極度に厭

な顔を見せたりするのであるが、彼は既に、自分の死を予期してゐたのか、目の色一つ動かさなかつた。その夜の二時頃(十二月五日の暁前)看護疲れに不覚にも眠つてしまつた私は、不図私を呼ぶ彼の声にびつくりして飛起きた。彼は瘦せた両手に枕を高く差上げ、頻りに打返しては眺めてゐた。何だかひどく昂奮してゐるやうであつた。どうしたと覗き込むと体が痛いから、少し揉んで呉れないか。と云ふ。早速背中から腰の辺を揉んでやると、いつもは一寸触つても痛いと言ふのに、その晩に限つて、もつと強く、もつと強くと言ふ。どうしたのかと不思議に思つてゐると、彼は血色のいい顔をして、眼はきらきらと輝いてゐた。こんな晩は素晴しく力が湧いて来る、何処からこんな力が出るのか分らない。手足がびんびん跳ね上る。君、原稿を書いて呉れ。と言ふのである。いつもの彼とは容子が違ふ。それが死の前の最後に燃え上つた生命の力であるとは私は気がつかなかつた。おれは恢復する、おれは恢復する、断じて恢復する。それが彼の最後の言葉であつた。私は周章てふために、友人達に急を告げる一方、医局への長い廊下を走り乍ら、何者とも知れぬものに対して激しい怒りを覚えバカ、バカ、死ぬんぢやない、死ぬんぢやない、と咳いてゐた。涙が無性に頬を伝つてゐた。

彼の息の絶える一瞬まで、哀れな程、実に意識がはつきりしてゐた。一瞬の後死ぬとは思へないほどしつかりしてゐて、川端さんにはお世話になりつぱなしで誠に申訳ない、と云ひ、私には色々濟まなかつた、有難う、と何度も礼を云ふので、私が何だそんな事、それより早く元氣になれよ、といふと、うん、元氣になりたい、と答へ、葛が喰ひたい、といふのであつた。白頭土を入れて葛をかいてやるとそれをうまさうに喰べ、私にも喰へ、と薦めるので、私も一緒になつて喰べた。思へばそれが彼との最後の会食であつた。珍らしく葛をきれいに喰つてしまふと、彼の意識は、急にまるで煙のやうに消え失せて行つた。

かうして彼が何の苦しみもなく、安らかに息を引き取つたのは、夜もほのぼのと明けかかつた午前五時三十五分であつた。もはや動かない臉を静かに閉ぢ、最後の訣別を済ますと、急に突刺すやうな寒気が身に沁みた。彼の死顔は実に美しかつた。彼の冷たくなつた死顔を凝視めて、私は何か知らほつとしたものを感じた。その房々とした頭髪を撫で乍ら、小さく北條北條と咳くと、清浄なものが胸元をぐつと突上げ、眼頭が次第に曇つて来た。

彼が死んではや二週間、その間お通夜、骨上げ、追悼と、慌しい中に過ぎ、いま彼の遺稿の整理をし乍ら、幾多の長篇の腹案に触れ、もうあとせめて五六年、私の生命と取替へても彼を生かしてやりたかつた、としみじみとした思ひがした。残り妙ない彼の日記を読んでみるうちに、ふと次の詩のやうな一章が眼についた。彼のぼうぼうとした寂寥と孤独、その苦悩の様がほほ窺はれるやうな気がするので、此処に引用する事を許して戴き、心から彼の冥福を祈りたい。

粗い壁

壁に白弄ぶちつけて

深夜、

蛇が羽博いてる。

(昭和十二年十二月記)

(創元社 合本北條民雄全集下巻)

女と趣味

わが国の女は概して趣味に乏しいやうである。これは日本古来よりの伝統的な家風や習慣などに依る影響もあるであらうが、一體にその生活様式が低いせゐではないかと思ふ。また女が男に比較して著しく教養が低下してゐるといふことも、その一要因をなしてゐるのではあるまいか。尤も、女を指して一概に趣味がなさずぎると云ふのは暴言かも知れぬ。わが國には古来から、女性の優雅な趣味として、琴、茶道、生花、和歌などがあり、また現代の女性にはスポーツと云ふ華々しいものがある。その他にも、何々趣味とか名づけるあそびや藝事もある種の女性を持つてゐる。が、しかし、これらはいづれも、環境や経済的な恩恵に浴してゐる者の話であつて、一般の女には縁遠いものばかりである。趣味と環境と経済、この三つは最も密接な關係にあつて、趣味云々も、ここから考なければならんやうである。

だいたいの女の生活の一日を見てみると、育児については云はずもがな、裁縫とか、洗濯とか、その他の細々した雑事つまり家事一切に消費されてゐて、趣味にあそぶことはおろか、素養を培ふ暇すらないやうである。この責任の一端は、勿論、男にもあるのであるが、もう少し女の方でも、何とか生活にゆとりを持つて貰ひたいものである。いやそのような僅かな時間でもいゝ、自分の血となり肉となる寸暇を見出して貰ひたいものである。と云へば、女の方も負けてゐないかも知れぬ。女に素養がなく、趣味に乏しいのも、畢竟するに男が悪いからではないか、自分がちよつと動きさへすれば出来るやうな事でも、やれ女それ女と持込んで来るから、結局、女は負擔が多くなつて、到底、趣味とか素養とかには

手が染められないのだ、と。成程、尤もなことだ、と、一応私はうなづく。しかし、趣味にあそび、生活にゆとりを見出すと云つても、ごく僅かな時間で足りるのであつて、和歌の一首も詠んだり、庭の隅に草花の一本ぐらゐ植ゑて娛しむ時間は、誰でも持合せてゐる筈である。してみれば、罪はやはり女の方にあるのだと云ひたい。花を見てあゝ綺麗だと思ひ、小鳥の歌を耳にすれば一寸心を惹かれるといふやうな、或ひは男なら夜店で盆栽の一鉢も買つて来て娛しむていの。所謂、趣味の源泉となる気持は、殆ど凡ゆる人が持つてゐるものである。その源泉の感情を、女が無雑作に表現しえないのは何故だらうか。此處にも問題が一つあるやうである。また女の美しいのは衣裳があるからこそで、女の體から衣裳を除いたらゼロに近いといふ点にも、趣味と関聯して、何か隠されてゐるやうに思へる。

わが村の女性諸君も、概して趣味に乏しいやうに見受けられる。これは私ばかりの見解であらうか。働くことも良いであらう、欲することも勿論悪くはない。が、しかし、心をバサバサに乾枯びさせてまゝで、あたら貴重な生活の全部をそのみに費消してしまふのは、何と云つても残念のやうな気がする。往時に比して、現在の院内の一般の人情が稀薄になつたと云ふのも、或ひは斯のやうな所にあるのではなからうか。少数の女の人達が、結社に入つて、むしばまれた生涯を歌道にいそしんでゐるのは、奥床しくも尊いが、院内はまだまだ雑駁である。

私は先頃たいへん嬉しい耳の経験をした。それは看護婦の某氏が小鳥を飼つてゐると聞いた時である。私は入院して七年近くになるが、小鳥に興じる女の人や、草花に水をそゞぐ美しい姿を未だかつて見たことがない。しかし、これは私が不幸に見なかつたのかも知れない。某氏の小鳥も飼育のむづかしい驚と聞いていつそう驚いた。氏はその他にも目白や頬白を飼つてゐると聞く。何にしても、忙しい職務の寸暇を割いて、ひと時を愛鳥にたはむれる氏の姿を思ひ描いて、おのづからなる微笑を禁じえな

つた。「小鳥とあそぶをんな」思つても嬉しいきはみである。

趣味の豊かな人には、何處とない氣品が偲ばれるものだ。會つてゐて感じが良く、語つて愉しいものである。趣味のない世界など私には想像出来ない。趣味のないくらゐ無味で、凡そ殺風景なものはない。女の生の意義は母になることに在り、母になつて始めて女は美しい、と云ふことは、私もまたしばしば感じたことであるが、不幸にして母になれないわが村の女性諸君は、母になれない傷心を、大いに趣味や素養の培養に向けられるべきではなからうか。干物柱の林立や、生存に疲れ切つた姿を見るよりたとへ貧しくはあつても、花園に咲く二三輪の花、小鳥を飼ふ女の姿を見る方が、どのくらい美しく愉しいかしれやしない。またそうなつてこそ、人情も温かになるであらうし、今よりも更に明るい平和な村にもなるであらう。蓋し、さう思ふのはひとり私ばかりであらうか。

〔山桜〕昭和十四年八月号

駒鳥

いつかは和品三鳥揃へて飼つてみたいと思つてゐる。和品三鳥とは、うぐひす、駒鳥、大瑠璃の三鳥を云ふのだからである。

うぐひすと駒鳥は、現在手許に置いてあるが、大瑠璃については、全然、経験がない。どのやうな姿態の鳥なのか、またその鳴聲のほども未だ聞いたことがない。瑠璃には、大瑠璃小瑠と二種類あるのださうだが、通の話に依ると、小瑠璃の方が鳴きも姿もよらしいとのことである。

この三鳥を手許に揃えて置いたなら、私の嗜好も甚だ満足するのであるが、いづれも摺餌鳥なので、私のやうに病臥の日の多い身には、些か荷が大きすぎて手を出しかねる。

うぐひすは二年あまり飼つてゐるが、素人飼には、まづ無難でおもしろい。うぐひすと云つてもこの中で捕獲したものであるから、勿論、藪ものである。それでも春にさきがけて鳴き出し、三段に鳴き分けるから妙である。一度は桐かなんかに唐彫をほどこした留子に、少しは高値なうぐひすを入れ、三光か文字口の鳴きを聞いてみたいものである。

然し、そのやうな高値なうぐひすの鳴きは、私のやうな素人には、聞き分けやうもないであらうから、やはり、藪ものの歌を楽しんでゐる方が、自然であり、相當してゐるやうだ。

駒鳥は昨年秋、日向の友人に依頼してみつけてもらつた。深山溪谷に棲んでゐる鳥で、一山に一双より棲んでゐないのだと云ふ。頸部と尻尾が茶褐色、羽はくろずんだ緑色で、下腹部は鼠色にぼけてゐる。足は精悍そのものを思はせて高く、眼は水晶のやうに張があつてすずしい。總體に均勢のとれた美しさ、何處か気品のある姿は、到底うぐひすなどの比ではない。

これが頸を伸ばし、尻尾を上下にピンピンと振るさまは、朔風に嘶く若駒を彷彿させる。鳴きといひ、貴公子然たる態度といひ、蓋し、鳴禽類の王であらう。

しかし、何處か乙に取澄した恰好は、人に依つては、好めないところかも知れぬ。

これは私の飼つてゐる駒鳥ばかりかも知れぬが、彼には妙な性癖がある。性癖と云ふよりも、むしろ無氣味さと云つた方がよいかも知れぬ。それは、時折り、一切の動作を中止して、呆然？ と立ちつくしてしまふのである。

短くて十分、長い時には小半時間も、ある一點を凝視して不動の姿勢を守り続ける。そのやうな時は、

見知らぬ人が籠に近づいて覗きこんでも彼は微動だにしないのである。その姿は、時に傲岸に見え、奇癖に映り、無気味にさえ感じられる。

ある日のこと。

晝食後、私がいつものやうに縁先で駒鳥に水を使はせてみると、其處へ、附添夫をしてゐる友人の一人がやつて来た。

「相變らずやつてますね。」

友人は笑ひながら私の傍へ寄つて来た。すると、それまで水玉を飛ばしながら行水をしてゐた駒鳥が、どうしたのか、ピクリと動かなくなつた。彼は凝つと友人も顔を見据えてゐる。

「オヤツ、おどろいたかな。」

友人はびつくりしたやうに云つて、急いで一間ばかり後にさがると、これも駒鳥の様子を窺ひ出した。鳥は水盤の中に兩足を踏張り、體の半ばを水に浸して微動だもしない。圓らな眼は眞面に友人の顔に對してゐる。女字通り不動の姿勢である。

「なんだか気持の悪い鳥だね。」と友人。

「ときどきこんな風になるんだよ。」と私。

暫くは三者相對した恰好で眺め合つてゐた。恐らく十分間もさうしてゐたであらうか、私も流石に呆れて、傍らの土瓶を取上げると、いきなり鳥の頭に水を注いだ。しかし、それでも彼は依然として動かない。

「これあいよいよ気持が悪い。あの眼、あの恰好、まるで腹の中まで見すかされるやつだ。」

友人は如何にも不無味だといった形である。

「ほんとにへんな奴だよ。」

「これはおれが居てはいつまでもかうしてゐるよ。いよいよもつて気味が悪くなつた、退散、退散……。」
友人は笑ひながら踵を返した。

「平家の軍勢は、水鳥の羽音に驚ひて逃げたさうだが、君のは駒鳥の睥睨に怖れをなしての方だね。敵に背後を見せるとは卑怯なり、だぜ。」

倉皇として去つて行く友人を見ながら私も笑つた。鳥はまだ動かうともしない。

駒鳥は何と云つてもその鳴きを愛づるものである。ヒユウと軽く口を切り、カラカラカラと音をこころがすあたり、まことに美音奏樂の極致である。

殊に、頭の毛を逆立て、尻尾を振つて鳴立てる様はひとしほ見事である。

就中、手振駒に至つては、飼主が手を振つて見せれば、それにつれて鳴出すと云ふ。まことに鳴禽の冴え、賞するに餘りありである。手振駒は私もいつかは飼つてみたい鳥のひとつである。

（山桜「昭和十五年三月号」）

新庭雑感

ひとまたぎほどの小さな堤が、ゆるやかな線を描いて、私の住んでゐる舎の周圍をかこんでゐる。堤の上には、一間程の隔りを見せて、つゞじと玉ひばが交互に植ゑてある。堤の柴は青く芽ぶき、つゞじはいま花ざかりである。この堤は、つひ先頃、何も無い素枯れた庭の淋しさに、少しばかりおもむきを

添へようと、義弟と一緒に築いたものである。絶えず眼の痛みにおそはれてゐる私は、部厚な繻帯を顔に巻きかさねて、痛みをこらえながら、土盛りをしたり、柴を張つたりしたのであつた。不自由な自分には、このやうな仕事は無理だなど思ひながらも、生来、庭いぢりが好きなのと、草々の深い緑のほひ、やはらかな土のしめり香などに誘ひ込まれて、いつか眼の痛みも忘れてしまつてゐる自分に気がつくのである。夜、床についてから、あれこれと庭の設計をする。あそこには何を植え、入口はこのやうにしたら、などと考へ始めると、もう凝り性の私には、眠られぬ夜になつてしまふ。翌朝、夜の明けのを待つて庭に飛出し、昨夜の設計に従つて、こつこつと庭の装幀に取掛る。これは私の最も楽しいものゝ一つである。

しかし、時折、私は庭づくりの手をやすめて考へることがある。亡くなつた北條君はこれに類したことは凡そ手出さぬ男であつた。私はかつて彼のそのやうな姿を見たことがなかつた。そつといへばBもやらない、CもDも嫌ひのやうである。現在の友の誰彼にせよ、彼等は、私が庭づくりや小鳥とたはむれてゐる間にも、こつこつとその第一義的な、創作や讀書や思索に耽つてゐる。それなのに私はこれで良かったのだろうか、と。

しかし、それがたとへどのやうな生活態度にせよ、不斷に楽しむことが出来たらそれで充分である。喜びに大小はあつてもその本質には何の變りもないであらう。さう思つては、また小さな庭師になり、花と土とにたはむれてゐる自分である。

小堤に包まれた庭には、ほどよい自然木の間に、恰好な築山がある。私はこれを男体山と称んでゐる。故郷の山になぞらへて作つたからだ、築山に添へて、粗末な禽舎と、小さな花圃がある。花圃にはグラチオラスが一寸ほどに芽ぶき、築山には枯れかかつた小松と、北條君の形見の沈丁花が、緑の色褪せた

幾枚かの固い葉をつけて、頂きを占めてゐる。禽舎には白文鳥がつがひで棲んで居り、雌はいま卵を抱いてゐる。雄はその雌の態度が、氣に掛るやうな、掛らぬやうな、ひどく手持無沙汰の態に見える。これが私のところの庭の全風物である。

しかし、これらの貧しい眺めも、私には恒にまあたらしく楽しい景觀なのだ。それら物自體の匂ひや、色や、形やは、それらの醸し出す気分と相俟つて、不思議なほど、私の五官に妖しい働きを示すのである。殊に、その色彩が添へるところの趣旨と味はひとには、また格別なものがある。色そのものを美學的に云々することは私には出来さうにもないが、色の持つ本質的な美しさ、と云つた風なものを、最近私は眼を悪くしてからいつそうしみじみ感じるやうになつた。おぼろげな視野のなかに入つて来る、平凡な木の肌の色、名もない一茎の草の色、一握の芥のはなつ地味な色、水の色、空の色土の色を、私は心しみじみ美しいと思ふ。いつまで娛しんでも足りぬ思ひだ有難いと思ふ。この私の氣持には、あゝまだ物の色が判る、といふ眼病者のみの持つ一種の、喜びから来るものも手つだつてゐるようがしかし、決してそればかりではない。

色彩の有難さを、人は案外忘れがちなものではあるまいか。若し、距離といふものが無かつたら、風景はあり得ない、とアランは云つてゐるが、色彩がなくても、風景は存在しないであらう。われわれは色彩を創造した神に感謝すべきだ。

庭の一隅にルルドの洞窟をつくつては、といふ義弟の言葉に、それは良からう、と私もすぐに賛意を表し、早速、その材料を揃へることにした。小さな庭の事であるし、それに怪しげな庭師の腕を以てしては、到底、大がかりなものは出来ないに定つてゐるが、手を染める前に、まづその材料調達に困惑した。私は、ふと、復生病院で見たルルドの洞窟を思ひ出した。それは二間程の高さの岩窟の内部に、等

身大の見事なクリストの立像が、いかにも嚴かに生彩をはなつてゐた。それに較べると、いま私の脳裡に描かれてゐるわれわれのルルドは、余りに貧しくさゝやかである。私は義弟と相談した結果、岩窟はそのほんの内部だけを石でつくり、その周囲を四五尺の高さに土と柴で築くことにした。それで洞窟は一應出来ることになつたが、切て、困つたのはクリストの御像である。肝心の像がなくては物にならんし、といつてわれわれの力ではどうにも出来さうがない。

ひと思案の後、御像はK神父から戴いた八寸程の十字架を以て充てることにした。これは茶褐色の台に、銀製のクリストの裸像が、かつてのゴルゴダのイエスのごとく釘付にされてゐる。

柴は直ぐ前の山に在るし、石も手頃の物が三個ほど附近の草むらの中から見付け出した。何かの土台物に使用したらしく、半面にところどころセメントが附着してみる。私はこころみにその一つを上げてみた。七八貫もあらうか、ずつしりとかかなりの重さである。私はその重量の裡にふつと幼い頃の事を思つた。それはまだ六七才頃の事であつたやうに記憶する。どんな小さな石にも、石自体の生命があつて、石は生きてゐるのだといふことを信じてゐた。従つて、石は絶えず成長してゐるといふことも信じてゐた。河原などに遊んで、ふと小石を手にしたりとすると、こんな小つぽけな石ころでも、やがて自分が年を取つて、お爺さんになる頃には、この石も苔むしたお爺さん石になるんだな、などと考へる、すると、急にてのひらの小石がむくむくと動き出すやうに思はれて、ひどく気味わるがつたりしたものである。門柱に鑿めた玉石や、或ひは土台石などの類ひを見ても、これがやがて大きくなつて、門柱からぬけ落ちたり、家をひつくり返すやうになるかも知れない、と途方もないことを考へたものだ。石に對するこの考へは、小學校を卒へる頃まで、私の脳裡に棲んでゐた。今でも何かのはづみに當時の事をふつと思ひ出したりする。私には娛しい思ひ出の一つだ。

この生きてゐる石をうまく利用して、恰好なルルドの洞窟をつくる喜びを前に、私はまた眠られぬ夜の中で、小さな庭師の頭脳を動員して、その設計をせねばならない。

(五月五日)

〔山桜〕 昭和十五年八月号)

霜の花―精神病棟日誌

士官候補生

精神病棟の裏は一面の竹林になつてゐる。日暮にはこの竹林に何百羽と云ふ雀が群がり集ふて、さながら一揆でも始めたやうな騒ぎ様を呈す。

士官候補生殿はこの光景を眺めるのが何より好きであつた。日暮れにはきまつて松葉杖を突き、非常口の扉に凭れるやうにして佇んでゐられる。片足を痛めてゐるので、その足は折畳式のやうに屈めて片

方の大腿部に吸ひ付け、上半身を稍乗出すやうに、首をさしのべて佇つてゐる姿は、まるで汀に佇む鶴のやうである。併し、それにしては何と顔色の悪い、尾羽打ち枯らした鶴であらう。頭には殆ど一本の毛髪も見られず、潰瘍しきつた顔の皮膚はところどころ糸で結んだやうに引ツ攣れてゐる。そのうへ恐しく白いのである。その白さも只の白さではなく、何となく不氣味な、蒼白を超えた一種異様な白さなのである。その白色の中に、陥落した鼻孔と、たるんだ唇、大きなどんよりとした二つの眼がそれぞれ位置を占めてゐる。手足が不自由なので動作もひどく鈍い。たいてい特別室に閉じ籠つたきりで明り窓から凝つと空を見てゐる。明り窓からは竹の葉のそよぐ様や、移り行く雲の片影ぐらいしか見えないのだが、候補生殿は殆ど身動きもせず、それらの小部分の光景に見惚れておられる。彼が特別室の外へ出るのは、日暮れになつて雀の立騒ぐ様を眺める時だけで、その時はコトンコトンと松葉杖の音をさせながら、幽霊のやうな姿を非常口へ運んで行く。幽霊のやうなと私は云つたが、まったく候補生殿の姿は輪廓がおぼろげで、特別室の入口に、それも眞夜中に、しょんぼり佇んでゐる彼の姿を、廁へ立ちながら何氣なく眼にした時など、眞實亡霊のやうに思われてぞーんと寒氣立つことがある。

候補生殿は殆ど口をきくこともなく、終日、むつつりと押し黙つてゐられるが、時にどうかすると、氣を付けえいと云ふ凄じい號令が特別室の中から聞えて來ることがある。續いて、

長上ノ命令ハ其事ノ如何ヲ問ハズ直チニ之に服從シ抗抵干犯ノ所為アルベカラザル事。と、軍人讀法を一ヶ条ずつはきはきした口調で讀み上げる。それが濟むと、何かぼそぼそと相手の者に説明してゐるやうな聲が聞えて來る。私も最初のうちは候補生殿の室に誰か他室の者でも來てゐるのだらうかと思つて覗きに行つたが、彼の他には誰も居ないのだ。候補生殿只一人、便所の入口に不動の姿勢を取り、あれこれと説諭し、命令してゐられるのである。松葉杖を放り出し、足の悪い彼がおごそかに佇ちつくし

てゐる姿は、滑稽と云ふよりもむしろ憐れである。

私はある時こんな場面を見た。それは私が附添夫になつてまだ間もない頃の事で、その日は特にぎらぎらと眩らむほどの暑い日であつた。ふと、晝寝から醒めてみると、と云ふより本當は醒まされたのであるが、どつし、どつしと歩調を整えた足音が長い廊下を行つたり來たりしてゐる。その足音は隣室の前から非常口の方に遠のき、再び響きを立ててこちらに歸つて來るのだ。誰もがぐんなりと疲れて聲も立て得ないこの日中に、一體何であらうと思つて、私はそつと立つて行つて廊下を覗いて見た。そして瞬間、云い様もない佻しい氣持にさせられた。それは藏さんと云ふ白痴の小男が、汗をだらだら流しながら、箒を銃替りに擔い軍靴ならぬ厚ぼつたい繃帯の足をどしんどしんと板の間へぶちつける様にして歩いてゐるのだ。而も繃帯には血が滲んで、それが一足毎に赤黒い汚點を廊下へ印して行くのだ。それだけならまだしも、非常口の所には肌ぬぎになつた候補生殿が、いかめしく直立して監視してゐられる。それも松葉杖を指揮刀がはりに構えて、今や調練のさ中と云つた恰好なのである。私が呆氣に取られて見てゐると、やがてのことに、候補生殿は、全隊止まれえ、と大喝して持つてゐた松葉杖を振つた。とたんにこちらに向つて進軍して來た藏さんは、候補生殿の前にピツタリ止まつて拳手の禮をした。候補生殿はおもむろに禮を返して、而して眞面目な面持で、御苦労であつたと聲を落して云つた。

私は彼が死ぬまで、彼が本當に士官候補生なのかどうかはもちろん知る由もなかつたが、同僚の話では、軍隊から直接この病院に送られて來たのだと云ふ。癩院生活二十年と云ふから、現在の彼の病状から見ると、病勢の進行はまあ普通であつたと云えよう。入院して二年目あたりから幾分精神に異状を來し始めたらしいと云ふ。その頃の事情は審らかではないが、一時は相當錯乱の程度も激しかつたやうで、特別室に放り込まれると、その夜、いきなり、電球に飛付いて笠を叩き割り、その破片で左腕の動脈を

切斷してしまつたと云ふ。手當の早かつたのと治療の宜しきを得て、どうやら生命は取止めたが、爾來、體の調子がかばかしくなく、あまつさえ病の方も癒えぬままに、精神病棟の候補生殿で暮して來たのであると云ふ。動脈をどうして切る氣になつたのか？と氣の鎮まつた時に醫者が訊ねると、動脈を切れと云ふ上官の命令があつたからだと彼は答えた。その時上官はお前の面前に居たのか？と重ねて訊ねると、いや無電が掛つて來たのだと答えたさうである。彼の動脈切斷後、特別室の電燈は高い天井板にじかに點されるやうになつた。

ある日。候補生殿の食事を運んで行くと、附添さん、と彼は哀れげな聲で私を呼んだ。同僚の附添夫の一人が急性結節で急に寢込んだので、候補生殿の世話は臨時に私が受持つてゐた。彼の招くままに私は候補生殿の傍らに跼んで何の用かと訊ねた。彼はひどく悲しげな面持で暫く私の顔を凝視めてゐたが、實は私は氣狂ひでも何でもないと言ひ出した。

「私は氣なんぞ狂つてはいない。みんなが寄つてたかつて私を氣狂ひ扱ひにして、こんな所へ放り込んでしまつたのだ。それを思ふと私は腹が立つてならぬ。私は立派な帝国の軍人なのだ。歩兵士官なのだ。だのに先生（醫者）始め患者めまで、立派な軍人に對して侮辱を與へるのだ。私はもつこんなところにはいられない。郷里へ歸るのだ。郷里には母が居る。私が帰れば母は喜んで私の世話をしてくれる。あれが私の母です。そしてこちらが私の若い頃のものです。どちらも二十年前に撮つたものです」

……
そこで候補生殿は傍らの古びた蜜柑箱を伏せて台となし、その上に飾つてある二葉の写真を示した。それは何時も只一つの彼の荷物、古風な信玄袋と共に同じ場所に飾つてあるものであつた。私は別に興味もおぼえなかつたので、まだしみじみとその写真を見たことはなかつた。母と云ふのは五十近い上品

な感じの婦人で、何かの鉢の木を傍らにして撮つてゐる。それに隣り合つて並んでゐる一葉は、恐らく士官學校卒業の時、記念に撮つたものでもあらうか、候補生の軍服を着用し、軍刀を握つてゐる姿はなかなか凜然としてゐる。併し、眉の濃い苦みばしつた男振りには、今の彼の何處を探しても見當らない。私は癩者の變貌の激しさに愕ろくよりも、現在の彼と写真の主とが同一人であるとは何としても受取り得なかつた。私はしみじみと候補生殿の姿を眺めてゐた。

そこで、實は、あなたにお願いがあるのです。と彼は相變らず悲しげな調子で私に云つた。「私は明日にも郷里へ歸らうと思ひます。で、あなた私を連れて行つて下さいませんか？荷車とあなたを借り受ける交渉は私がします。あなたさへ承知してくれたら、只今から院長に直接會つて掛合ひます。お願いです。廃兵の私を哀れと思つてどうぞ郷里へ送り届けて下さい。この通りお願いします……………」

彼は涙を流しながら、私の前に両手をつかへて頼むのである。その様子はまんざらの狂人とも思えぬほど、虔しく、物静かな態度である。私はどう答えてよいやら返答に困つて、ただ凝つと聞いてゐた。私が黙つてゐるので、彼は益々熱心に連れて行つてくれと云つてきかなかつた。

「で、あなたの郷里と云ふのは何處ですか。」愈々返答に窮したので私は仕方なくさう訊ねてみた。すると、彼は急に瞳を輝かせて欣しさうに涙を拭きながら答えた。

「山梨です。」

「山梨？」と鸚鵡返しに云つたまま私は暫し啞然としてゐた。充分彼の心情は掬すべきであつたけれど、山梨までこの男を荷車に乗せて曳いて行く。さう思つただけで私は何か慄ツと寒氣立つのをおぼえ、とにかく私一人の考へでは答へられぬからと云つて、尚ほも取絶つてくる彼を払い除けるやうにして、ひとまず候補生殿の室を引上げてきた。早速、同僚達を招集してこの話をする、彼等はくすくす笑ひ

ながら、君はまだいい所があるよ、あれは奴のおはこなんだよ、と云つて一笑に附してしまつた。私もそれで思はずほつとしたが、候補生殿の様子が餘り眞剣だつたので、この儘素知らぬふりですごすのは何となく悪い様な氣がした。恐らく彼は私にした様に涙を流しながらどの附添夫にも頼み込んだのであらう。そして誰からも相手にされなかつたのであらう。偶々新米の私を見て、何度目からの熱誠溢れる郷里行の懇願を始めたのであつたらう。そして私からも他の附添同様色よい返事を聞かれなかつたわけなのだ。併し、彼は新しい附添夫の來る毎に、切々たる荷車行の心情を變ることなく吐露するに違ひない。何故なら、それは彼の最も哀れな病の一部であるから。

その後、候補生殿は二度と私に物を云はなかつた。

その年の冬。ある寒氣の厳しい眞夜に、彼は特別室の畳に腹匍つたまま眠つた様に死んでゐた。彼の只一つの荷物、色褪せた信玄袋には汚れた繻帯が半ば腐りかけてぎつしり詰つてゐた。そして、それらの中にくるまつて、彼の唯一の身許証明書、軍隊手帖がでてきた。それには「軍法第二十六條二依り兵役免除云々」の文字があり、明らかに陸軍歩兵士官候補生と記されてあつた。

因みに彼が特別室に入つてゐたのは、本人の意志に依るものであつた。彼くらいの病状では、當病棟は普通靜養室を用ひてゐる。

眞理屋さん

眞理屋さんはあるくれがた多勢の舎の者に送られて賑やかな精神病棟入りをした。私が彼を受持つこ

とになつてゐたので、取敢へず玄關まで迎へに出た。そして、成程、これは眞理屋に違ひないと思わず微苦笑させられた。布團や荷物を抱えた舎の者の背後に、院支給の棒縞の單衣を着た背のひよる長い男が、どす黒い手足を振りまわしてからから笑つてゐる。而も、その顔には、半紙大の厚紙一ぱいに墨痕も鮮やか「眞理」と書きなぐつた四角な面を付けてゐるのだ。それには普通のお面のやうに目、鼻、口などがちやんとくりぬいてある。御當人はその眞理の面を越後獅子かなんそのやうに面白可笑く振つてゐるのだ。彼は寝る間もそれを付けて離さないのだと云ふ。

「私の別荘はどちらですかねえ……………」と彼はひどく間のびた調子で云いながら、長い廊下をひよこひよこ私の背ろに從いて來る。

「君の別荘はそら此処だよ。」

と私がる號特別室の扉を開いて招じ入れると、彼は如何にも嬉しさうにびよこんと一つ私に頭を下げてから室内に飛込み、さうしてきよるきよると四邊を眺めまわしてゐる。

「いやあ、これはいい別荘だ。豊臣秀吉だつてこんないい別荘には住んでゐなかつた。いやあ、これは素晴らしい。附添さん、どうも有難うございます。有難うございます。」

さも嬉しさうに小躍りして手を打ち叩き、けらけらと笑いやまない。「眞理」の面を付けてゐるので、彼がどんな容貌の男なのか判らない。

同室者の話では、發狂前は非常におとなしい内氣な男で、作業は構内清掃に従事してゐた。體も小まめによく動き、部屋の雑事、拭き掃除から食器磨きに至るまで殆ど一人で擔當してゐた。それに親切で病人の面倒もよかつたので、舎中の者から尊敬されてゐたと云ふ。讀書が好きで、仕事の傍ら寸暇も惜

しむやうにして勉強してゐた。殊に哲學書を耽讀し、發狂前の二三月月は文字通り寢食を忘れて勉強思想した。ために一時は健康を害したほどであつた。同室者達が見かねて、そんなに夢中になつて勉強しては體に障るからと注意したが、癩者の生命は短かい。その短かい間に永遠の眞理を發見せねばならぬので、私はとても無理せずにはゐられない、と答えて相變らず哲學書に耽溺してゐた。すると、ある夜のこと、ああ眞理は去つた……といとも悲しげに呟きながら、ふらふらと戸外へ出て行くので、何か間違ひがあつてはと部屋のものが案じてそつと後を尾けて行つた。彼は沈思黙考、蹠踉として林の中を逍遙してゐたが、やがて帯を解いて首をくくろつとした。尾けて來た男は喫驚して押し留め、無理矢理彼を連れ歸つたので幸ひその場は事無きを得た。併し、それ以來彼の頭腦は變調を來し、眞理眞理と大聲に喚き叫びながらけらけらと笑ひこける。今まで戲談一つ云へなかつたものが、油紙に火の付ゐたやうべらべらと喋り立てる。飯を喰うにも眞理と云い、蟲一匹見ても眞理だと叫んで喜ぶ。果ては厠の壁といわず、室の戸障子、又は自分の持物から同室の者の衣類に至るまで眞理、大眞理と書きなぐるやうになり、自分では胸と背に太文字で眞理と大書した着物を着してゐた。そのうちに到頭眞理の面までつくつてしまつた。眞理の探求者は、斯くしてついに憐れな眞理（心理）病患者になつてしまつたのである。彼を特別室に収容したのは静養室が満員のためであつた。

翌朝、彼が當箱を借りに來たので、どうするのかと私は訊いてみた。當箱をどうするとは自分ながら可笑な質問であるが、相手が相手だけにさう訊ねてみたのだ。すると、彼は面の中で笑いながら手紙を書くのですと答えた。

「手紙？ 君、自分で書けるのか。」

「え、書けますよ。」

「何處へ出すのだ。郷里かい？ 僕が書いてやるつか。」

「いいですよ、附添さんに書いて貰つては申譯がないです。それに親書ですからね。私、カントの所へ出すのです。」

「え？ カント。」私は思わずびつくりして訊ね返した。

「いけませんかね。それともシヨウペンファエルにしましよつか……………」

さう云つて四角な面を私に眞面に向けて例のけらけら笑ひをするのである。こいつ氣の毒に大分よく狂つてゐるなと私は少々憐れに思つた。彼は昨日からずっと面を取らないのだ。同室者の言もあるので私は昨夜試みに夜中に起きて、覗き窓からそつと彼の寢姿を覗いて見た。彼は室の中央に、荒木綿の布團を跳ねのけ、全身變色した不氣味な體を投出すやうにして睡てゐたが、併し、眞理の面はしつつかと顔に付けてゐた。その寢姿は何のことはない、首無しの變死人のやうな恰好に見えた。併し、この面も、食事の時には取るのだらうと私は密かに思つてゐた。が、今朝になつて、朝食中の彼を見たが、以前として彼の面には眞理の文字が輝いてゐるのだ。彼は面を附けたまま、くりぬいた口の中に食物を放り込んでゐるのである。之には流石に私も呆れて、しばし啞然と見惚れてゐた。

暫くして、彼は封筒を貼るのだからと云つて糊を貰ひに來た。さてはカント宛の手紙が書上つたんだなと思ひ、二時間ほどしてから、私は彼の室に行つてみた。そして、扉を開くなり、私は思わず眼を瞪り、ほうと嘆聲を洩らさずにはゐられなかつた。室内の羽目板一面に、それは恰も碁盤の目のやうに整然と「眞理」の文字が貼られてゐるのだ。それは塵紙にひとつひとつ丹念に書いたものである。御當人は室の眞ん中に端坐してそれらの文字に眺め入つてゐたが、私を見ると、よく来てくれました、さあお這入り下さいと頻りに招じ入れるのである。

「カントへの手紙はどうしたね？」と訊ねると、

「はははは………手紙ですか。止めました。お手紙するより、直接、カントさんに會つてお話した方がいいやうですよ。」

さう云つて彼は嬉しさうに書き連ねた眞理の文字に見入るのであつた。その日は午後から院長の廻診があつた。彼の室には眞理の文字が更に何十枚か殖えてゐた。支給された塵紙全部をそれに充ててしまつたのである。院長が大勢の醫者や看護婦を従えて來た時にも、彼は手足を墨で眞黒に染めながら、頻りに眞理の浄書に餘念もなかつた。

「M・K………どんな男だつたかね。」

院長は彼の姿を見てから私に尋ねた。私はまだ顔を見ていない旨を答えた。どんな男なのか名前だけでは測りがたかつた。それで愈々彼の眞理の面を剥ぐことになつた。が、いざ私が近づいて面に手を掛けようとする、彼は急に獣のやうな奇聲を上げ、怖い力でそれを拒んだ。再度私が同じ行動を繰返すと、彼は片隅に蹲つてきいきいと悲鳴を上げるのである。いい、いい、と云つて院長は私を制し、

「どうだ、眞理を發見したかな………」
と彼の方へ明るく笑いかけた。すると、彼はくるりと向き直つてぺこんと頭を下げ、憑かれたやうに叫び出した。

「眞理ですか。眞理と云いますと………あつ、さうですか、眞理、眞理、いやあ、眞理ほど良いものはありませんね。」

さうして昂然と胸を張り、一面を揺すつて何時までも笑ふのであつた。

あるくれたのことである。

私は北側の非常口に腰を下ろして、夕食後の憩ひを撮りながら出鱈目の歌など口吟んでゐた。この非常口は、士官候補生殿が生前よく竹藪の雀を眺めてゐたところである。今も雀達が潮騒のやうな羽音を撒いて藪一ぱいに群がつてゐる。私は暫らくいい氣持で歌つてゐた。と、突然、る號特別室の扉がぱたんと慌しく開いて、

「あつ、似てゐる、似てゐる、あの人だッ」

と頓狂な聲が泳ぐやうにこちらへ近づいて來た。まったく不意打ちだったので、私は思はずぎよつとして腰を浮かせた。

「あつ、あつ、似てゐる、似てゐる、やつぱりさつだ。……………」

眞理の面を不氣味にぬつと突き出して、私の顔をしげしげと眺めるのである。「何が似てゐるんだ。びつくりするじゃないか。」私は漸く落着を取戻して叱るやうに云つた。

「似てゐるんですよ。あなたはベートヴェンに似てゐるんです。いや、ベートヴェンだ。ね、お願いです、お願いです、ベートヴェンになつて下さい。ベートヴェンだとおっしゃつて下さい……………」

彼は私のまえに跪つき、両手を合せて、伏し拝む眞似をする。私が黙つてゐると、彼はおろおろ聲で頻りに嘆願するのである。

「じゃあ、私がベートヴェンになればいいのかい？」

私はつい可笑しくなつて笑ひ出しながらさつ訊いてみた。

「ええ、さつです、さつです。あなたはベートヴェンです。間違ひなくさつなんです。それで、私が、ベートヴェンさんと呼びましたら、どうぞ『ハイ』と返事をして下さい。お願いします。どうぞこの願

いを聞き届けて下さい。」

彼は熱心にさう云つて頭をべこべこと下げるのである。そんな御用ならいと容易いことなので私は直ぐ承諾した。すると、彼は、あつあつと叫んで手を打ち、飛上つて、恐ろしく喜ぶのである。

「有難い、有難い。ベートヴェンさんが私の願ひを聞入れて下さつた。ああ嬉しい……………」

大仰な歡喜の身ぶりを示し、さうして、ベートヴェンさんと改めて私を呼んだ。私は到頭樂聖にされたのかと苦笑しながら、ハイと元氣よく答へてやつた。

「あつ、返事をしてくれましたね。ああ、こりや堪らん。ベートヴェンさんは返事をしてくれた

……………」

彼は私の手を取らんばかりにして、再度私の顔をまじまじと凝視めるのである。軒看板のやうな目の眞理の面を眺めながら、私は、不図、寒々しいものを身内におぼえた。

不思議なことに、その翌日から、彼は眞理の面を附けなかつた。取去るのをあれほど嫌つて、執拗に長い間掛け續けてゐた面を、どうして急に彼がなくなりするやうになつたのか、私は理解に苦しんだ。彼の顔はその肉體と同様、潰瘍し切つたどす黒い色を呈してゐた。眉毛も頭髮も殆ど脱落してゐて、私の一尙見知らぬ男であつた。

これもある白晝の事件である。その日は特に暑さがきびしかつた。じつとしていてもたらだらと汗が流れやまない。私は廊下に出て晝食の塩魚を焼いてゐた。焼きながら窓越しに裏庭の風景を慢然と眺めてゐた。たださへ暑いところへ炭火の熱氣に煽られて、胸といはず背中といはず汗が淋漓と小止みもなく流れた。と、その時、まつたく不意に、背後から音もなく私に組付いて來た者がある。私はびつくり

して思わずわつと叫びを上げ、不意を衝かれてたじたと後ろに踉めいた。途端に、そのまま折重つて堂と倒れた。そして、仰向けになつた私の體の下で眞理屋の彼がゲラゲラ笑つてゐるのだ。私はカツと怒りが湧いた。

「バカツ、離せ、何をするんだ。」

併し、彼は下敷になつたまま両手を私の腹に廻し、しつかと抱き付いてゐて離さない。彼も裸なので、汗みどろの肌同志がぬらりぬらりと粘着して氣分の悪いこと一通りではない。漸く彼の手足を振りほどいた時には、魚は眞黒に焦げてゐた。

「バカツ君はどうしてこんな眞似をするんだ。」

私は體の汗を拭いながら彼をきめつけた。すると、彼はにやにやしながら、私の前に葡萄色した頭を突き出した。

「ベートヴェンさん、さあ私を擲つて下さい。蹴りつけて下さい。あなたにさつして戴けますと、私は本當に嬉しいのです。さあ思ひきり擲つて下さい。あなたは私の戀人です。私の大好きなベートヴェンさん……。」

私は苦々しく顔を顰めたまま黙つて部屋へ這入つてしまつた。この男ばかりはどうも本氣になつて怒れない。張合がないのである、私が擲るぞと睨みつけても、彼は笑いながら頭を突き出し、どうぞ存分に擲つて下さいと云ふ。お前みたいな奴は監禁してしまつて、一步も外へ出さないぞと大きな鍵を出してじやらじやらさせて見せても、彼は頭をぺこぺこ下げながら光榮ですと答え、自分から特別室の扉を閉ざして音なく待つてゐる仕末なのだ。ある時、本當に監禁してしまつと、彼は室内を小踊りして廻り、ベートヴェンさん、私の好きなベートヴェンさんと呼び立てていつさつするさい。

彼が私に對して、斯のやうな抱きつくていの素振りを示したのはこれが始めてではない。何かにつけてそれとなく私の體に觸れてみたいらしいのである。始めのうちは私もそれに氣付かなかつたが、彼の不法な、一種の變態性慾者の行為が度重なるにつれ、それは彼が故意にしてゐるのであることを私は知つた。一度こんな事があつた。ある朝、私がまだよく睡つてゐるうちに彼がこつそり入つて來た。そして、いきなり、私の被つてゐた掛布團を足許からばつと取除けた。さうしてその布團をそのまま抱え込んで、寝巻一つで愕いて飛起した私の姿を見て絶間もなく笑ひこけるのである。私も流石に腹を立てて、お前みたいな奴は水風呂へ叩き込んでやると怒鳴りつけて彼の手首を捉えた。勿論、脅しの積りだつた。が彼は悄氣返るところか有難うございませうと禮を述べ、いそいそと自分から先に立つて湯殿へ行くのである。之には私も呆れ果てて、腹を立てた自分がお可笑しくもあるやら面映ゆくもあつた。その時、彼は同僚の附添夫の一人に私についてこんなことを云つたさうである。

「あの人は女じゃないですか。體のつくりや動作はどう見ても女ですよ。私はあの人がめつぱう好きなんです。あの人になら殺されても惜しくはありません。ああ、私のベートヴェンさん……………」

彼は私に對して次第に特別な科や性癖を示すやうになつた。彼は他の附添夫の云ふ事は一切聞き入れなかつた。併し、それがひとたび私の唇から出た言葉であると、彼は欣んでどのやうな事でも聞分けた。二ヶ月もすると、彼は明けても暮れても最早や私なしではすこせないほどの、執拗な、奇妙な愛情を現し始めた。私の側に附纏つたきり金輪際離れやうとしないのである。配給所へ行くにも、賣店へも、彼はまるで私の腰巾着のやうに尾いて來る。はては厠へ行くにも後を慕い、用が済むまで扉の外で待つてゐる。

やがて、彼は保管金の通帖から在金全部を私の所に持つて來た。どうぞお願いですから自由に使つて

下さいと云ふのである。他の事とは違ひ、金の事であるから、そればかりはならぬと私は固く突っぱねた。すると、彼はそれでは棄てて了うと云つてきかない。押問答してみたが無駄である。私は困つて同僚とも相談し、彼の金はひとまず主任のTさんに預つて貰うことにして、この話は一段落ついた。が、この金の問題があつてからは、彼はこん度は色々な品物を買込んで来て私の所に持つて来る。菓子、果物、飲料水、タバコ等々である。私はこれらも同様きびしく叱つて取上げなかつた。すると彼は忽ち悲觀してそれらの品を全部下水壕に棄ててしまつた。ついには私の居ない隙を狙つて、机の上とか戸棚の隅にこつそり置いて行く。それを彼は毎日のやうに繰返す。いくら叱つても効果がなかつた。私は再度同僚と相談して、賣店の店員に彼が来ても一切物を賣らぬやうに頼み込んだ。斯うして彼のプレゼント癖は一時中止のやむなきに至つた。併し、彼は三度、私へのプレゼントを考へついた。そして、直ちにそれを實行に移した。併し、このプレゼントは些か時日を要し、私は彼から彼の誠心こめた？プレゼントを手にするまで少しもそれに氣付かなかつた。賣店で相手にされなくなつてから、彼は編物を始めたのである。終日、特別室に閉じ籠つたきりで、彼は器用な手つきでせつせと編棒を動かしてゐた。編物は發狂前にもやつてゐたらしい。賣店から客扱いにされない彼が、どうして夥しい毛糸類を持つてゐるのか始め私は不審に思つたが、それは發狂前に買い込んで置いたのと、郷里から送つて寄越した物とであることが判明した。薄暗い室に黙念とあぐらを組み、明り窓から差し込んで来る光に眞向つて編物に餘念もない彼の姿を、私は毎日のやうに眼にした。眞理眞理と叫ぶこともなくなつた。眞理の面を取除けて以來、彼は眞理と云ふ語をついぞ口にしたことはなかつた。口癖のやうな眞理の二字は、ベートヴエンと云ふ私への愛称に替へられたのである。

やがて彼の編物は、見事なスエターとなつて完成した。そして、彼は早速それを私に着てくれと懇願

し始めた。私は始めて彼が何故編物に専念しだしたのか、その眞意を納得することができた。私はとにかく預つて置くと云つてスエターを受取つた。併し、彼の編物は更に續けられた。スエターは二枚となり三枚となつた。その中の一枚には苦心してベートヴェンと云ふ文字まで編み込んだ。彼はしだいに衰弱して來た。三度の食事も欠ける日が多くなつた。それでも彼は編棒を離さなかつた。私は彼に對して、云い様もない寂寥と憐憫、恐怖の情の募るのをおぼえた。何もかも私に責任があり、何もかも私の所為のやうに思はれた。併し、幸ひなことに毛糸が盡きた。編み果してしまつたのである。私は思はずほつとしたが、彼はひどく弱り切つて口をきくこともなくなつた。特別室の羽目に凭れて、明り窓からぼんやりと空を眺めてゐる日が多くなつた。煙突事件が起きたのはそれから間もなくである。

窓にさしのぞく蜂屋柿が艶やかな色を見せてゐる。百舌の聲がきんきん泌みる。今朝も又眞白な霜であらうか。狂人を相手に他愛もなく暮してゐる間に早やそのやうな季節になつたのである。不図、時の素早い推移に愕ろきながら、起床前の數分をその日も私はうつらうつらしてゐた。起床時間は既に來てゐる。僅々數分にすぎない床の中のひと時は、併し、附添夫に取つてはなかなか味わいの深いものである。

起きよう起きようと努力してゐた時である。慌しく走つて來る下駄の音が直ぐ窓下に近づいて、突然、窓硝子を激しく叩き出した。

「おい、上野さん、大變だ、眞理屋さんが……………」

「え？大變だ？首でもくくつたのかい。」

外の叫び聲に私はひどく泡を喰つて飛起ると窓を開いた。Nと云ふ收容病室の附添夫が慌しげに佇つ

てゐる。

「どつしたんです？大變だつて。」

「眞理屋さんが煙突のてつぺんに上つてゐるんだ、あれ、あれ……………」

さう云つて彼は機關場の方を指さして見せるのである。建並んでゐる病棟の彼方、濛々と黒煙を噴上げてゐる三十米の大煙突の頂上には、成程、人間らしい黒い影が枝上の猿のやうに留つてゐる。眞理屋め何時の間にあんな離れ業を始めたのか。それにしても人違ひではあるまいか、さう思つて私は一應彼の室を覗きに行つた。寢床はそのままになつてゐるが、彼の姿は見えない、直ちに附添全部を動員して棟内を探したが何處にも見當らない。何時出て行つたのか誰も知らぬと云ふ。恐らくまだ皆の寢静つてゐる間に出て行つたものであらう。してみると煙突男はやはり彼に違ひない。それと云ふので私は同僚と一緒に機關場に駆け付けた。しかし、私達が行つた時には早や煙突の周囲は眞黒な人垣であつた。院長も多勢の事務員を従えて出勤してゐた。私ははげしい苛責をおぼえた。病人の逸走を知らぬと云ふのは明らかに附添夫の越度である。ましてこのやうな騒ぎを引起すまで知らぬと云ふのは職務怠慢も甚だしい。煙突の眞下には消防手に依つて一面に救助網が張られてゐた。醫者は聴診器を持つて駆け付けるし、看護婦は應急手當用の諸材料を運んで来る。火事場のやうな物々しい騒ぎ様である。

「おーい、早く下りて来いようー。」

「やあーい、眞理屋ア危いからトットと下りて来いようー。」

「院長殿が心配しておられるぞう。お前一人のためにこんな騒いでゐるのが判らないのかアー。」

「こらあッ、落ちたら死んじまつぞうー。」

大勢の者がかわるがわる煙突を仰いで叫んだ。しかし、彼はなかなか下りて来さうにもなかつた。片

手きりで梯子にぶら下がつてみたり、今にも飛び降りさうな恰好に手足をさつと離したりする。そして、何事か叫んではげらげらと笑つてゐる。「誰か早く下ろしてやつて下さい。あれあれ、危い、早く、早く、早く下ろしてやつて下さい……………」

女醫の一人が聴診器を振りまわしながらおろる聲で叫んでゐる。その時、消防手の一人が猿のやうに素早く梯子に飛付いてすると上り始めた。観衆は一斉に鳴をひそめてその男を眺めてゐた。煙突のてつぺんでも小手を翳して同じやうに上つて来る男を眺めてゐる風である。恰度、半ば頃まで上つて行つた時である。突然、頂上から眞理屋さんの聲が落ちて來た。

「やあーい、上つて來ると、飛び降りてしまつぞう」

だが、消防手は構わずに上つて行つた。と、頂上の彼はいきなり煙突の内側へ飛込む身振りを示した。
「あつー！危い。」

観衆は一斉に叫んだ。

「おーい、上つちや駄目だ、下りて來い、下りて來いよ。」

上つてゆく消防手を押し留める聲が續いて起つた。この騒ぎが始まつてから機關場は運転を停止してゐたので、煙はぴつたり止んでゐた。消防手はすこすこと下りて來た。煙突の上では、再度彼が危険な離れ業を演じてはげらげら笑つてゐる。こん度は同僚のKと主任のTさんが上り出したが、前と同様、半ば頃に達すると、彼は忽ち口内めがけて飛び下りる氣勢を示すのである。院長が眞下に停つた。そして、危いから下りて來いと叫んだが、それすら何の効果もなかつた。彼は相も變らず人々の無能を嘲笑するかのやうに、朝日を浴びて笑つてゐる。

つひに手の施しようがなくなつた。といつて、彼が自發的に下りて來るまで放任して置くことは危険

であつた。まして衰弱してゐる體を持ちながら、何時までもあんな高層物の上に留つてゐられやう筈がない。ひと度梯子を握つてゐる手がこつたらその時はどうなるであらうか。尚お又、彼自身何時どんな氣になつて口内に飛下りぬとも限らぬ。

その時、だしぬけに同僚のKが私を見て叫んだ。

「あつ、さうださうだ。君がいい、君がいい、君が行けば奴は間違ひなく下りて来る。さうだつた、忘れてゐた……………」

彼はさう云つて狂氣のやうに人垣を分け、私を煙突の眞下に引つ張つて行つて据えた。觀衆はワアツとどよめいて一斉に私を見た。人がやつて駄目なら、私がやつたとて同じことにきまつてゐる。さう思つたが、もともと私が彼の附添夫であつてみればともかく一應はやつてみる責務があつた。眞下に佇つて仰ぐ煙突は物凄く巨大に見える。その遙か彼方、青空を背に彼は眞黒い塊りになつて蠢めいてゐる。上る前に私はまず彼に向つて叫んでみた。

「おい、お坊つちやあーん。(私は何時も彼をさう呼んでゐたのである) 僕だよう、僕が判るかあ、ベートヴェンだよう、どうしてお前は煙突へなんぞ上つたんだア、みんなが心配してゐるから早く下りて来いよう。」

さうして私は腰の手拭をはずして頻りに振つた。煙突の上では私の様子をじつと凝視めてゐるふうであつた。が、暫くして意外にも嬉しさうな聲が落ちて來た。

「あ、あ、ベートヴェンさんですかア、ベートヴェンさん、判りますよう。判りますよう。」

彼も私の手拭に答えて頻りに手を振つてゐる。觀衆はわあつと聲援を送つて寄越す。私は再度両手で輪をつくつて口に當ててありたけの聲を絞り出して叫んだ。

「お坊ちゃあーん、君が下りて来ないと、僕が困つちやふんだ、頼むから下りてくれないかア、それとも迎えに行こうかあア……」

「いいえ、モツタイない、下りますよ。下りますよ。下りますよ。ベートヴエンさん、今直ぐ下りますよ。あなたに御心配かけては罰が當ります。危いから上つて来ないで下さいよう……」

意想外に素直な調子でさう答えながら、早や彼は梯子を下り始めてゐた。觀衆はわあッわあッと喜びの聲を放つた。消防手達は萬一の場合に備えて網を強く張り直して待構へた。上つて来れば飛下りると云つて示威運動をしてゐた彼が、私のたつた一言にあんなにも素直に下りて来るのだ。彼の姿を眺めながら、私は無性に涙が湧いた。彼に對する強い愛情の涙なのだ、私は幾度か視野を煙らせながらしつかと彼の姿を追つてゐた。

彼は梯子をつたつて徐々に下りて来る。そして半ば頃まで下りて来た時である。あッと云ふ叫びが觀衆の間に起つた。瞬間、彼の體は一包みの風呂敷のやうに落ちて来た。長い間、煙突の頂上に寒氣に晒されてゐた彼の肉體は、硬直して痙攣を起したのであつたらう。彼の體は網の上に拾はれて幸ひ事なきを得た。

〔山桜〕昭和十五年十月特輯号

草平庵雜筆

舊作より

雨戸を繰ると窓下の菖蒲がぷんと匂ふ、この頃の朝の眼覺めは四季を通じて最も心たのしい。楓のやはらかな緑、燕子花の花のむらさき、ホワイトヤそれらは臙な私の眼をも充分たのしませてくれる。恙なく昨日も在り、かくしてまた今日を眼覺め、今日を迎へる。この恵み、この幸、しみじみ有難いと思はずには居られない。

朝の祈りをすませて、番茶を愉しんでゐる耳に垣外の雲雀の聲が流れて来る。雲雀はなかなか稼ぎ者だ。この頃では四時と云ふともうさかんに鳴揚る。床の中でうつらうつらし乍ら彼の囀りを聞いてゐる時位、季節と云ふものを深く感じる事はない。

今朝は珍しく横手の林で三光鳥が鳴いてゐる。縁側で萬年青の葉を洗ひ乍ら、私はしみじみこの鳥の鳴聲に耳を傾けた。月日星と鳴くのなさうだが、私には何だかよくわからない。野鳩やヒタキも鳴いてゐる。瑠璃鳥の聲もする。彼等の鳴聲を聞いてゐると、如何にも喜びに溢れてゐる様だ。おのづからなるいのちの膨らみに歌はずにはゐられないのであらう。それらは彼等の朝毎の希望の合圖なのだ。さうしてそれはまた彼等林の音楽師が捧げる神への讃歌である。水筆に水を含ませ萬年青の葉を丹念に洗ひ乍ら、何時か私の心も彼等の歌に合せておほどかな呼吸を始める。彼等の歌に溢れるもの、私の心にたゆとふもの、それは等しく今日を息づく者の喜びである。不具であれ、病身であれ、今日を斯く生かされて在り、生きてゐるのは、理窟をぬきにして有難い事である。私は癩になつて二十年のこん日、どう

やらこの大いなる恵みを思ひ生きる事の愉しさを思ふ。少年の頃は家の貧しさを嘆いた。飲んだくれの父を憎んで慰さまなかつた。癩の宣告を受けた時には、如何なれば膝ありて承けしや、如何なれば乳房ありて我を養ひしや、と父母を呪ひ生を憎んだ。それからの数年は生をもて余し、酒と女と享樂に憑かれて暮した。常に死を思ひ、また幾度となく自らの生命を断たうとした。癩院に来てからも依然生をうとみ、囚人の心で自棄に生きた。眼が悪くなつた時にはワナに掛つた鼠の様に足掻き續けた。

然し、これらの人生嫌悪や生を呪ふ心は、所詮、自己中心に憑きすぎた傲慢の所産であつた事に氣付く。人生の日蔭を歩む者のひがみに過ぎなかつた。神を知らず、自然を忘れ、自己を世の眞ん中に据ゑて、あれこれと慾望の糸を手繰つてゐる間は到底、人生の意義は解せず、まして生の喜びなど判らう筈もない。唯物の念を棄た時、人は始めて神を知り、自己の無力を意識する時信仰が生れる。私は自分を最も卑しいもの、貧しい存在と知つた時、始めて心の黎明を感じ、喜びの心を知つた。自分の意志がこの世に生れて來たのではない以上、その存在も自分一個の意志で勝手に是非する事は出来ない。と言ふ事を知つた時、私は被造物の責務を思つた。私は道を知つた。道を歩むことの力強さと歡喜を知つた。生と言ふものが此の世の外にも在る事が、私をして無限至愛の御者の、攝理の妙を感得させた。癩と云ふ悲惨な疾患が、私にとつて愛の示現となつたのもそれからであつた。瘦くづれる肉體をもつてゐる私は現在、週三回五グラムの大風子油注射をしなければ保つてゆかない。而もこれは私の生ある間續くのである。その他疵の手當、不治の疾患もある。間もなく杖もつかねばならぬだらう。咽を抉る様になるかも知れない。その他有形無形の苦痛が走馬燈の様に私を包んでめぐらう。然し、どんなにくづれても腐つても、與へられた境遇に従つて生きるは貴い心であり、無上の喜びであると思ふ。この心には癩もなければ健康もない。在るものは生かす者の心であり、生かされる者の感謝である。

私は萬年青の鉢を火鉢の縁にのせ、また番茶を啜る。葉を洗つてもらつてさつぱりしたのか、じつと見てみると、何か物言ひたげな萬年青の風情である。微風にたゆとふ菖蒲の匂ひがまた一頻り鼻をうつ。明日のいのちを私は知らない。否一時間先、一分先のいのちを知らない。然し、私の人生途上二度とは相見る事のない、この朝、この時を、かく在り、かく生きてみると云ふ事はしみじみ有難く尊いと思ふ。

〔山桜〕昭和十七年三月号

なぐられの記

私は小學校の四年生、推されて級長であつた。私は教室内で一本の鞭を持つ事を許されてゐた。それは鞭と云ふよりも棒と云つた方が適確かも知れない六尺程の磨きかけた黒竹であつた。私はこの黒竹を何時も机邊に置いてゐた。若し、生徒の中で脇見をしたり、おしやべりをしたり、或ひは居眠りをしたりする者があれば、この見事な鞭で、容赦なく彼等を擲つて差支ない事になつてゐた。先生が私にそれを命じたのである。黒竹も勿論先生がくれたものである。然し、内心氣の小さい私は、以上の三ヶ條に該當する生徒があつても、始めの中はなかなか擲れなかつた。他人の頭に手をかける事はどうにも氣がとがめてならなかつた。それで始めは、こらつとかおしやべりしてはいかんとか、呶鳴りつける程度であつたが間もなく私は容赦なく彼等の頭に黒竹を下す様になつた。私の存在は忽ち生徒一同の畏怖の的となつた。私は監視と勉強と同時にやらねばならなかつたので、総ての學科に首席を占めて行く事はなかなか骨が折れた。手を伸ばして黒竹の届く範圍までは、私は坐つたままで彼等を制したが、鞭の届

かない所は立つて行つて擲つた。私が黒竹を持つて坐席を立つと周囲の生徒達は私の行方を追つて、こゝん度は誰だらうと、その頭を物色するのであつた。中には逸早く自分だと氣づいて神妙に頭を抱えてゐる者もあれば、また中には私の機先を制して、側の者がこつそり袖を引つぱつたり、背中をつついたりして矯正させるといつた風で、授業中は何時もしいんと静まり返つてゐた。然し、彼等は絶えず兢兢として乍ら私を横目で盗み見た。私と視線がかち合ふと、彼等は慌てて眞面目くさつた姿勢に返るのであつた。

私の黒竹を最も多く見舞はれたのは石塚と廣瀬と云ふ生徒であつた。石塚は馬車曳きの息子で、廣瀬と同じく學科も操行も零に近かつたが、力持ちで廣瀬と双壁をなす餓鬼大將であつた。彼も私と同じ字の者であつた。登校の道も一所だつたので、學校からの歸途、私は彼の仕返しを怖れ、何時も途中の本屋で一時間程讀書していくか、わざわざ小半里も廻り道をして歸つた。然し、私のこの懼れが杞憂に過ぎなかつたのを知つてからは安心して同じ道を選ぶことが出来た。彼にしてみれば内心私を怨んでゐたかも知れなかつたが、登校や歸校の途中で、私に仕返しをすれば、學校に於てより手酷い私の報復となつて現はれる事を怖れてゐたのだ。彼には多勢の子分があつた。彼の子分となる者はたいいて成績表に丙や丁を五つ六つ持つてゐる連中ばかりで、石塚はさういふ者を手馴づける事が巧みだつたし、子供達も彼の命令には一切服従してゐた。彼は授業中によく飴をしゃぶつてゐた。また隣前後の者に話しかけたり、机の上に教科書を立てて、その陰で獨樂を廻したり、色々な虫類を引つぱり出してはこつそり遊んでゐた。ある時、彼の机の中から青大將が這出して授業を滅茶滅茶にしまつた事があつた。何しろ六尺近い不氣味な恰好の物が、教室中をくねりくねり這廻るのであるから、生徒始め先生までが總立ちとなり、キヤツキヤツと云ふ騒ぎ様を呈した。その日彼は灯りのつく頃まで、教員室の片隅に、水を

入れたバケツを両手にぶらさげたまま立たされた。私は彼を最も怖れていたが、他を擲つて彼ばかりを大目に見ることは出来なかつたので、私の黒竹の見舞を受けない日は殆ど無かつたといつても良い。人より一倍堅い彼の頭は、こつんと實に氣の毒な位大きな音を立て、黒竹をつたはつて来るその手應へには私も流石に済まない思ひがした。

生徒の中には私におべつかを使ふ者もあつて、さういふ連中は、クレヨンとか、ノートの類などを私の所へ持つて来た。貧乏人の私は何時も穂先のすり切れた筆や、折れて小さくなつたクレヨン等しか持つてゐなかつたので、これらの贈物は私をたいへん満足させた。廣瀬は百姓家の息子なので、お辨當の時、私によくさつま芋や馬鈴薯の蒸したのをくれた。それがまた私には、珍しくもあり、美味でもあつて楽しみの一つであつた。石塚の外に、私にはもう一人心を悩ますものがゐた。白石と云ふ生徒で、彼の父は、××製麻會社の重役をしてゐた。私の父も五十の坂を越した身で、その工場の職工勤めをしてゐた。俺の親父は彼の父親に使はれてゐる、生涯頭の上らぬ身分だ、と云ふ思ひが、何がな一種特別な感情となつて、常に私の裡にくすぶつてゐた。そのため白石に對する私の態度も自然他の者に對するそれとは異つてゐた。彼は私と並んでゐたので、私は事々に彼に反感を抱いてゐた。彼は貧乏人の私とは違つて、衣服や持物から既に異り、私など生まれて手を通した事のない金ボタンの服を彼は着てゐた。鞆も革製の立派な物で、その他筆入れ、紙挟み、硯箱等も羨しいほど立派な物ばかりであつた。お辨當のおかずも、何時も卵焼や煮魚などで、澤庵や梅干ばかりの私の辨當とはてんで比較にならなかつた。その上、上草履も穿いてゐたし、雨が降れば女中が傘を持つて迎へに来た。袴も着けず、親指の飛出たボ口足袋を穿き、縫目のむくれ返つた兄のお古の鞆を使つてゐる私とは、頭のとつぺんから足の爪先まで、餘りにも大きな相違があつた。書方の時間に彼が紙挟みの中から上等の半紙を取出して使ふ時、私

は粗末な藁半紙であつた。それも昨夜から母にねだつて漸く貰ふ事が出来た一銭で整へたものである。こんな風に彼の衣服やお辨當のおかずや持物の總てがのし掛るやうな重量を持つて常に私の心を壓迫した。彼と對して、私が受ける何とはない引目を、これが貧乏人根性なんだと私は思つた。

「うちはどうして貧乏なの？」

私は折々父に訊ねてみたりした。

「何事も運だな。運が總てを支配する世の中だよ。この父親が若い頃には、家も造り酒屋でなかなか豪勢なものだつた、人の後指などさされた事はなかつた。それが貰ひ火で焼出されてからは、落目につぐ落目で、六十近いこの父まで職工づとめをしなければならぬのだから。運と云ふ奴は怖いものだ。お前達にも人並のことをしてやりたいが、今のところどうにもならぬ。我慢してくれや。その替り、どんな事をしてもお前だけは高等小学校へ上げたいと思つてゐる。お前が學校を終るまでにはどうしても千圓掛かるんだ。その積りでしつかりやんなきゃいかんぞ。」

父は何時そんな意味の事を云ふのであつた。斯んな風に云はれると、ああもして貰ひたい、あれも買つて貰ひたいと心密かに思ひ描いてゐた事も、自然、諦めさせられるばかりでなく、頭に白いものが目立つて多くなつた父がひどく氣の毒に思はれ、その都度、父がぺこぺこ頭を下げてるであらう白石の父に對して、義憤とも憎惡ともつかぬへんな感情の燃立つて來るのを覺えたのである。

「よし、金では負けても學問では負けんぞ。」

白石の壓迫を感じる毎に、私は直ぐ心でさう力味返つた。俺の親父はこいつの父に頭が上らんが、お前は俺に頭が上らんのだ。私の中にはさういふ叫びが常にあつた。事實、私と彼との間には大きな隔りがあつた。彼にはお坊つちゃんらしいへんに横柄な所があつた。言葉使ひや態度の中にもさうしたもの

が剥出されるので廣瀨などは彼をよく罵つたり擲つたりした。然し、私は白石だけは擲らなかつた。例え、擲つてもよい理由があつても、父同志の關係が考へられ、白石に對する正當な自分の態度も、何だかそれに拘泥してゐる様に思はれて厭だつたからだ。唯心の中ではその父に對すると同様彼に對して憎惡めいたものの湧くのはどうにもならなかつた。

ある雪の日の事であつた。私の級の體操の時間に東西に別れて雪合戦を始めた。霏々として降り頻る白雪を踏んで、兩軍は互に敵陣奪取を目ざして力戦した。西軍の大将は石塚、東軍の私の方の大将は廣瀨であつた。石塚は陣の先頭に立つて旺んに大きな飛礮を放つて來た。敵軍の飛礮はどうやら私をめぐりに集中した。それとみるや、廣瀨や他の者達は私を庇ふ陣立をとつて應戦した。私は頭や肩に三ツ四ツ大きな飛礮を受けた。その都度かつと熱い痛みを覺えたが、私以上飛礮の雨を受け、全身雪だらけになつて奮戦してゐる廣瀨達を見ると、日頃彼等に黒竹を見舞つてゐたことが何だか濟まない氣がした。やがて休戦の鈴が鳴り兩軍は引分けと言ふ事になつた。かじかんで真赤になつた手をふうふう吹き乍ら教室へ駆込んだ私達は、暫くストープの前に手を翳して暖を取つた。少々あつて私は御不淨へ立つた。すると、直ぐ私のあとから四五人の足音がして、聞覚えのある聲がした。

「今日の級長は散々だつたね。俺は二つばかり狙ひをつけて叩きつけてやつたよ。」

「俺は一つだつた。黒竹の仕返しはこんな時でなくちや取れないや。だけど廣瀨の奴は馬鹿だね。毎日あんなに擲られてゐ乍ら、今日は一所懸命級長を庇つてゐたぜ……………」

「おい、君、級長の袖を見たかい？」

さう言つて聲をひそめたのは松本らしかつた。

「うん、見たよ。俺あ始めジャケットだと思ったら、なあんだ靴下のお古ぢやねえか、チエツだ。」
さう云つてくすんと笑つたのは篠崎らしかった。

「靴下の級長つて、こんど呼ばうよ。」

「だけど級長の家はよっぽど貧乏なんだね。」

「貧乏級長」

「靴下級長」

口々にさう云つてどつと笑ひ乍ら出て行つた。御不浄の中で息を殺して聞いてゐた私は、思はずかつと顔が熱くなつた。怒りと恥とに全身がぶるぶるわなないた。私は自分のシャツの袖を引張て見た。それは確かに毛糸で暖かさうな恰好はしてゐたが、彼等が云つた通り、女工をしてゐる姉のお古の靴下を、二の腕の所から繼いだ物である。私は別にジャケットに見せようと思つてさうして賣つたのではなかつたが、捨てるのも勿體ないと云つて、昨夜母が夜なべに作つてくれたのだ。

「靴下の級長、貧乏級長。」

私は口の中で呟き乍ら、益々顔が火照るのを感じた。私は私の悪口を云つた連中を、どうしてくれようかとさへ思つた。私は靴下の袖を着物の袖の中に押隠して御不浄を出た。教室の扉を開け乍ら、私はひとりで顔の熱くなるのを感じた。みんなの眼が一斉に、それも私の袖ばかりを見てゐるやうに思はれ、一層熱くなつた。次の時間は作文で、題は雪合戦と云ふのであつた。みんなはまだ興奮してゐるらしく赤い顔をして、時々私の方に注意しながら小聲で囁き合つてゐる。松本や篠崎は何喰はぬ顔付で済ましてゐた。石塚はそろそろ見舞はれるかなと云つた眼差で、折々私を盗み見た。然し私は彼等の存在など全く念頭になかつた。

「級長の家は貧乏なんだね。」

「ジャケツかと思つたら、靴下のお古さ、チエツだ。」

「これから靴下の級長つて呼ばうよ。」

そんな聲が絶間なく頭の中を駆けめぐつて作文を綴るどころではなかつた。私は一人芝居でも演じてゐるやうに、心の中で蒼くなつたり、赤くなつたり、腹をたてたりしてゐた。

その後、私は縷々貧乏級長、靴下級長と云ふ彼等の聲を耳にした。然し、それらの蔭口も最早私の心を動かさなかつた。私は相變らず姉のお古を腕につけてゐたし、愛用の黒竹は例に依つて彼等の頭上を渡り歩いた。さうして四年生の時代が終わつた。卒業式の日、私は石塚や廣瀬やその他の襲撃を受けるものと覺悟してゐたが、どうしたわけか、誰も私に仕返しをする者はなかつた。五年生六年生と私は相變らず首席で通した。黒竹は廃止され、級長は自治會長と改称された。みんなは相變らず元氣澆刺としてゐたが、私は五年生の終り頃から既にめつきり向学心を失つてゐた。私の顔には癩性斑紋が赤く色どつてゐたからだ。貧乏を嘆いて發奮し、老いた父を思つて猛然と湧立つてゐた希望も氣魄も、蕾のまま空しく心の中で筆り散らされてゐた。

私は暗い影を行手に凝つと見守り乍ら六年生を終つた。「仰げば尊し」の歌も、私には哀しい挽歌でしかなかつたのだ。

私は卒業證書と優等生としての賞品を抱えて校門を出た。何時もならそれらの賞品の數々は、父や母が近所の前に喜びと矜とを以てする喧傳の材料であつたが、今の私にとつてはもはや一枚の病葉に過ぎない物であつた。

私が校門まで來た時、其處には險惡な表情をした石塚や廣瀬やその他十五六名の顔が待受けてゐた。

私は驚かなかつた。擲つて貰つた方がさつぱりする氣持であつた。

「やい！貧乏級長。」

まづ石塚の聲がし拳が私の頬を熱くした。

「靴下級長、黒竹の御禮だ。」

廣瀬の聲だ。何か固い物が私の頭をしたたかに撲つた。

「生意氣だ。」

「貧乏人……」

後はもう罵辭と鐵拳と下駄が私の全身を包んだ。

その時からもう十數年経つ。私は時折當時を懐想し、それら幾多の級友の顔を描いてはひとり愉しむ事がある。Kはどうしてゐるだらう。Sは何の職業に就いたか。懐しいそれらの顔の中には、こん度の事變に應召して護國の英靈と化した者もあるであらう。私が彼等を追想する如く、彼等もまた靴下級長の私を思ひ出して懐しんでくれる事があるであらうか。あるとしても、よもや私が癩者として施療院の一隅に呻吟してゐるとは思はないであらう。

（山桜「昭和十七年七月号」）

キリスト者の道（最晩年の手記）

癩者の父

私が癩の宣告を受けたのは十六歳の時である。併しもう其れより二三年前、癩性斑紋が私の顔に出てゐたし、右足には炬燵で焼いた水泡の疵があつた。父は私の顔の斑紋を氣にして、私の顔さえ見れば、むつつりと、しげしげ見つめる。私が學校から歸つて、まだ鞆も下ろさないうちに、私を日向に連れて行つて、斑紋の出てる所を手で押してみたり、抓つてみたりする。時には針で突つて痛くないかと訊いたりする。客が來てゐる時でも、食事の時でも、父は何氣なさそうに注意深く私の顔に視線を注ぐ。床についてからでも、ふと眼を覺ました時など、じつと覗き込んでゐる父の眼にぶつかつて、ぞつとした事も度々であつた。母は、私の斑紋が背や臀の方へ移るようにと神頼みをして、私にも信心を起こす様にとすすめた。この間、塗布薬を用ゐたり生姜湯で罨法したりしてゐたが、何の効果もなかつた。私は家から二里ばかり離れた社に、寒い頃であつたが二十一日間、夜の明け切らぬうちに二里の道を往復し始め、寒寒と星の耀ふ社頭に霜の凍りついた土に両手をつかえ、斑紋の快癒を泣いて祈願したのであつた。が高等小學校を卒業した時、私は癩の宣告をされたのである。

その頃、父は五十何歳かの職工であつた。私に高等小學校を修了させるのは並大抵の事ではなかつたに違いない。県立病院で診断を濟ませて歸ると、父は声を顫はせて慟哭した。私も泣き、母も泣いた。父は私を斬つて自分も腹を切ると云つてきかなかつた。若し母と姉が居合せてくれなかつたら、どういふ羽目になつてゐたであらうか。

ふたりめの癩者とわれの知りしとき声にいだして哭きし人はも
父の棄てし刀つめたく冴え返る燈小暗き畳の上に

次男の兄の發病したのは、私がまだ幼少の頃であつたらしい。私が七八歳の頃には、兄の病勢は大分進行して、頭髮も眉毛も殆ど脱落し、その上潰瘍しきつた顔は、どす黒く光つてゐた。手足にも繃帯を巻いてゐた。終日隠れて住んでゐたやうである。それも長屋住居の二間しかない家のことである。兄はいつも三畳間の方に居た。板の間につきすべりを敷いたきりの細長い室で、父が兄の爲に設けた小さな炉が切つてあつた。奥に一間の戸棚があり、客のある場合には、眞夏でも兄は襖瓶替りの徳利を抱え込んで、この戸棚の中にひそんでゐた。長居の客や、飯時になつても歸らない客があると、兄はよく戸棚の中で咳ばらひをしたり、羽目板をどんどん足で蹴つたりした。母はおろおろして、わざと咳を二つ三つしては、もう少し辛抱してくれと合図をするのであつた。時には、どうも鼠が騒いで困るんですよ、などと立上り、戸棚の兄を小声で宥めすかすのであつた。

母が一番氣をつかふのは兄の便の事であつた。便所が隣家と共同なので、母がまず先に行つて、人の居ないのを確かめ便所の入口に母が見張りに立つ。それでも母の留守の間に便所へ立つて、うっかり隣家の子供に見つかつたこともあつたのであらう、或時、隣家の子供が私に、おめえんちには變な人が居るんだなア、あれや誰だい？ と訊くのであつた。その時、私は眞赤になつて否定した事だけは覚えてゐる。當時の私は兄がどんな訳で隠れてゐるのか判らなかつた。勿論癩など判らう筈もない。兄は十日に一度位行水をした。裏庭に板や筵に囲つた小屋の様な中で、母と姉が人目を憚りながら、兄を盥に入れて洗つてやるのを折々見かけた。兄の身體は異様な臭氣がし、體にはいつも虱がわいてゐた。うつか

り姉や他の兄達が、家の中が臭くてやりきれないなどと愚痴をこぼすものなら、兄はすさまじい剣幕で怒鳴り散らした。そんな時、母は泣いて兄にあやまるのであつた。又兄はよく私に内密で買物をお願いする。私はこの兄を憐れに思つてあたらしく、兄の云ふ事は何でもよく聞いてやつた。私が菓子を買つて来ると、兄は其の中の幾つかを、にやにや笑ひながら私に呉れた。私は平氣でそれらの菓子を喰ひ、又兄の相手にもなつて遊んだ。その頃、家では泥棒を飼つて置く様なもんだ、其處いらにうつかり物も置けやしないと、姉や小さい兄達が騒いだ。私は、斯の様な兄との交渉のうちに、兄の病氣を感染してゐたのであらう。

その頃の父はよく酒を呑んだ。仕事の歸りに定つて居酒屋で呑んで来る。兄や姉が仕事から歸つて来ても、みんなが夕飯を濟ませて、父の膳だけがいつも火炉の傍に据ゑられてあつた。七時になり、八時になつても父の姿が見えないと、母はぶつぶつ云い乍ら門口まで何度も行つたり来たりする。兄達はさつさと遊びに出掛けて了い、残るのは母と姉と私、それに小さい妹と隠れてゐる兄の五人だけである。こんな晩に私と母で父を迎えに出掛けると、父は寄りつけの居酒屋にゐるか、路傍に呑んで倒れてゐるか、誰かに連れられて来る途中であつたりして、小さい私と母が両脇から五體の自由を失つてゐる父を背負ふやうにして歸つて来るのである。父は家に歸ると、すぐ又酒を所望するので、母がたしなめると、父は激しい語氣で怒り出すのである。はては掴み合ひとなり、若い頃から苦労ばかりの母は、すぐ逆上してヒイヒイと云ふ騒ぎに、小さい私と妹が、泣きながら必死になつて、父の足や母の袖に取り縋つて、右にもまれ、左に転がされながら、何とかして二人の争ひをやめさせやうとする。これは殆ど毎夜のように續いた。隣同士の人達も、始めのうちこそ、飛んで来て仲裁もしたが……。こんな騒ぎの後で、父は定つて三畳間へ行き兄に毒舌を吐いた。

「お前みたいな業さらしが居るから、家中してこんな苦勞をせにやならん、さつさと早く死んでしまわんかい」

兄は黙つて頭を垂れてゐるだけであつた。

ある年の秋清潔法施行が済んで間もない頃の事であつた。大掃除の日には、兄も家に潜んでゐられないので、結飯を持つてまだ夜の明けぬうちに、四五里奥の深山に隠れる。そして掃除が済み、とつぷり日が暮れてから歸つてくるのである。或日、學校から歸つて來ると、父が小さな裏庭にせつせと穴を掘つてゐる。穴はかなり大きく深いもので、スコップで土を揚げてゐる父の頭が、地面とすれすれのところに動いてゐる。こんな大きな穴を掘つてどうするの？ と私が穴の縁から覗き込んで尋ねると、父は私を見上げ、一瞬恐ろしい眼をして睨んだ。

「がきの知つたこぢやない。あつちへ行つてゐる！」

私は驚いてこそこそと離れた。この穴は四五日の間そのままにしてあつた。

或夜、物音に私はふつと眼をさました。周囲が何となく騒がしい。布團の中からそつと覗くと、ほの暗い十燭燈の光りの中に、父は炉端に拳をつくつて黙座してゐる。傍に母が背をまるめ、袖を噛んで忍び泣いてゐる。そしてその向ふ側の三畳の方では小さい方の兄と姉が、病氣の兄のどす黒い二の腕に繻帯を巻いてやつてゐる。私は背すじがぞくぞくして布團の中にそつともぐり込んだ。

翌日私が學校から歸つてくると、裏の穴はきれいに埋められ、新しい土の匂ひがしてゐた。後になつて父母の話を盗み聞きしたところから想像すると、あの夜、父は兄の合意の上、金棒で兄を殺害し、死體は裏の穴にこつそり埋葬する段取りになつてゐたらしい。ところが父の一撃を受けると、兄が急に悲鳴を上げたので、隣家の人が駈けつけて來た。この一件があつてから、父は押黙つて暮す日が多くなり、

一層酒の量を増して云つた。

之に類した事件は、これだけではなかつた。或時は兄の首に石を結びつけてやり、山中の沼に投じさせようとした。投身はしたが死にきれず、他の兄達が見かねて沼に入り、溺れかけてゐる兄を助け上げたのださうである。或時は首をくくろつとし、或時は鉄路に飛込んだが跳ねとばされて目的を達しなかつた。

父の焦燥と懊惱が毎日に増してきた。私が十歳頃、或日兄は突然姿をくらました。その後、兄からの消息で、身延山の療養所に居るのが判つた。私の家にかすかな光りがさしそめたのはそれから四五年の間であらうか。併し私の發病となつた。父は十六歳の私によく言つた。人間に生まれ人並の身體を持つてず人並の生活も出来ない者は、生きてゐても本當に詰らぬ、生きてゐる資格がない、長く生恥を晒すよりは、一思ひに死んだ方がましだ。死ぬには一分とはいらぬ、剃刀で一吋咽喉を切れば萬事が解決される、お前にやる勇氣がなければ、父が咽喉を切つて手本を示そう。さういふ時の父は、静かな口調でしげしげと私を視凝めながら云ふのである。私は腹の底まで胸震いするほど怖ろしかつた。夜もゆつくり落ちていて寝てゐられなかつた。

私には何の希望も張もなかつた。といつて自殺するほどつきつめない。私に唯一の救手は、町に別居して映画館の音楽手をしてゐた直ぐ上の兄で、時々町へ連れて行つては御馳走を食はせ、映画を見せてくれた。時には山や野に連れて行つて慰めてくれた。私は別れになると、いつも泣きながら、早く家へ歸つて來ると頼んだ。

このような日々が三月、半年と續く間に、身延から神山の復生病院に移つてゐた兄から便りがあつて、病氣ならすぐ來る様にと云つて來た。その年の秋に私に父につれられて復生病院に入院したのである。

途中も父は死を決意し、私を道伴にしようとしたが、思ひ餘つて諦めた、と後で退院して、母から聞かされた時、私はひやりとした。御殿場と復生病院の間の道程がもつと長いか、私達の神山行きが夜間でもあつたら、どうであつたらう。

復生病院に於ける私の生活については、私がドルワル・ド・レゼー師から受洗した事と日常生活が私の生涯に消えぬ印象を與へた事だけ記して置かう。然し私は、斑紋のすつかり取れた顔を是非見たいと云ふ父母の願いで、一年足らずで復生病院を去らなければならなかつた。顔の斑紋さえ消えればもう癩はなほつたつもりで喜んでゐる單純な父母。私は内心淋しく人並の労働仕事に従事することになつた。それに私にとつて最も苦痛であつたのは、仕事が濟んでくれたに疲れ切つてゐる身體に大楓子油の注射を打つ事であつた。日曜と特別の差支えがない限り、定つて打ねばならぬ事は、餘程強い意志の力が必要であつた。まして長屋住居の小つぽけな家に、人眼を避けてやるのである。大楓子油を湯に溶かしてゐる所へ不意に客があつたり注射してゐる最中に隣家の人が入つて來たりして、随分とあわてふためく事もあつた。又仕事の最中に、注射のしこりが痛かつたり、時には化膿したりして、同僚の者達にも變に思はれた事が少なくなかつた。それでも三年ほどはどうかやら續けたが、病氣も別に變わりがなくなつたし、それに自分一人だけ痛い思ひをして注射しながら生きる事に倦いて來た。教會にも行かなくなつた。こんな疲れた氣持は私を自棄にし、刹那享樂主義者に仕立てて云つた。私は酒を呑み、女と遊ぶ事を覺えた。

そして二三年ばかり經過した。私の顔には又斑紋が浮いて來た。私の怖れてゐた來るべき時が遂に來たのであつた。私は密かに死を決してゐた。復生病院の思ひ出も、洗礼の日の感激も、私の中からいつか消え失せ、世を疎み自嘲する心がそれらに替わつてゐた。

その頃、妹が發病したのであつた。又しても父の苦悶、母の悲嘆。私はただ酒を求めて巷をさまよつた。そして徴兵検査の濟んだ春、誰にも黙つて自殺行に出たのである。

私と妹が現在の療養所に落着いてはや八年に近い。主はいつ如何なる場合にも、いと深き罪人をも棄て給ふことはない。主は私の中にも人並みの孝心と云ふ温かいものを育み給ふた。

私は嘗て父に改宗を勧めたことがある。復生病院から歸つた當時にも折に觸れては救霊のことを、基督のこと、教會のこと等について、わかりやすく説いたが、うんあの耶穌のことか、と云つたきりだつたし、母も亦、私が持つてゐる十字架やメダイユを見て、家には先祖からの神仏が祭つてあるのに、と云ふ始末であつた。その後、私自身教會を離れて了つた。

こちらに来て、私もカトリックに復歸してみると、又老いた父母のことが氣になつてならない。恵まれないなかつた生涯だけに、救霊の方法を是非講じてやらなければならぬと思つた。私は又父に對して長文の手紙をかいた。父からは何の返信もなかつた。私は重ねて手紙を書いた。その父も胃癌で今は重湯も飲めない。医師は既に餘命幾何もないと宣してゐる。若し神の存在が考へられず永世と云ふものが我々に約束されていないとしたら、私は父を思ふに忍びないであらう。私は主の御前に額づいて祈るばかりである。それだけが私に與へられた唯一の道であり孝心である。

神は眞實にて在せば、汝等の力以上に試みられることを許し給はず、却つて、堪ふる事を得させん爲に、試みと共に勝つべき方法をも賜ふべし。

(コリント前・十ノ十三)

三人の癩者の父と生れまして心むなしく病みたまひむ

ふたたびは生まれることなしうつし世に仕へる時よつひにあらぬかも

〔聲〕昭和十六年一月号

ルルドの引越

この間、私は未知の人からマリア様の御像を戴いた。象牙色をした一尺程のなかなか見事な御像を受取つた時、私は恰度中耳炎を病んで臥床してゐたので、其の喜びひとしほ深いものであつた。私は早速御像を机上に安置し、聖心の深い御配慮を思ひ乍ら心から贈主の平安を祈つた。

私は豫て復生病院のルルドに眞似て、義弟と一緒に庭先にルルドの洞窟を造つてゐた。小さな柴山に圍まれた洞の中には、マリア様がなかつたので、御主キリストの十字架の御像を安置した。朝夕この前に額づいてロザリオを誦へることは、私の深い喜びの一つであつたが、この洞の中にマリア様の御像が飾られたら、どんなに良いだらう、と思つてゐた。ところがマリア様の御像がまだ來ないうちに私はこのルルドの在る庭を残して、轉室せねばならなくなつた。どういふ理由かは知らぬが、直ちに轉室すべしといふ事務所からの命令である。私は直ちに引越の準備に取掛つた。私は庭に出てルルドの前に額づいた。そして親しみなれた庭の堤や花園や樹木を眺めた。

私がこの病舎に移り住んで來た時、廣いこの庭には雑草が生繁り、雨が降れば直ちにこつた返して歩行も不自由な程荒果てゝゐた。部屋の中も、先住の人が居たとはいへ、殆ど手入が行届いてゐなかつた。私は義弟と一緒に毎日毎日柵を造つたり勝手や洗面所の修理をしたりしなければならなかつた。こんな

大工仕事は、依頼すれば院の方で本職の大工を廻して寄越すが、それは戸障子の建付けなどが主で、そのほかの細々とした事は結局自分達でやらなければならぬ。部屋の中が大體片附くと、私達は庭の整理に取り掛かった。山林を開いて建てた舎であつたから、赭土のまじつた庭土には、一面に小笹が根を張つてゐるので、徹底的に土を掘返して根を取拂つた。低い所には土を盛つて炭殻を敷き、周圍には小さな堤を築いて、玉檜や躑躅を植ゑ、中央にはルルドを造り、その傍には禽舎をしつらへた。かうして花園には草花がとりどりの花を開くやうになつた。

私はこれらの仕事を非常な楽しみと期待を以てこつこつと少しづつやつた。しかし癩者の身、それも私のやうに病氣が古くなつて、絶えず眼の痛みに襲はれてゐる者は、一寸過勞な仕事をする、直ぐ熱を出して寝付いて了ふ。兩手兩足には厚ぼたく繃帯を巻いてゐるので、細い仕事は暇が掛るし、眼が悪いので疲は人の二倍である。眼は充血して疼き出し、兩眼帯をして俄盲の幾日かが續く。一本の釘を打つにも見當が外れて、よく指を金鎚で叩いたり、鋸で曳いたりする。ぶよぶよの手は一寸固い物をつてをれば直ぐ疵をつくる。この疵がまた仲々治りにくい。

私の手はもう二三年繃帯のとれた事がないので、朝起きて顔を洗ふことも、もう二三年この方ない。週三回の治療日の入浴にも、繃帯を巻いたり絆創膏を貼つたりしてをれば思ふ様に身體も洗はれず、顔なども手拭いでそつとふいて置くだけにする。私は時折、洗面器になみなみと清水を充し、とつぷりと兩手を浸けて心ゆくまで顔を洗つてみたいと思ふ。毎朝でなくとも十日に一邊でいい。顔ばかりではない。癩になつて五體の自由を失ひ、膿汁が滴る様になつた現在私は始めて肉體の有難さを知つた。殊に急激な顔面神経痛で盲目になり暫く暗黒の世界に住んでから、意外に視力が恢復して物の形が臙げに見えるやうになつた時など、その喜びは到底筆舌につくし難かつた。

庭は苦痛と努力を傾けてしつらへただけに、私の喜びは一層深いものであつた。私はこの庭を愛で、読書や思索に疲れると、よくそこを歩いた。枝から枝へ鳴き移る小禽の聲に耳を傾け、やはら陽の一杯に濡れてゐる土を一步一步踏みながら、一木一草の色や匂やそれらの形が作る趣に、どんなに胸をときめかせたことか。眩しいほど陽の中に繙帯の手をさしのべて、再び生れる事のない此の地上に深く息づくものの命の不思議さ、その恩恵を私はどんなにしみじみと識り得たことか。

こんどの轉室はこれで今年二度目、入院してから八度目である。そのうち自分の意志に依るもの二三を除けば、他は凡て事務所の命に依るものである。同じ院内の動きであつても、住み慣れた室を移るのは餘り良いものではない。癩院を墳墓の地と定めてゐる者は、あてがはれた室をわが家として安住してゐるのである。だから不自由な身體をおして苦痛と闘ひながらも、室の清掃に心がけ、庭を美しく整へる。たとへ三日でも住めば自分の室で、綺麗にしたいのは人情である。不自由になつて毎日の生活に粗相をしながらも、不自由舎に行くことを思ひ渋り、軽症舎に留つてゐる人々の氣持ちは私にもよく判る。患者の引越しだからといつて膳箱と蒲團と風呂敷包一箇だけの持運びで済むものではない。それに今度の私達の轉室にしても、出たあと直ぐ誰を入れるといふのでもなく空屋にして放つて置かれ、手入れしたあと忽ち汚れ、庭も荒果てて顧みられないのである。院當局者はもつと我々の愛居愛庭の心情を掬すべきである。

今度移つて来た舎は、六疊二間から成つてゐるこぢんまりした造りであるが、樹木は鬱蒼と空を覆ひ、暗い室の中は荒れ放題である。鴨居には毛蟲が這つてをり、埃と芥で息も詰るばかり、唐紙や畳の類はぼろぼろに傷み、戸障子は敷居にくつ附いたまま動かうともしない。また羽目板や廊下は先住者がよく手入れをしなかつたのであらう、ひどく汚れてゐて洗ふと、ぼろぼろと垢がよれる。私は手をつけるこ

とも忘れて暫く呆然としてゐた。

鴨居や柱には夥しく釘が打込んであつて、私は拭き掃除しながら手に幾箇所となく裂き傷をつくつた。庭先には附近の山林を伐採した小枝が山と積まれてゐて、その片附や何やかと一通り掃除を済ませるのに三四日も掛つた。それからまた柵作や修理や、戸棚の目貼……。なかでも戸棚の目貼がなかなかの大仕事で、内部を全部貼て了ふのに二三人がかりでたつぷり一日掛る。病舎は隙間だらけで外の明が透いて見えるが、そこから二三月になると吹きまくる砂風が吹込んで部屋の中はおるか、戸棚の中まで砂だらけになつて了ふので是非目貼が必要になるのだ。

荒れた庭は取片附けて低い所には土盛をし周圍に檜を植ゑた。家の横手は林になつてゐて、庭は前より狭いが山添に住んでゐるやうでよい。初霜の庭には急拵への花園が出来、今を盛りの菊が移し植ゑられた。

移り来て踏む庭土に蟬殻の

一つとまりし松毬まつかまを拾ふ

北窓に被つてゐる松の枝を抜つて書架や机を据ゑると、ひとまづほつとした。マリア様の御像が來たら何處に祭壇を拵へようかと、義弟と相談したりしてゐるうち、私は中耳炎で臥床しなければならなくなつた。耳の中が抉られるやうに痛んで顔半分が綿でも詰めてある様に思はれてくる。自分の聲も他人の聲も何處か遠い所から聞こえてくるような氣がする。私は床の中で夢とも現ともなく口ザリオの祈りを誦へてゐた。爲さねばならぬ事は積つてゐるし、折悪しく耳鼻科の醫師が風邪で休んでゐたので醫師

の恢復するまで、苛々しながら忍ばねばならなかつた。

實際私達癩者には苦痛のない日は殆どない。譬へば、秋光るといふやうな良い日とが果して幾日我々の氣分の上にあるだろうか。病氣が古くなれば誰もが失明するか手足を切るか、喉を切開してカニューレして呼吸をするやうになる。その上なほ肺を犯され、胃腸を害ねたりする。癩者は信仰に依らなければ心の秋日和を迎へることは不可能である。私達は苦痛につぐ苦痛を、カルワリオの御主の御苦難に併せ獻げるとき、始めて苦痛の意義を識り、苦痛の喜びを覺えるのである。主は愛するが故に我等に苦痛を與へ給ふ。我々の苦痛が大きければ、それだけ主の愛も大きい。主の愛は惜しみなく奪ふところにある。奪ふことに依つて更に大いなる恩恵を約束する。

私が世の人の最も忌み嫌ふ癩になつたのも、主の愛の限りない現れであると思ふ。私が若し人並みの健康者であつたなら、私は恐らく主の救いに與り得なかつたのであらう。私は俗世の幸福を握り、肉體は腐らないにしても、私の靈魂は永遠に腐敗し去らねばならなかつたのであらう。

汝等己の爲に寶を地に蓄ふる事なかれ、此處には鏽と蠹と喰ひ破り、盗人穿ちて盗むなり。汝等己の寶を天に蓄へよ。彼處には鏽も蠹も破らず、盗人穿たず盗まざるなり。其は汝の寶の在る處に心も亦在ればなり。(マテオ六ノ一九ノ一二)

今私の肉體は生きながら腐りつつある。併し私のこの汚れた肉體を支配するところの靈魂は、現在より未來へ、地より天へ、死より生へと羽ばたいてあるのだ。

〔聲〕昭和十六年二月号

子羊日記

火曜

私は何一つとして自力では生きられない人間である。私の毎日の療養生活には、一碗の飯、一本の繻帯にも、何と深い愛の心が秘められてある事であらう。それらの恩恵を私はこれまで驚く程感ぜずにごしてきた。余りに多くの恩恵の裡に生活してゐると、とかく慣れてしまつて、心の眼まで眠り勝ちになる。私は、はや十年、人々の恩恵を喰ひ盡して來た、これから先きも亦さうなのである。しかも、それらに報いる事ができない。自分には生き長らへていく価値があるのだろうか。

病める者は病む事の中に生存の資格があり、生甲斐があるのであらう。天主様は私達を決して無爲に造りはしない。病み甲斐ある人生を私は其處に見出さう。國家や社會が私達癩者の生涯を安らかに養つてくれるから、私達は療養を全うしなければならぬ。そして人々の愛に應えて祈ること、それが私の報恩の道である。

水曜

射禱の数を毎日増してゆかう。少しづつ増して、一つ一つに誠心をこめて祈らう。主よ貴方は私が祈らうとする前に私の心を悉くみそなはし給ふ故に、こひねが冀はくは私の祈らんとする人々に特別の恵みを

與へたまへ。

木曜

便所の朝顔が毀れたので修繕をする。腐った板を張替へ、朝顔の筒がうまく嵌るやうにするのは素人大工にはなかなかの大仕事。イエズス様はこんなお仕事をなさつたかしら。と取掛つたのだが、手許が暗いところへ眼が悪いので釘がうまく打ち込めない。それに曇天でか釘の頭が見えない。音を頼りに打つただけれど、使ひ古した錆釘はぐにやりと曲つて了ふし苛々して力まかせに叩くと自分の指を打つ。三十分たつても一本の釘が打てない。私は悲しくなつて仕事をなげすてた。部屋に入つて、主の御前に額づいてみると、やくざな自分が思はれてきた。だが、私の心の悪い眼が、毎日どれほど天主を仰げぬやうにしてゐることが。焦燥、立腹、不遜の態度が、私の魂を眞直ぐ主の御胸に打込む事を、どんなに妨げてゐる事か。

主よ、どうぞ貴方の愛の釘を私の魂に奥深く打込んで下さい。

金曜

今日から摂食。三割減。うまくてもまづくても必ず実行。間食は慎むこと。

不自由になつて終日籠居ひねもすまひの生活をしてゐると、兎角口がさもしくなつて、あれやこれやと喰ふ事ばかりを考へ、又それが大きな楽しみになる。美味ければ過食し、不味ければ愚痴をこぼす。日に三度熱き飯を食し、この上何の不平があるのか。報恩感謝せよ。

また、宥されてゐるとはいへ、大齋小齋も守らう。減食、斷食によつて神への愛を増してゆかう。

土曜

明日御ミサがあるので、朝食後外科風呂に出掛けた。浴場は盲人や外科の多い重症者でこつた返し汚れた繻帯やガーゼが散亂して、湯の中には膿汁の滲みついた膏藥が幾つも浮てゐる。入院當初は變色しなくずれ切つた裸形の同病者に混つて、入浴する事がどうしても出来なかつた。

私は朝日が溜つてゐる乳白色の湯づらを眺めながら、何とはない心の平安を覺えた。隠れ住んでゐる者や浮浪中の病者は、こんなにのびのびと入浴する事など思ひもよるまい。支那の癩者は船もるとも海底に沈められたといふのに私達は本當に恵まれてゐる。

盲人達は互に背中を流し合つたり、肩を叩き合つたりしてゐる。足の疵を濡らさぬ様に持上げ湯槽につかつてゐる者、義足の手入をしてゐる者。浪花節をうなつてゐる者もあり「水ぬるむ、水ぬるむ」と頻りに苦吟する者もある。傍で頭の禿げた盲人が、膏藥のとれた額に柘榴のやうに口をあけた傷から血膿のしたたるのもかまはず、手拭で傷口を擦つてゐる。私はぞつととして盲人の側から離れた。

盲の友よ許し給へ。自分のものなら汚物でも意味ありげに見るくせに、君の膿汁を身ぶるひしてゐるとは。私は自分の魂から流れ出てゐる膿汁に氣づかぬ心の盲人です。

日曜

神父様に告解しながら、ふと私の鼻の臭氣が氣にかゝる。神父様に御迷惑ではないかしら。

だが限りなき愛でいらせられる天主様の前に在つては、癩者も乞食もない、みな一様に愛子である。

天主様は肉體から發する悪臭よりも魂の悪臭を最も忌み嫌はれる。病氣の事など考へて、どうして完全

な痛悔が出来よう。

天主様、私を愛してイエズス様の御體をお授け下さいました事を永遠に覚え、貴方に私の凡てを獻げ、生涯そのお恵みにお報いする事をお約束いたします。

月曜

ロザリオを繰りつゝ踏みゆく菅原やうぐひす寒く笹鳴きにけり
蠟涙のひそやかにしてサンタマリア机に落す影のしづかさ

火曜

晝食後、義弟と一緒に祭壇をつくる。六畳間一つが私達家族の寢室、茶の間、書齋、外科室でもあるので恰好の場所がない。結局、北窓の上部に造る事にした、

中央にコツサール神父様から戴いた十字架を掲げ、その下に聖心の御繪、両側にマリア様とピエタの額、手前に岩下神父様御母堂から戴いた聖母の御像を納めた。祈の時には窓にカーテンを引く事にする。私が技師で義弟が大工で飾師の役である。祭壇はできた。私達の部屋は燦たる御堂になつたのだ。義弟よ、妻よ、心を盡して祈らう、今こそ。

金曜

コツサール神父様より來信、公教神學校の皆様が私の『癩者の父』を読んで、不幸な父の爲に御ミサを獻て下さつた由。何たる恩恵、感激。

天主様、父に賜れるこの大いなる恵みを感謝し奉る。冀こひねがはくは御受難のイエズス様に依りて、父の罪が贖はれんことを！

土曜

朝食後、入浴を済ませ、暫く頬白を掌にのせてたはむれてみると長兄より速達。父死亡の報知である。妹に手紙を読んで貰ひながら私の心は激しくわななく。手が震へるためであらう、頬白が頻りに繃帯の指にたはむれ掛る。無心の小鳥よ。

月曜

人は死を持つて生れ、死を棄ててとこしへの生命に至る。

死は天主と一致するその日まで私の生命を大切に保管してくれる倉庫である。

又、死とは産湯のやうなものだ。これに浴して人は始めて御父おんちちよ天主の御手に抱かれる。

死とは何と親切な同居人、善良な友であらう。日々の慰めの力、爽かなその蔭の憩やすみひよ。死の裡うちにのみ恒に、眞の安息は在る。

（「聲」昭和十六年三月号）

種まく人達

日

朝靄が深い。冷気がシーンと身にしみる。踏む土のやはらかさ。

太陽の光はまだ地に届かない。林の梢だけが乳白色の中にほの黒く連なつてゐる。私のまはりを飛交ふ小鳥。朝の静かさを裂くものは、それらの歌聲だけだ。掌に覚えるロザリオの冷さ

私はふと立止る、この愉しさは何故だらう。

私の裡に住み給ふ天主、主の懐に憩ひ、主の息吹きの中に休らふ私。私という癩者の存在は、これなくしては解決され得ない。幸ひなる者、主の住家すみかなる私よ。

私はまた歩を移す。太陽が靄を縫つてさつと光を落す。林の中が急に明るく、生々かがやと耀き渡る。イエズスが復活し給ふたのは或ひは斯このやうな朝であつたかも知れない。

私はいつか林をぬけ、葡萄園の下の小径を歩いてゐる。靄は次第にうすれてゆき、緑の下草が點々と青い。私は清浄な生命のふくらみを覚える。

死の桎梏かせくだきて御墓ひらき

主はよみがへりぬ

アレルヤ、アレルヤ、アレルヤ……

Kさんであらうか、綺麗なソプラノだ。納骨堂の境内らしい。頬白が足下の草叢から幾つも舞立つ。私は路傍に佇む。

曰

愛の深い天主様。あなただけ見奉ることの出来る私を盲にしてください。あなたの御おこゑ聲だけ聞える私を聾にしてください。あなたとだけ語ることのできる私を啞にしてください。

曰

朝から周囲が何となく騒がしい。また逃走患者でもあつたのだらう、と私は別に氣にとめなかつたが、朝食後、隣室のMさんが、いやあ凄い凄いと奇聲を上げながら、入つて来て、×舎の盲人が昨夜便所で縊死いしを遂げた事を告げた。窓の金棒に帯をかけ、窓から外にぶらさがつたのだ、まだ検死が済んでゐないから、今なら見られる、と云ふMさんの聲に應じて、居合せた人々は、そらいけ、とばかり、どつと歡聲をあげて飛び出して行つた。

私は曾て下水堀に入水者があつた時の光景を思ひ出す。それは或夏、散歩がへりに其の場に來合はせたのであつたが、警防團員に依つて引上げられた投身者は、荒蕪の上に寝かされ、医師や看護手が頻りに人工呼吸を施してゐた。近くの高い岡の上に集つた見物人は、弥次を飛したり、煙草を吸つてゐた。「うまく助かればいいな」

「折角死なうと思つて、飛込んだのだ、何も本人の意志に逆つてまで、蘇生させなくてもよささうなものだ」

議論はまちまちであつた。私は投身の理由が何であれ、うまく助かつてくれればいゝと思つた。本人は蘇つた場合、或ひは人々の行爲を呪ふかもしれない。然し、死なうとする者に生を冀ふのは温い人情であり、人間愛の發露である。我々人間が心をつなぎ、家庭や社會を形成してゐるのも皆この眞情故にある。

こゝでは、人が變つた死にかたをすると、すぐ皆が見物に出掛けて行く。それは死者に對する大きな辱めであり、良心的に見ても甚だ不遜不徳の戒むべき事である。不思議なことに此の見物人の中から往々次の自殺病患者が出る。これは癡院のみの特殊な現象かどうかは別として、これには深い意味があるやうに思ふ。皆が出払つた後、私はなす事もなく、ひとりぼんやりしてゐた。

癡院には何故自殺者が多いのであつたか。我々癡者が一日生き長らへれば、それだけ國家や社會の負擔を重くするのは事實であるが然し、自殺はこれにも増して國家や社會の恩恵に對する大きな侮辱である。眞に恩恵を知るならば、却つて療養を全うしなければならぬ筈である。死ぬほど苦しかったら、なぜ生きたいのだらうか。耐へられぬ苦みといふやうなものは有り得ない。また理性的に自殺といふやうな事も詭辯に過ぎない。私も入院以前に、私の生存は意義なしと斷定し、纒々自殺を企てたが、後になつて考へると、そんな場合の理性といふものは一人道化の感傷に過ぎなかつたことに氣がつく。

苦惱は力となり得ても決して自殺の對象となり得ない。石の上にも三年といふ句があるが、たとへ三年を三十倍したとて有限の苦痛ではないか。パスカルを引合にだすまでもなく、有限の苦惱を賭けて無限の幸を贏^{かちえ}る爲に少しばかり苦むのは當然である。どんな場合にも苦惱を避けてはならない。苦惱の中にこそ身を留むべきである。聖書にも「神は眞實にて在^{まじまじ}せば汝等の力以上に試みらるゝ事を許し給はず、却て堪ふることを得させん爲に、試と共に勝つべき方法を賜ふべし」とある如くである。

日

晝食後、重病室にHさんを見舞ふ。Hさんは半年程前、腹膜炎を併發して入室したが、最近は殊に重態に陥り、夜間は友人達が交替で附添つてゐる。重病室はいつ來ても重々しい氣分にさせられる。二十箇餘りの寢臺には、癩といふ大きな疾患の上に、更に結核や肋膜、胃腸病を併發した人達が呻吟してゐる。恰度Hさんの寢臺では受持の醫師と看護手が、尿の排泄に取掛つてゐた。友人達が四五人沈痛な面持でその枕頭を取巻いてゐる。醫師は手なれたものやはらかさでゴム管を差込むのであるが、尿道が刺戟されるのであらう、Hさんの口から苦しい呻きが洩れる。Hさんの身體は氣味悪く浮腫み、殊に腹は物凄くふくらんで、みるからに痛々しい。尿はでない。醫師は看護手に何か私語してゐたが、看護手はうなづいて出て行き、すぐまた醫療器の箱やフラスコを抱へて戻つた。最後の手段らしい。Hさんの横腹に太い針が刺された、針の頭にはゴム管が附いてゐて、その口はフラスコにあてがはれた。人々は息を呑んで見守つてゐると、やがてゴム管の口からフラスコの中にたらたら雫が落ち始めた。私はほつとした。これでいくらでもHさんの苦痛がやはらいでくれゝばいゝ。ひつそりと静まり返つた病室に、フラスコに落ちる尿の音だけがちよると響いた。

私はHさんの枕頭まくらを離れた。隣ベッドにはKさんがある。彼は盲めくらで聾つんぼで啞おしである。そのうへ、全身が麻痺してゐるので、肌はだに文字を書いて應答することさへ出来ない。苦痛を訴へることも出来ず、喜びを告げる術もない、それは生涯石の様に黙しつづける息づく屍しかばねに等しい。

何が故に斯く苦み、何の罪あつて斯く病まねばならないのか。或者は、親の罪が子に報いたといひ、前世の罪の罰、因果應報だといふ。或者は現世は公平であるから來世の要なしと嘯うそぶき、永生を信ずるの

は神秘家か詩人の夢想に過ぎないといふ。愚論を吐く者は癡院に来て一度この現実を見るがよい。罪業輪廻の臆説や有限の物質で、この現実がどう割切れるといふのか。どんな高遠な哲學も、萬能を自負する科學も、曾て一人の癡者すら救ひ得なかつた。救ひ得るものはただ宗教あるのみ。キリストの贖罪これである。復活と永生なくして、癡者の人生とその存在は解決されない。われわれが勇氣と力を以て苦惱のなかに止まり得るのも、血を以てこれを感じればこそである。

曰

Hさんの遺骸を火葬場に送りて詠める歌

軋り音も寒く柩ひつぎのすべりいり大き竈かまの扉と今は閉ざされぬ。

曰

朝からいい天氣だ。茶を飲んである私の耳に雲雀の聲が聞えてくる。軒端の籠の頬白も頻りに高音を張つてゐる。朝食後、ロザリオを持つてぶらりと散歩に出る。風もない。一足毎に踏む土のやはらかさ。草は萌え、樹々は芽吹き、麥畑からは雲雀が幾つも舞立つては天へ鳴きのぼる。あゝこれら厳しい冬の殻を破つて躍り出た季節の聲。二間ばかり前の麥畑から雲雀が一羽、勢よく舞立つた。それは弾み上つた鞠のやうに、私の眼にも臙に見えた。忽ち空いっぱいひるがる歌。こんなのかな日に私も昇天したいものだ。あの雲雀のやうに、御父おんちち天主の榮光を高らかに謳歌しながら。

日
苦みが増してゆくことは、それだけ主の愛が自分に對して深まつたことを意味する。故に苦しみを真珠のやうに一つ一つ愛さなければならぬ。

日
慰安畑を作ることは私達病者の大きな喜びの一つである。午後から義弟と馬鈴薯を播く。珍しく季節風もなく、空に轉る雲雀の聲がのどかだ。あちらこちらに種をおろしてゐる友達の姿が見える。

彼等は繃帯の手に鍬を取り義足をいたはりながら肥桶を擔ふ。そして春は馬鈴薯、夏期にはトマトや胡瓜、茄子、西瓜など、秋季には白菜や大根などを作る。患者達は種をおろすと、もう芽生える事を胸躍らせて待ち、黒土を破つて、萌え出る生命の可憐な姿を見るとき、彼等は涙を流さんばかりに喜ぶのだ。さうして朝な夕な畑に下立ち、草を引き、肥料を添へて、その成育をいたはり愛する。土に親しみ生きるこれら病友の姿を見るとき、此處にも遍在せる神の限りない慈愛の御手を思ふ。私達は既に心癒されたナアマンでありシモンである。義弟が畝を切つてゆくあとから私は種をおろしてゆく。眼の悪い私は、このうつむき仕事に直ぐぼうつとして何も見えなくなつてしまふけれど、一畝の中に二三度腰を伸し、眼をつぶつて又とりかかる。おろした種の上に堆肥を置き、その上に下肥を施して土を被せ、鍬で叩いてゆく。

種を播くといふことは、何と愉しい仕事だらう。後には少々の手入れと喜びの収穫を待つばかりだ。悪い種は芽生えず、良き種は死して何倍もの實を結んでくれる。一つの種をおろすにも、何と多くの教訓と、愛と神秘的な啓示が隠されてあることだらう。

金券物語

(「聲」昭和十六年四月号)

院内は金券制度になつてゐて、入院した者は凡て金券を使用する。金券は、壹錢、五錢、拾錢、五十錢の四種はブリキ製、壹圓、五圓の二種は荷札に金額、病院名等を印刷捺印したものである。ブリキ製の方は、壹錢、五錢が圓形、拾錢は楕圓形で、いづれも中央に穴が開いてをり、金券何錢の文字が浮出しになつてゐる。拾錢券を患者達は柿の種と称してゐる。五拾錢券は角形で厚みもあり、少々威厳がある。これらの中で最も金券らしい感じのするのは五圓券である。最高の物だけに、全體のおもむきがどつしりしてゐて、上部の札の穴にはこよりが通してある。入院した當時私はこれらの金券に對しどうしても錢と云ふ觀念が持てなかつた。何だか子供の手すさび品のやうで、つひその價值を輕んじ、浪費しがちであつた。壹圓を渡して、それに相當する品物を買へるのが何となく不思議な氣がしてならなかつた。これは私ばかりの感じでなく、入院當初は誰もが経験するらしい。

金券については色々な思ひ出がある。私が入院してまだ間もない頃、病院始つて以來の不幸な珍事が生じた。それは一患者の壹圓金券偽造事件である。事が發見されたのは偽造金券がバラ撒かれて、一年も経過してからであつたから、被害も相當大きな物であつた。偽造した男は社會からの大工職で、なかなか腕もいと定評があり、院内でもその方面の仕事に従事してゐた。私と同縣の者であつたから、當時は私ばかりでなく、他の同縣人達は大いに肩身を狭くしたものであつた。その男は歸省した時に地方

の印刷所に依頼して二千枚程作造して來、折目のついてゐない新しい金券を持つて行つては、賣店や人々から釣銭を貰ひ、作つただけの金券を全部取替へてしまふつもりであつたらしい。然し、こんな事が幾ら細心の注意と奸智の働きの下に行はれたとしても、何時まで人々の眼を隠し通せるものではないある時、不圖した事から事務員の一人が、壹圓券の券の字の右下に伸びる一線に差違のあるのを發見した。どうも怪しいと云ふ事になり、他の方面を調べてみると、果せるかな、あちらから三枚、こちらにも五枚と云ふ様に偽造金券が發見された。事の意外に驚いた院當局では直ちに賣店その他と極秘裡に連絡して、犯人の捜査に努めた。そんな折だつたので、急に郷里の妻子に對して送金を始めた彼が怪しいと云ふ事になつた。送金の場合、彼はたいてい本物の金券を依託したが、賣店に對しては定つて壹圓券を使用した。それは見たところ違つた様にも見受けられぬが、仔細に調べてみると、故意に皺くちやにしたり、汚したりした痕跡があつた。彼は釣銭を取るのが目的なので、買物も拾銭そこそこのものであつた。

捜査員が彼の居室の戸棚を調べ上げると、蜜柑箱にぎつしり詰つた、まだ印刷の匂の生々しい壹圓金券が發見された。彼は即時監房に繋がれ、間もなく退院處分にされた。彼一個人の始末はついたが、後には偽造と本物の整理、被害の調査等をしなければならぬので、院内は蜂の巣を突いた様な騒ぎ様であつた。二千枚も使用したのであるから、たいていの者の手許に一枚や二枚の偽造券が紛れ込んである事は確かである。よもやこんな事件が起きようとは夢想だにしなかつた人々の驚きと感嘆は意外に大きいものであつた。中には偽造者を素晴らしい天才肌の男だと感嘆する者もあつた。然し、考へてみれば、荷札に壹圓と印刷するだけの至極簡単な物であるから、この位偽造し易いものもない。正貨さへ偽造する者があるのだ。人々が餘り善良すぎた故、驚き、感嘆するのだが、要するにかの男の才智があらぬ方

向に伸びすぎただけの事である。

事件後、これまでの壹圓金券は全部院當局の新製に依る金券と交換された。新しい壹圓金券は荷札を改め、體裁もよく、印刷も鮮明に細密で、舊金券に比して遙かに風格を備へてゐた。當時、私は不自由者の附添夫をしてゐたので、病人の金券を全部取揃へて交換して來たが、どうしたわけか、交換期間後になつて、ある盲人の風呂敷から舊金券が一枚出て來た。何分期間後であつたから、私は事務分室に出掛けて事情を話し、病人の物であるから何とか交換して貰ひたいと依頼した。その結果、願書と共に提出せよと云ふ事になり、私は早速願書を作成し、金券と一緒に差出したが、願書の書方が悪いと云ふ理由で却下された。仕方がないのでそのまま持帰り、私は何時ものやうに封書てのひら毎掌てのひらの中にまるめ火鉢に投込んでしまつた。私は其の頃紙片は一切火鉢にくべる悪い癖があつた。病人達からよく注意されたが、なかなか改まらなかつた。その時つひうっかり投込んだのだが、封書がばつと青い焰を上げて燃上り、半ば燃えた頃になつてから、私ははつとして思はず色を失つた。願書の文句ばかり練つてゐた私は、封書の中の金券を出す事をすっかり忘れてゐたのだ。しまつたと思ひ、慌てて火の中から封書を拾ひ上げ揉消したが時既に遅かつた。荷札の穴を少し残したのみで、金券は燃えてしまつてゐた。不注意と悪癖の報いである。不自由な病人の、それも乏しい金であるから、私は心よく赦してくれた病人の寛大さを有難く思つたが、償ひをして深謝した。以來、火鉢に物を投げ入れる私の悪癖は改まつた。自分の不注意とは云へ、金券偽造事件の飛ばつちりはその終末に於て、到頭私の所にまで廻つて來た。七八年前の話である。

これは金券についてのエピソードである。不自由舎に權と云ふ朝鮮生れの男がゐた。彼は兩義足であ

つたが、構内掃除と云ふ作業を一つ持つてゐた。煙草も吸はず、間食もせず、不自由舎に来て二十年近い歳月を黙々と働いて、貯へた金券は密柑箱にぎつしり一ぱいあつた。それは文字通り第一つで掃溜めた貴い金であつた。金箱は戸棚の奥へ仕舞ひ込み、小出しの金は別に出して使つてゐた。ある年の秋季清掃デーに、彼はこのいのちの蜜柑箱を開けて仰天した。箱の中に鼠が巢を造り、赤裸の仔鼠が五六匹むくむくと蠢めいてゐたのである。金券は大半ぼろぼろに喰盡くされ、残りの物も尿が泌みて、すつかり汚れ切つてゐた。人々は非常に同情し、氣の毒がつたが、然し、彼は案外力を落さなかつた。唯仔鼠とその後苦心して捕へた親鼠は、鐵器の上で綺麗に炙り、醬油をからんで喰つてしまつた。後になつて聞いた事だが、彼は以前から青大將や墓がまの類を平氣で食べてゐたのだと云ふ。彼は二年程前に病名の判らぬ病で死んだ。

これも金券が産んだ悲喜劇である。半年程前にひどいかなつんぼのお婆さんが収容された。眼もかなり悪かつた。自分の意見は述べられるが、人の話は全然聞えぬし、手眞似も餘り解せないの、同室の人々はすつかりお婆さんを敬遠してゐた。何分音と云ふものが一切聞えないのであるから、従つて立居振舞もつひ荒々しくなるのであらう。食器やバケツなどもどしんと凄まじい音を立てて置くので、たいの器物が十日もすると底がぬけたり壊れたりしてしまふ。同室の人々が最も困らされたのは、お婆さんが物事に對して非常に僻む事であつた。眼が悪く、つんぼで雑居生活をするのであるから、お婆さんの身になつてみれば無理からぬ事だが、人の言葉がまつたく判らないお婆さんには、自分の思ひや感じだけが強く内心に響き、誰そのみを盲信する以外に手はないのであらう。私もお婆さんには度々閉口させられた。と云ふのは、私達が月一度しか與り得ない御ミサの朝にお婆さんはよくやつてくる。さ

うして私達が神父様に告解を聞いて戴いてゐる所に來ては、何かと話しかけたり、そこらに在る太鼓や鉦を誰に憚るところもなく、ドンチヤンドンチヤンと叩き出すのである。さうかと思ふと、御ミサを拜してゐる最中に何かわけの判らぬ事を怒鳴り乍ら、供物の菓子などを、私達の膝や手にのせて廻る。何にせよ自分では何も聞えないのであるからやる事凡てが非常に騒々しい。

お婆さんの僻心ひがみこころは益々昂じて、お婆さんは到頭精神病院へ移された。

ある日、お婆さんは大きな風呂敷包みを背負込んで、そつと病院を逃走した。附近の山林や村落を散々歩き廻つて、お婆さんはやつと××驛に通ふバスに乗込んだ。切て、乗込んだまでは良かったが、いざ下車と云ふ時になつて、お婆さんは病院の金券を出した、金券には明らかに病院名が記されてある。運轉手君は黙つて病院へ電話を掛けた。病院からは早速収容車がお婆さんを迎へに走つた。収容車に乗つてからもお婆さんはまだ氣付かず、故郷へ近づいてゐるものと信じてゐた。お婆さんは金券に對しては、こん度社會でもかういふ錢になつたんだと固く思ひ込んでゐたのである。やがて車が収容門に着き、白い消毒衣の事務員に迎へられると、お婆さんは始めて總てを理解した。さうして驚きの餘り、大きな風呂敷包みを抱へたままへたと腰を抜かしてしまつた。

金券についても一つ忘れ得ぬ思ひ出がある。それはつい先頃の事である。

その日は朝から武蔵野名物の砂風が吹きまくつてゐた。雨戸を下し、障子を締切つてゐても、赤い砂埃が間斷なく舞込み、畳と云はず、座布團と云はず、何もかも砂だらけ、マスクを掛けてゐてさへ息苦しく、氣分の悪い事ひと通りではない。それが春先になると毎日のやうに続くのであるから、實際殺人的な風である。この赤い風が雨戸を叩き始めると、誰もがさうであるやうに、私は何をする氣にもなれない。終日、火鉢の前に坐つたきりで、少しも心は落着かない。午後から映畫會があつたので、義弟や妹

達もみんな出掛けて、残つたのは私と頬白ばかりであつた。私は所在なさに頬白を部屋の中に放してたはむれなどしてゐたが、それにも飽いて、不圖、机の上の教會史の一冊を取上げた。手にしたとて自分で讀めるわけではないのだが、もう長い事本に親しみ慣れてゐる私には、唯木の匂ひや感觸だけでも心優しいのである。私が何氣なく本を取上げた時、ことん、と軽い音を立てて疊の上にくるげ落ちた物がある。何であらうと私は音のしたあたりへ、腹這ふやうにして眼を近づけた。明り窓から差込む光だけではどうにも判らないので、立つて窓の戸を一枚開けた。元の場所へ戻つて周囲を丹念に調べて見た。それは壹錢金券であつた。私は拾はうとしてそれをつまみかけたが、然し、ぼつてりと厚ぼつたく指先まで繃帯に包まれてゐるのでどうにも拾へない。私は何度も何度も試みた。やつぱり駄目であつた。右手左手と交互にやつてみたが、かの壹錢は私の無能を嘲ふ様に、平然と構へてゐる。私はナイフを出して、その尖で壹錢を起し、其處をすかさず捉へようとしたが、何分薄い上に小指の頭位しかないので繃帯が邪魔してどうしても掴めない。私の癩癩はそろそろ起り始めた。こんな物が拾へないなんて何て意氣地がないんだらう、少々情けなくなりながら、私はなほも懸命の努力を唯この壹錢に集中した。然し、結果は依然として同じであるばかりでなく、却つてむきになればなる程、こんどは眼先がぼつとかすんで、果はぐらぐらと眩暈^{めまひ}までして来る。このまま無理をすれば卒倒するに定つてみる。私はこれまでも何度かさういふ経験がある。眼が悪くなると、何か根つめ仕事をする^と直ぐ眼が充血して何もかも見えなくなり、頭がふらふらして来るのだ。まるで大の男が壹錢と角力を取つてゐる^{かつこ}恰好である。壹錢を笑ふ者は壹錢に泣くと云ふが、私の場合拾ひ得ずして壹錢に泣く方である。私はいよいよ最後の手段を取る事にした。私は疊の上に四ん這ひになり、口で拾ひ取る事にした。壹錢に狙ひをつけ口を持つて行くと、何處でどう距離の見當が狂ふのか、彼の姿は判らない。私は舌の先で疊の上をあちこち捜した。

砂がじやり、じやりと舌の先に溜り、口ばたまでべつたりくつつく。私は何度目にか、漸く舌の先に壹錢を尋ねあてたが、こん度は疊にびつたり張附いてゐて、いつかな動かない。私は頭痛を覺えて中止し、洗面所へ行つて含嗽うがひをして來ると、そのまま暫く黙坐してゐた。私はぐつたり疲れてゐた。悲しみと腹立たしさと情なさで胸の中はくすぶつてゐた。私はこんな詰らぬ事に貴重な時間を潰してゐる自分がひどく惨めな馬鹿らしい者に思はれた。落ちたら落ちたでいいではないか、みんなが歸つて來れば拾つてくれるだらう。何もこんな思ひまでして壹錢と角力取るにもあたるまい。私には詰らぬ意地がある。どうしても出来ない事だと知ると、その問題や對象も考へず、がむしやら粘り強く喰ひついてゐたい變な性癖がある。私は壹錢を諦めやうと思ひながら、然し、たつた今までの凡そ滑稽至極な恰好で、しかも躍起になつて努力してゐた自分の姿を思ひ描くと、どうにも壹錢が忌々しくてならなかつた。しかし私はまた斯うも思つた。これは決して無駄な努力、詰らぬ仕業しわざではなく、このやうな努力、このやうな苦業を積む事も、主イエズスに捧げる日々の小さな犠牲として、今の私には當然必要な事であり、癩癩や自我の強さを矯正する最もよい試煉しれんである、と。確かにこれはよい苦業よい教訓である。罪業深い自分にはこんなごく僅かの事にも苦しみを積まなければ、天國へ昇れないのである。人並の事は何一つ出来ぬ無力の自分であるから、やはり人並ならぬ苦しみをするのは當り前である。「天に昇るの道は十字架の道にて、即ち、苦しみの道」とあるが、私の十字架は一見無意味に思はれるこんな努力、こんな苦しみの中に在るのだ、また閑つぶしと見えるこんな苦業を、ひとつ一つ丹念にいたはり、大いなる忍耐と努力を傾けて、こつこつとやり遂げゆくことそれ自體が、療養を完うする事にもなるのだ、壹錢に對する努力、忍耐の裡にこそ、千金にいや勝る貴いものの心が秘められてゐるのだ。私は心が軽くなり、晴々とした氣持ちになつた。私はまた四ん這ひになり、舌と唇を動かして乍ら、じやりじやりする疊の上を舐

め廻した。「主よ、この罪人を憐れみ給へ」と心の中で祈りながら……。

終

(「聲」昭和十六年五月号)

鶯の歌

×月×日

「ほぅ、鶯を飼つてゐるな、うむ、なかなかいゝ聲だな」

義父はさういつて吸付けた煙草を口へ持つて行き乍ら、長押に掛けてある籠へ眼をやつた。お天氣のいゝせいか今日は實によく鳴く。締切つた障子に鳴き聲がピンピン響く。

「よく馴れてゐますよ、私が口笛を吹くと、それにつれて鳴くんです」と私は立つて行つて籠を下し、机の上に載せた。戸を開くと小鳥はさつと飛出して繙帯だらけの私の掌てのひらに乗つた。

「うんこれはよく馴れたね」義父は感嘆して頷いた。

「まだ感心するのは早いですよ。本藝はこれからですからね」さう前置きして私は手をそつと口へ近づけ「ホホー」と軽く口笛を吹いた。掌の鶯はそれにつれて頸を伸ばし、冴えた高音を一聲響かせると、忽ち反轉して籠の中に舞戻り、ケキョキョキョと餘韻を轉ころもばせ乍らゆつくりはねまはつてゐる。

「これはたいしたもんだな」義父は大きく呻うなつた。小鳥はまた私の掌に乗つた。私はまた口笛を吹いた。吹き乍ら私はふと義父の熱い眼を感じてはつとした。義父が感嘆して眺めてゐるのは私の掌の小鳥

ではなく、顔や手足に厚ぼつたく繻帯を巻き重ねた私の變つた姿だらう。耳を澄ませて聞いてゐるのは驚の冴えた聲ではなく、喉を犯され始めた妻の細々と苦しげな聲であらう。

義父と義母とは殆ど毎月のやうに替る替る訪れてくれる。私は随分我儘も云へば無理も願つたが、實父以上に深い愛情と敬慕を覚えてゐる。健康體だつたら、と淋しく思ふが、それにもまして悲しいのは、義父が訪ねて來る度に私達の病が重くなつてゐることだ。

「驚は三段に鳴きわけるといふが、どうだ鳴きはわかるかな」と義父はまた煙草を吸付けて云つた。

「どんな風に鳴くのが良いのか、さつぱり解らないんです。ただ鳴き聲を聞いてゐれば楽しい方なので」

「それでいゝんだよ。小鳥を飼ふ心はなかないゝもんだよ。然し小鳥に飼はれてはいかんし、小鳥を飼ふのもいかんね。そのどちらでもあつて、どちらでも無い心、この心を會得する事は、人の道、人生の妙味を會得する事にもなるんだ」

私は一語一語を深く味つた。義父は急に思ひ出したやうに傍のスイーツケースを引寄せ、さあお土産だ、と一つ一つ包みを取り出して私達の前に置いた。

「これは母が作った栗漬、これは里芋を搗合せた粉餅、これはチョコレート、これは水飴、やうやく尋ねあてゝて買つて來たよ。お前の喉の薬にでも思つて……」

義父は、妻の手に瓶詰を渡した。ひと時なぎやんでゐた驚がまた冴えた高音を張つて歌ひつぐ。

義父は歸りの道々、私と妻に細々と身體の注意をした。

「療養しても甲斐なしと思つてはいかんよ。命を大切にしてくな」

義父の聲はうるんでゐた。昇永水の河を渡り、見返り乍ら事務所の方へ消えてゆく父の姿を、私は妻

と共に、涙の粒をそつと繻帯の手に消し乍ら何時までも見送つてゐた。

×月×日

重病室や不自由舎の病友に較べたら、私の苦しみなどまだ甘い。ほんの闘病の序に過ぎない。これからの五年十年十五年が眞に苦惱の裡にとどまり、ヨブの如く神の栄光を現す時なのである。そんな行末の事を考へると私は云ひ知れぬ力が湧いてくるのを覚える。きつと闘つてみせる。きつと勝つてみせる。何か逞しいものが内から盛上つて来る。これが主イエズスに依る信仰の力とでもいふのが、主よ、力と愛とを私に添へ給へ。

×月×日

死よ、そんなに私がかわゆいといふなら、さあ、お前の腕に力をこめて、もつとしつかり私を抱いておくれ。お前は親切な同居人、善良な友、さうして私の忠実な僕。お前がいつも傍に居てくれるゆゑ、愚者の私も、だうやら怠者なまけものにならずに済んでゐる。

やがて、私の生涯が終る時、私はお前の媒介で、御父おんちちの前に、輝く花婿となるのです。

×月×日

留守居るすゐする大きな子供われにとて妻が出掛けに呉れし菓子かも

午後六時から映画會があるので、義弟たちは夕食もそこそこに出掛けて行つた。眼の悪い私のために

茶器や菓子火鉢の側に用意して妻が出て行つたあと、急にひつそりと静まりかへつた部屋の中に、私は暫くぼつんと座つてゐた。隣室の者も近くの舎の者もみな出掛けたとみえ、聞こえるものは時計の振子の音だけである。私は手探りでマツチを擦り、家庭祭壇に灯をともした。

祭壇の聖心の御繪ごゑを看つめながら口ザリオを繰くる物静かな喜び

「ラボ二……」私は小さく呼んだ。

「主よ、愛の火を以つてわが心を焼き盡し給へ」

チンチンと湯がたぎつてゐた。私は茶を入れた。

病める眼の光りになじみこの宵はまさぐりつつも茶をたてにけり

私は立つて窓を開くと、ひんやりといい風だ。裏手の寮の灯が点々と淡く瞬いてゐる。

近くの禮拜堂からトーカーの砲聲ほうせいが聞えた。私は妻たちや夥おびたしい病友の姿を思ひ描いた。私はのびのびと心の膨らむのを覚え、窓の外に向かつて「ラボ二」と呼んだ。

×月×日

夕食後、縁先で萬年青の葉を洗つてゐると、小父さんと三郎君がやつてきた。

三郎君は今年七つの癩者の孤兒である。入院してまだ半年にみたないが父親は十年ほど前に入院し、盲めくらで咽喉のどを切開し、つい先頃重病室で死んだ。三郎が入院してまもない或日収容病室の付添夫をしてゐる友がつれてきた時、梨かなにかを與へたのが縁で、私と三郎はすっかり仲良しになり、それから少年

は毎日のやうに來て、食事も一緒にするやうになつた。三郎は額にちよつぱり赤斑紋があるきりだが、繃帯だらけの私を少しも嫌はず平氣で抱きついたり、肩車に乗つたりした。

私は水筆みづぶでを捨てて早速三郎君とつれだつて散歩にでかけた。垣ぞひの道まで來ると、私は少年を肩車にのせた。

「望郷臺に登らうよ。だけど、あたいを肩車にのせて、小父さん登れるかい。小父さんはのつぱらだけど、ひよろひよろしてゐるからな」

少年は頭の上から私の顔を覗き込むやうにして云ふ。私は桃畑を突切り、椎の並木を望郷臺へ向つた。「さあ、小父さん、しつかりしつかり」爪先き上りの細道を喘ぎ喘ぎ登る私に、少年は足をばたばたさせながら云ふ。どうやら頂上に出た私は思はずほつと大きく息をした。冷い風が汗ばんだ肌にかいた。一望に開けた眼界を見、少年はパンザイと叫んだ。私の眼には近くの寮舎の屋根だけが朧に見えた。遠く夕陽がもえ、あたりには早や黄昏の色が立ちこめてゐた。折柄ベトレヘムの園で打鳴らすアンチエラスの鐘が冴々と大空に響き渡つた。

「サブちゃん、一寸の間静かにしてゐるんだよ」と私は十字を印した。少年は祈が済むまでおとなしくしてゐた。

「小父さん、今の鐘は何處で鳴らすの」

「あれかい、天のお家で鳴らすのよ」

「天にもお家があるの」

「あるとも、とても良い所で、綺麗なお國さ、良い人ばかりゆけるところさ。サブちゃんも行きたいかい」

「うん何時ゆくの」

「死んでからさ」

「ぢや、つまんないなあ」

「つまんないさ、サブちゃんは死んでから本當のサブちゃんになれるんだよ。それに天のお家には、サブちゃんのお父さんやお母さんもあるんだよ」

「みんな天のお家知ってるの、正ちゃんや牧ちゃんは？」

「忘れてしまったお馬鹿さん」

「あたい家に帰つたら天のお家のこと正ちゃんや牧ちゃんに知らせてあげよう」

さういつて少年は暫く黙つてゐたが、小父さんと又言つた。

「天のお家はあの赤いところ？」

少年は眞赤に燃えた夕雲を指して見せた。そして私が肯くと、肩の上に立上がるやうにしてバンザイと叫んだ。私も大きく胸を張つて、「ラボニ」と叫んだ。

(「聲」昭和十六年六月号)

柿の木

こないだ知人から貰つて庭の隅に植ゑて置いた柿の苗木が、今朝みるともう五分程にやはらかな芽をつけてゐる。私は根づいた事を確めて思はずほつとした。

一木一草の類にも神に與へられた生命がある。それを枯らしてしまふのはすまなく惜しまれる。

この柿は知人が丹精して接ぎ木したもので、まだ私の背丈にも足らぬが、成長した曉には見事な實を結んでくれることであらう。これを植ゑる時、この木に實がなつたところを見て死にたいわね、と妻がいつた。根下に水をやつてゐた妹は、

ほんとな、切角植ゑたんだから私は一つ位味をみなくちやつまんないわと相槌をうつた。

まあ此の柿がなる頃には君達の方が納骨堂に納つてゐるよ、その時には俺がさんざん食つてから残つたのを供へてやるよ、まあそれを楽しみにしてるんだね。と恰度來合せてゐた友人が笑ひながら言つた。

さうかもしれん。然しそれでもいいよ。と私も笑い乍ら答へた。すると友人はまたいつた。

だが何だつて柿なんか植ゑる氣になつたんだい。そんな先の長い物よりトマトや西瓜でも作つた方が、勝負が早くていゝぢやないか。

いや勝負は遅くつても勝つた方がいゝよ。今これを植ゑて置けば、俺達が食へなくても、次の人達が食へるからね。

然しこの友の眼には、この小つぼけな苗木と、もう見る影もなく繃帯に包まれてゐる私や妻の姿を見較べて、憐れな事ともつまらぬ植樹とも映るのであらう。昨日まで讀書して居た者が今日ははや眼帯をして暗黒の世界に呻吟しなければならぬ。かと思へば夕方まで元氣に働いてゐた者が一夜の疾患に足を切断し、咽喉を切開しなければならぬ。

まことに癩者の病状は今日あつて明日を知らぬ激しい變り様を示すが、それかといつて唯目前の事の

みを追求し刹那刹那に生きるのは余りにも無雑でありすぎる。

明日の生命は誰も知らぬ。目前に迫つてゐる死すら感知する事は出来ぬ。それ故にこそ却つて生きる事が貴く愉たのしいのである。遠大な計畫も樹てられ、希望も持てるのである。明日を望み得ないなら、尚のこと今日を生きる事はむづかしい。十年二十年先が考へられぬなら、目前五分間の事も考へられぬ筈である。五分間も十年二十年の歲月も所詮は五十歩百歩である。明日の生命は知らずとも、明日のために今日を備へて生きるのは、人の踏むべき道であり、正しい心であつて明日を思ひ煩ふ心では決してない。

明日の爲に思ひ煩ふこと勿れ、明日は明日、自己の爲に思ひ煩はん、その日はその日の勞苦にて足れり。

私は柿の芽をあかず眺めた。この芽の一つ一つが愛の心の現れである。私が飽かずに眺めるのもまた愛の心からである。このひと時の私の生を、私はしみじみ貴く思ふ。

(「聲」昭和十六年八月号)

癩者への布教

癩院にも各派の宗團があつて少年少女に至るまで何れかの宗團に加盟するしきたりになつて居ます。これは一つの風習に過ぎず、人々も葬ひを出して貰はねばならぬ關係上仕方なく加入してゐるに過ぎません。無宗教の者が死んだ場合、葬儀は各宗團の籤引に依つて営まれ、當つた宗派の人々は勿論同室や

友人達が大変迷惑する。また新患者が収容された場合、各宗團では競つて勧誘に出掛け時には醜い争ひまで惹き起す始末であります。勧誘された者も家は代々何宗だがあの宗團から見舞品を貰つてしまつたから、どうしても加入しなければ悪いだらうと厭々屬してゐる者も少くありません。

癩者が眞に明るい人生を營み、その究極に於て救ひを見出し得るものは、宗教以外ない事は勿論であります。癩者が大半の者が宗教に對し、存外無關心であります。概して癩者は苦しむ事や物事をつきつめて考へる事を好まぬ様です。だから苦しんでまで、己の人生の解明や眞理探求などは致しません。絶えず肉體の苦痛に虐げられてゐる彼等にとつては、それ自體既に十分な十字架でありますので、その上精神的にまで苦しんで自己解明や眞理の把握など大して必要とも重要とも認めないのであります。一日が苦痛なく大過なく暮せたらそれで十分なので、これは目前の快樂を追ひ求める心理とも些か異なる様です。癩者は苦痛故に最も現實を忌避しますが現實以外肯定も致しません。この世の癩の生涯をどうにか切抜ける事が出来たら自分は勿論家族一同の負擔が消滅する、それでももう十分なのです。これらの心理をよく裏書してゐる事實として、浪曲や芝居、映畫の會には病室の病人までが無理をしてまで出かけますが心の糧となるべき僧侶や牧師の説教には事務員が鈴を鳴らし會毎に集め歩いても會衆は二十人甚しい時には五指に満たぬ有様です。昔の患者達は坊さんや牧師が來ると我先に集ひその説教に隨喜の涙を流したさうであります。現在では凡そ正反對であります。癩者に布教するならその都度パンを一袋づつ與へなければ駄目だと友人の一人が笑ひ乍ら云ひました。

私立療養所や宗教病院などには院としての立派な指導精神があり、それに依つて患者を一つの方向に導く事が出来ませんが、官公立の病院にはその指導精神が缺如して居り、宗教も多種多様で、一つの精神に向つて歩調を整へる事など到底期しがたい所です。本院などもその點では甚だ放任的態度を取つて居

ります。何等かの目的方法で患者を育成指導するのが當然ではないかと思ひます。

私共もお米の配給制ですが、靈的パンの配給制は私共の魂を枯渴させます。牧者と小羊はもつと縷々相接しないなら茨の中に播かれた私共の信仰を保持して行く事は到底不可能であります。癩者の前に長い説教は無用です。彼等の琴線に直接感受される一片の眞の愛、血の一言が必要です。また苦痛や煩瑣を最も忌避する癩者の布教には精神的慰藉と同時に、肉體的慰藉が必要であらうと思ひます。

〔聲〕昭和十六年八月号

癩者の改心

友への便りにかえて

あなたのお言葉は私を大変淋しくさせました。それはあなたが、私の日頃抱いている考へについてお判りにならなかつたからではなく、あなたに判つていただけでない私の信仰の弱さのためです。

「私は癩になつた事を深く喜んでゐる。癩は私の心を清澄にし、私の人生に眞の意義と価値を與へてくれた。癩によつて私は始めて生き得たのだ。私を選び給ひし神は讃むべきかな。」の私の言があなたにはどうしてもお氣に入らない様ですが、私が癩の疾患を喜ぶのは、苦痛を人生の正しい条件として肯定し、苦痛を愛するが故であります。

あなたのお手紙の中で、それは負け惜しみだ、心では泣いているくせに、と云はれ、又、たいそう悟

りを啓きなすつたわね、と皮肉たつぷりの調子で申して居られますが、これはあなたの嘲笑の心から出たのではなく、寧ろ憐憫の情からのものと、私は善意に解しておきます。しかし、あなたのお言葉に対して全面的に否定します。

あなたは私の如き凡庸な人間が人生にとつて最悪の悲惨事であるべき不治の業病に罹りながら、却つてその疾患に、その境遇に限りない喜びを覚えるといふことが、健康者であるあなたには、何かあり得べからざる現象として映り、率直に承服し難いのでありませう。

これは一応無理からぬ事で、あなたばかりでなく、私の周囲の者、つまり同病者の中にすら癩者の苦痛が判らないのか、そればかりか家族の苦しみを思ふだけでも癩の何処がよいのか、と肩を怒らして撲りかねない剣幕で、私の鼻先へ拳を突き出すでせう。ごもつとも千万です。私だとて、そのようなことが判らぬではありません。

しかし、神は恩恵を奪ふことによつて更に大いなる恩恵を約束する。諸々の苦痛は謂はば、その約束の印です。神の愛は惜しみなく奪ふところにあることを人は案外忘れ勝ちではないでせうか。

譬へば、私の場合の一つを拾ひあげて見ますと、私は癩といふ世の人の最も忌み嫌う不治の疾患に罹つたが故に、カトリックになり得たのです。神との一致、救霊の道とその方法を與へられたのです。

或いはあなたは言ふかもしれない。癩にならなくともカトリックにはなれたかも知れぬではないかと。それは可能でありませう。その様な場合には、神はまた癩と違つた方法で私の救霊の道を啓示し給ふたかも知れません。神の摂理は偉大でありますから、その邊の所は測り難いでせう。

(「こづみ」 昭和二十八年十二月号に掲載された遺稿)

東條耿一

一九二二年(明治四五年)四月七日、栃木県生まれ
一九三三年(昭和八年)四月二一日、全生園入院
一九四二年(昭和十七年)九月四日死去、(三〇歳)

環眞沙緒子名の作品

昭和九年

- | | | | |
|-------|------|-----------|------|
| 寂寥 | (詩) | 〔山桜〕 | 一月号) |
| 恋の短章 | (小曲) | 同 | |
| 渚 | (小曲) | 〔山桜〕 | 二月号) |
| 洪水 | (詩) | 〔山桜〕 | 六月号) |
| 顔百態 | (詩) | 〔山桜〕 | 七月号) |
| 春夜詩抄 | (小曲) | 〔山桜〕 | 七月号) |
| 馬 | (童謡) | 〔蠟人形〕 | 九月号) |
| お面・神楽 | (詩) | 〔山桜〕 | 七月号) |
| 風船玉 | (童謡) | 〔詩人時代〕 | 七月号) |
| 母愁の秋 | (詩) | 〔山桜文芸特輯號〕 | |
| 蕎麦の花 | (小曲) | 同 | |
| キャンブ | (童謡) | 同 | |
| | | 〔山桜〕 | 九月号) |

誰かしら (詩)
秋三唱 (小曲)

〔野の家族〕では東條環名
〔詩人時代〕九月号
〔詩人時代〕十月号
〔野の家族〕では東條環名

東條環名の作品

柚の實 (小曲)
歸航 (母への手紙) (詩)
戀の紅糸 (民謡)
秋の朝 (童謡)
一本橋渡ろ (童謡)
蜜柑に想ふ (小曲)
晩秋を知る (民謡)
濱邊にて (小曲)
冬・断章 郷愁 (詩)
滑り台 (童謡)

〔山桜〕十月号) (〔野の家族〕
〔野の家族〕
同
同
〔山桜〕十一月号)
同
同
〔山桜〕十二月号)
同
〔山桜〕十二月号) (〔野の家族〕
〔詩人時代〕四月号)

昭和十年

- 病床漫筆（随筆）
病床・断片（詩）
買はれ人形（小唄）
雪達磨（童謡）
林檎（小曲）
やくざ節峠の唄（民謡）
階段（詩）
雨の音に想ふ（詩）
マドロス哀歌（小唄）
夕暮れ・小暮れ（童謡）
便り（小唄）
病床哀戀賦（小曲）
大境の子守唄（詩）
想ひ出（詩）
蚤（掌編）（東條準名で）
郷愁譜（詩）
愛人の歌（詩）
- 〔山桜〕一月号
〔山桜〕一月号
〔詩人時代〕一月号
〔山桜〕二月号
同
同
〔野の家族〕
同
同
同
同
〔詩人時代〕四月号
〔山桜〕五月号
同
同
同
同
同

- 春の悲歌(小曲)
 野道(小曲) 同
 秋刀魚を焼く女(戯曲) 〔山桜〕六月号
 日光ばやし(小唄) 〔山桜〕三 六月号
 春雨戀慕抄(小曲) 〔詩人時代〕六月号
 忍従の謝肉祭(詩) 〔山桜〕七月号
 合 圖(民謡) 同
 乳 房(詩) 同
 白鳩に寄す(小曲) 〔山桜〕八月号
 Chocolateのゆふぐれ(詩) 同
 ねがひ(小曲) 〔山桜〕九月号
 金婚式(詩) 〔詩人時代〕九月号
 酸漿の詩(詩) 〔山桜〕十月号
 ひめごと(小曲) 同
 子 供(詩) 〔山桜〕十一月号
 彼女とゆふぐれ(詩) 〔蠟人形〕十一月号
 祈り(小曲) 〔山桜〕十一月号
 槍(詩) 〔山桜〕十二月号
 花言葉(小曲) 同

海亀（詩）
ゆふぐれの中の私（詩）

〔蠟人形〕十二月号
同

昭和十一年

たそがれの魔術師（詩）
病猿の詩（詩）
葬列のあるくれがた（詩）
羽子をつく（詩）
葬列（詩）
気紛れ蟲（コント）
黒き馬車（小曲）
そんな夜（詩）
散歩（詩）

〔山桜〕一月号
〔山桜〕二月号
〔蠟人形〕二月号
同
〔山桜〕三月号
〔山桜〕三月号
〔山桜〕三月号
〔蠟人形〕三月号
〔山桜〕六月号

東條耿一名の作品

桐の花（詩）

〔山桜〕九月号

傷(詩)
ゆふぐれ(詩)

(「山桜」十月号)
同

昭和十二年

青鳩(詩) (「四季」一月号)
雨後(詩) (「山桜」一月号)
初春のへど 俗物の歩み牛の如し(随筆) (「山桜」二月号)
少年(詩) (「山桜」二月号)
靄(詩) (「四季」二月号)(「山桜」三月号)
望郷臺(詩) (「文学界」二月号)
椰子の実(詩) (「山桜」三月号)
誕生(詩) (「山桜」五月号)
舞踏聖歌 (詩) 同
霧の夜の風景に詠める歌(詩) (「山桜」六月号)
鞭の下の歌 (詩) 同
伴侶(詩) 同
心象スケッチ(詩) (「山桜」七月号)
別れて後に(詩) (「山桜」八月号)

夕雲物語（詩）
晩秋（詩）
樹々ら悩みぬ
臨終記（追悼）
国旗（詩）
北條民雄に贈る―（詩）
四季「十一月号」
北條民雄全集「下巻」
「山桜」十月号
同
「山桜」十二月号

昭和十三年

元旦スケッチ集（詩）
木枯の日の記憶（詩）
念願（詩）
鶯（詩）
夕雲物語 その二（詩）
孟蘭盆（詩）
「山桜」一月号
同
「山桜」九月号
「山桜」九月号
「山桜」十月号
同

昭和十四年

朝霧（詩）
友を祝し給はずば（詩）
「山桜」一月号
「山桜」二月号

明日への言葉(詩)

〔山桜〕三月号

白鳥(詩)

〔山桜〕四月号

微笑の詩(詩)

〔山桜〕五月号

一椀の大根おろし(詩)

〔山桜〕九月号

おもかげ(詩)

〔山桜〕十月号

女と趣味 (随筆)

同

療養日記(その一)(詩)

〔山桜〕十一月号

木魚三題(詩)

〔山桜〕十二月号

昭和十五年

療養日記 爪を剪る(詩)

〔山桜〕一月号

閑雅な食欲(詩)

〔山桜〕二月号

器(詩)

〔山桜〕三月号

駒鳥(随筆)

〔山桜〕三月号

奥の細道(詩)

〔山桜〕六月号

新庭雑感(随筆)

〔山桜〕八月号

義父房州の果實をたまふ

(短歌)

〔山桜〕九月号

霜の花 (小説)(小杉不二名で)

〔山桜〕十月特輯号

望郷台（小杉不二名で）
 散華（詩）
 静秋譜（短歌）
 蜻蛉譜（短歌）

同
 同
 同

〔山桜〕十一月号
 〔山桜〕十二月号

昭和十六年

天路讚仰（詩）
 癩者の父（手記）
 ルルドの引越（手記）
 枯木のある風景（詩）
 落葉林にて（詩）
 子羊日記（手記）
 種まく人達（手記）
 金券物語（手記）
 鶯の歌（手記）
 柿の木（手記）
 癩者への布教（手記）

〔山桜〕一月号
 〔聲〕一月号
 〔聲〕二月号
 〔山桜〕二月号
 〔山桜〕三月号
 〔聲〕三月号
 〔聲〕四月号
 〔聲〕五月号
 〔聲〕六月号
 〔聲〕八月号
 〔聲〕八月号

昭和十七年

草平庵雑筆 (手記)

〔山桜〕三月号

なぐられの記 (手記)

〔山桜〕七月号

病床閑日 (詩)

〔山桜〕七月号

訪問者 (遺稿) (詩)

〔山桜〕十一月号

愛徳会「いづみ」に掲載された遺稿

(昭和二八年)

癩者の改心(手記)

〔いづみ〕十二月号

東條耿一著作集

(故渡辺立子さんに捧ぐ)

平成十八年 三月二五日

編集 田中 裕

村井澄枝

印刷 川島義教

製本 ハンセン病図書館